千年迷宮の七王子SS
残雪のスティルメイト
01

01

新年が明け、最初の月が変わろうという頃――

マグナ・エンデトリア帝国皇帝、ユアン・ジュノー＝イグニスは重大な決断をした。

春が来て雪が融けたら、再び旅に出る。

行き先は北方のオウラード領首都アルビオ。そこで行われる新七侯の就任式に出席するための外遊だ。

◆

生憎（あいにく）の曇り空で、掃き出しの窓から入る光も弱々しく、朝の執務室は薄ぼんやりと暗かった。

日の昇らぬうちから侍従長が薪（まき）を足しておいてくれたので、執務室の奥に設えられた大きな暖炉からはときおり勢いよく炎の

はぜる音が聞こえている。暖炉の手前に大きな執務用の机があり、そこがユアンの主(おも)な仕事場だった。

前皇帝の体格に合わせて作られた椅子は少年の体には大きすぎたが、それでも彼は別のものに取り替えようとはしなかった。いつか自身につり合うようになればいいと思いながら、今日もそこに座っている。

実際にユアンの身長は毎日のように伸びつつあった。

体の成長に肉付きが追いつかず、体は薄く、その首はいまだほっそりとしている。髪は少し癖のある淡い色で、瞳はかつて滅びた皇家の血を色濃く映した空色だ。

十六の誕生日を迎えた去年の夏、辺境の島で生まれ育ったユアン・ジュノー＝イグニスはマグナ・エンデトリア帝国の皇帝に即位した。なんの準備も心構えもないまま、前皇帝の突然の死によって帝国を受け継ぐ身となったのだ。

共に重責を担(にな)う立場となった仲間たちも似たような年齢の若者ばかりで、もっとも年長の者ですら二十代半ば。

権力争いに巻き込まれて皇帝候補に担ぎ出されたユアン以外は皆、それぞれが自らの功績で選出されるほど秀でた若者であった。当然各自がそれなりの能力や知識は身に付けていたが、しかし、国を治める経験などは誰も持ち合わせていない。

仲間たちも自らの課題に四苦八苦する毎日だが、取り立てて実績も無いまま玉座に座ることとなったユアンはとくに、皇帝という地位の大きさにどうやって身の丈を合わせればいいのか、暗中模索の期間が続いていた。

だが即位から一年が過ぎ、さらに半年が過ぎ――そうやって日々を乗り越えていくうちに最近は焦る気持ちも少しは収まりつつある。

一見頼りないこの少年皇帝が世間の予想

よりは早く皇城という場所に馴染んできたのは、生来の前向きな性格のおかげだろうか。周囲の者が支えてくれていることに対し感謝こそすれ、ユアン・ジュノーは疑うことを知らない少年だった。その無垢な有り様こそが人を惹きつけ、彼自身を王者たらしめているともいえる。

今朝もユアンは微笑んでいた。柔らかく無邪気な、信頼を湛えた笑み。

机を挟んで立っているのは二人の背の高い青年で、彼らは兄弟だった。ユアンが外遊に向かうと決めた、オウラード領の古い家柄である貴族の子息たちだ。

年長の青年の名はロレンス・アクロイド。ユアンの親友であり、相談役でもあり、弱冠二十歳にして帝国の騎士団長を務めている。

十代の身で貴族最大の名誉職であるそれを引き受けたとき、ロレンスの心の中にあ

ったのは栄誉や大職が自分に相応(ふさわ)しいかどうかではなかった。ただ己がユアンの剣であること、それのみだ。

名誉職とはいえ、マグナ・エンデトリアにおいて皇帝の騎士は皇帝領を護る職業軍人を兼ねる。皇帝領を取り巻く『七領』――七つの衛星国には独立した軍隊がそれぞれ存在するが、規模は小さくともそれらと同じ役割を果たすことになる。ゆえに必然的に、退任までは皇城に身を預けたも同様の暮らしを強いられるのだが、その立場に身を置くために彼が支払った代償は大きかった。ユアン・ジュノー＝イグニスの騎士であり続けることと引き換えに、皇帝に次(つ)ぐ『七侯』の位を捨てたのだ。

七侯というのは帝国を構成する『七領』の主(あるじ)のことで、自領に戻れば王に等しく、中央においては各相の長として政権の一角を担う身分である。ロレンスが辞退したせいでいきなり空位となった『オウラード侯』

の候補として白羽の矢が立ったのが、彼の弟、フェイ・アクロイドだった。

彼はユアンと同い年の十七歳で、己自身がまだひどく未成熟な子供であるように感じていたし、かつて皇帝候補の一人として選出された兄ロレンスと比べても「自分はまだまだ足りないよなあ」と思うばかりであった。

その兄の説得を受けて、彼が大役を引き受けるとようやく決心したのが去年の秋のことだ。

もちろんしばらくは前代のオウラード侯であった伯父の力を頼ることになるだろうし、フェイ自身も領主としての心構えがいまだ充分であるとは言えないのだが――とにかく即位の日は一刻、また一刻と近付きつつあった。

――オウラードで行われる就任式に皇帝自ら出席する。

ユアンから意向を聞かされて、式の主役である青年は一瞬戸惑ったように目を丸くした。そのまま隣に立っていたロレンスと視線を合わせると、彼の兄は「大丈夫だ」とでも言うかのように頷いてみせた。

「陛下が俺の就任式に…？いや、兄上が納得しているなら俺は大歓迎ですが…」

大歓迎と言いながら眉を顰(ひそ)めたフェイに向かって、

「逆になにが問題なんだ」

と言い、ロレンスは少し胸を張るようにして腕を組んだ。わずかに高い目線から、深い色の瞳でじっと弟を見据える。

ロレンスは日頃から温和で礼儀正しい青年なので、普段威圧的なポーズを取ることはまず無い。彼にしては珍しい、加減のない態度は肉親への気安さからだろうと、ユアンは興味深く兄弟を見守った。

「問題っていうか、前代未聞っていうか…それって実現可能なんですか？」

ほとんど本能的に兄の圧力に抗ってフェイも胸を張る。

そばかすの浮いた頬、派手な赤毛。フェイ・アクロイドが兄のロレンスとそっくりなのは、馬鹿みたいに伸びたその身長だけだ。血が繋がらないのだから当然なのだが、それでも二人の佇(たたず)まいはどことなく生き写しのようだった。

そんな弟の抵抗など目にも入らぬようにロレンスは眉一つ動かさず、重々しく答えた。

「それが皇帝陛下の御意思ならば」

「兄上はユアンの願いをなんでもかんでも叶えたいだけでしょう！…ちょっとちょっと陛下！」

赤毛の青年はユアンを指(さ)して抗議の声を上げた。

「なににやついてるんですか！」

執務室の大きな机に肘をついて二人を見上げていたユアンは、慌てて身を起こした。

HARUNO ATORI HALYOU ©akawaiou

「いやあ、二人も兄弟喧嘩するんだなあって。こうやって君らを見ていると、ますますオウラードにお邪魔したくなるよ。二人の育った土地はどんなところなんだろうって」
「好奇心？好奇心なのですか陛下！」
　フェイは思わず叫んだ。
「いや、兄上もつられて微笑んでる場合じゃないでしょう。いいですか、ユアンがオウラードに観光に来るのは結構なことです。うちの両親もさぞ喜ぶことでしょう。しかしですね――」
「――皇帝が七侯を全員引き連れてひとつの領へ赴(おもむ)くことなどありえない、だな」
　背後から現れた人影に、ロレンスが目を丸くする。
「いつ戻ったんだ、ハンニバル」
「ハンニバル！」
　ユアンは椅子から飛び上がるようにして立ち上がった。

異国風の容貌を持つ青年が、執務室の入り口から大股で近付いてくる。護衛が彼を通したのは、その青年もまた皇帝の重要な相談相手の一人であると知っているからだ。

ハンニバル・モーガン――現在は七侯の一人タイタス・ラムに仕える身であり、同時にユアンの直属の臣下でもある。出会った経緯は複雑だが、今ではすっかり皇城にとってはなくてはならない人物の一人だ。

座っておけと手を振るのを無視して大きな机を回り、ユアンは彼を出迎えた。ハンニバルはやれやれと呆(あき)れたような表情になったが、ユアンの手を取ると腰をかがめ、形だけは慇懃(いんぎん)に臣下の礼を取ってみせた。

ユアンは彼の手を力一杯握り返した。ハンニバルに再会すると、いつも全身が心地よく緊張する。弱々しい皇帝だと思われたくない一心で、普段より背筋を伸ばすのだ。

「相変わらず元気そうだね」

ユアンは彼の顔を覗き込みながら言った。
「陛下も」
そう答え、ハンニバルはようやく唇に笑みを浮かべた。
浅黒い肌は教育係を務めている彼の主君にそっくりだったが、黒ずくめの装いにしろ、どことなく暗い瞳にしろ、太陽の子と評されるタイタスとはまるで対照的だ。
「新年以来っすよね」
とフェイがにこやかに言うと、ハンニバルは頷き返した。身分はハンニバルの方が低いが、フェイ自身が幼い頃から兄貴分と慕っているオーガスト・モーガンの、さらに兄貴分にあたる人物だという認識があるせいだろうか。七侯に内定した今も、フェイはハンニバルに対して目上に取る態度を崩そうとはしなかった。
「もしかして…タイタスも来ているの？」
ユアンは目を輝かせながらあたりを見渡

した。なにせあの盗賊上がりのルーメン侯ときたら神出鬼没で、まともな出入り口から現れるとは限らないのだ。
「残念ながら奴は窓の外にはいない」
　ユアンが執務室の掃き出し窓からバルコニーに身を乗り出すのを見て、ハンニバルが首を振った。
「あの馬鹿王子なら今日もルーメン城で好き勝手に暴れていることだろう」
「だろうな。タイタスが来ていたら今ごろ皇城全体がもっと騒がしいはずだ」
　ハンニバルの答えにロレンスが頷いた。
「ええ…？ハンニバル一人で来たの？」
「一人で悪かったな。タイタスにも書簡にしろと止められたんだが…この口ではっきりと伝えなければならんと思った」
「何を？」
　訊ねると、ハンニバルは黒い革手袋に包まれた指をユアンに向けて答えた。
「まさにそのオウラード侯の就任式に、我

がルーメン侯をお召しの件についてだ」
「就任式がどうかしたの？」
「我が領からはルーメン侯タイタス・ラム、及びその代理も含め、出席を断らせて頂く…そういうことになった」
　ええええなんでっと歳若い皇帝の声が執務室に響き渡る。
　――二月半ば。ユアン・ジュノー＝イグニスがマグナ・エンデトリア帝国皇帝に即位しておよそ一年と半年足らず。
　帝国に新たな難題が持ち上がったのは、皇帝を支える七侯の席がようやく埋まろうとしている矢先の出来事であった。

◆

「俺は…全員でオウラードに行くべきだと思ったんだよ」
　俯（うつむ）いたままユアンがそう言うと、
「その通りだな、ユアン。気持ちはわかる

ぞ。皆で行った方が楽しいものな」
「私も賛成ですよ」
「タイタスは俺が捕獲して連行しよう」
　と会議室の中で次々と声が上がった。
　夕方に招集した枢密院会議には宰相代理のイスカリオットをはじめ、ユアンの見知った顔がずらりと並んでいる。
　七侯でこの場にいないのは、自領に戻っているメサイアとタイタスの二人。正式な就任を控えたフェイとユアンの兄アデルも顔を見せていない。
　ただし体調を取り戻しつつあるザンと城を訪れていたハンニバルが久々に加わっていたから、このところの静かな会議に比べれば顔ぶれが華やかだった。
　議題は『オウラード侯就任式全員出席の是非について』。
　議長は本来は宰相であるメサイア・リードが務めているはずだが、彼自身が代理にと指名した人物、騎士団長のロレンス・アク

ロイドが今は皇帝の椅子の脇に立っている。
「はいっ議長！」
　手を挙げたのはオーガスト・モーガンだ。彼は一ヶ月ぶりに自領から戻ったばかりで、美しい海色のドレスに銀狐のコートを着込んだ姿のまま、ユアンから離れた末席に腰を下ろしていた。理由はそこが一番暖炉に近いからだ。
「ほんっと寒いわ皇城は。南国から帰ったばかりの身には辛すぎる」
「いいと言わないうちにしゃべり出すな」
　議長がぴしゃりと注意した。いつもながら年上の幼馴染みには厳しいロレンスである。
「暖炉の火もっと強く出来ない？」
　オーガストは身震いすると黒い毛で縁取(ふちど)られた銀の襟(えり)に小さな顎(あご)を埋めた。寒さに震えながら上目遣(うわめづか)いでユアンを見つめる姿は相変わらず可憐で、どこぞのご令嬢にし

か見えない。
「…まあそれはおいといて。あのさ、もちろん僕としてはユアンが行きたいのを無理に止める気はない。だけど七侯が全員同時に他領を訪ねるなんて前例がないし、考えられないことだ。皆そうそうあっさり賛成して良いのか？」
「だから、発言を許してないぞ…まあいい、どうぞモーガン卿」
「しぶしぶ許可をありがとうよ議長。だいたいさ、ギデオンとかはまず仕事をさぼる口実でオウラード行きを賛成してるだけだろ」
「そういうがな、オーガスト」
　深い赤の癖毛、顎(あご)にうっすらと髭(ひげ)をたくわえたギデオン・レッドフィールドは、先ほどから一心不乱に読み耽(ふけ)っていた書類をバサリと置き、かけていた眼鏡を卓上に放り出した。
　大の男が叩いてもびくともしないこの頑

丈なテーブルは、およそ二百五十年前に城に運び込まれたものらしい。書類で乱れた黒檀の天板には、彼らと同じように会議を開く当時の王朝の様子が彫られている。その彫刻の上を指でトントンと叩きながら、ソレム領主である彼は同僚のパルヴァ侯に向かって抗議した。

「秋の外遊では俺たちは大人しく留守役を勤め上げたんだぞ。今度こそユアンと遊びに…いや、陛下のお供（とも）という栄誉に預かりたいじゃないか」

「大人しく…だと？」

　と冷たく言い放ったのは、宰相代理のイスカリオットだ。この場で唯一、一人前といっていい年齢のこの男は、前皇帝の宰相だった経歴の持ち主で現在はユアンのお目付役を兼ねている。

　眼鏡の奥の鋭い目つき、薄い唇。後ろにひたりと撫でつけた髪も瞳の色と同様に情の薄さを思わせるが、心の内まで冷え切っ

た人物ではないことはユアンにもわかっていた。
「お前もモーガン卿も結局は仕事を放り出して、陛下の外遊に加わったのではなかったか」
「いやさ、あれは緊急事態で…」
　七侯としては先輩にもあたるイスカリオットの指摘に肩を竦(すく)めながら、オーガストがへへ、と半笑いを浮かべた。
「緊急事態だったのは否定しない。…たしかにあれは国家の危機というべき事態だった。結果的に私以外が皇城から離れたのはやむを得ない状況だった」
　イスカリオットは渋い顔でそう述べた。
「だが理由もなくあえて全員で、それもひとつの場所に赴(おもむ)くというのはどうかと思われる」
「それなんだけど…」
　ユアンが恐る恐る手を挙げた。ロレンスがすかさず「どうぞ、陛下」と発言の許可

を出す。
「なんで皆で行っちゃいけないの」
「警備上の理由だな」
　とギデオン。
「旅先で何かあったら政権が総倒れになるし、皇帝の代理も立てずに皇城ががら空きになったらどこの領軍が攻め上るかもわからないだろ」
　オーガストが手を擦(こす)りながら答えた。
「それに各領はあまり干渉し合わないというのがこれまでのエンデトリアだった」
　とオーガストの背後、暖炉の脇に立って様子を見守っていたハンニバルが言った。
「七侯同士が個人的に親密に付き合うというのは珍しくはないだろうが、公式の場ともなるとそうもいかない。それぞれの領はお互いに複雑な過去を抱えているし、その歴史は一代限りの七侯が拭いきれるものでもない。表面上は距離を取って、面倒が表沙汰になるのを避けてきたというわけだ」

「そんなに仲悪かったの、七領って…」
　呟きながらユアンが肩を落とす。
「そんなことはないですよ、ユアン」
　オクト侯のザン・オーデュポンが隣に座ったギデオンの居場所を探るように手を伸ばした。
　盲目から奇跡の回復を遂げたはずのザンだったが、相変わらず昼は光を避(さ)けて、大抵は瞼(まぶた)を閉じている。このところの療養生活でやはり以前よりは少し痩せているものの、容色そのものは舞台に立っていた頃の輝きを取り戻しつつあった。
　むしろ数々の事件を経て、ユアンと関係の深い――その特殊な身の上が明らかになった現在は、ますます神秘性もカリスマ性も増したと言われ、帝国中に熱狂的な信奉者が増えているという。
　男性にしては白いその手を恭(うやうや)しく取り、信奉者の一人であるギデオンが嬉しそうに握り返した。

「ほら、今の我々はこんなに仲良しですから」
　輝くような笑顔を浮かべたザンに、オーガストがうへえと声を漏らした。
「仲良しって…子供じゃないんだから手とか繋ぐなよ。あんたたちなんて噂されてるか知ってるの？」
「その男はわかっていてわざとオーデュポン卿とベタベタしているのだ」
　とイスカリオットが苦虫を噛み潰したような顔で、ギデオンを指(さ)した。
「実家が次々に押しつけてくる婚約者候補をはねのけるためにな」
「大変だね…ギデオン」
　ユアンが眉根を寄せると、ギデオンは慌てて友人の手を離した。
「いやいやこっちは大丈夫だ。自分でなんとかするさ。ユアンに心配かけようなんて思っちゃいないからな」
「まあ僕たちが仲いいのは本当だし、ぶっ

ちゃけそこしか取り柄はないけどさ…」
　とオーガスト。
「実際に秋の外遊の時には帝国が二つに割れて、騎士団や七領軍がイスカに向けて進軍したという事態に陥(おちい)ったのを忘れたわけじゃないよな？」
　オーガストの言葉に、ロレンスが答えた。
「たしかに帝国そのものは我々のように一枚岩とはいかないかもしれない。しかし…あのときのようにユアンは騎士団が護る。それでいいのだろう」
「…騎士団の能力を疑ってるわけじゃないし、もちろん僕もユアンの希望は叶えたいと思ってるよ」
　そう言い終わるとオーガストは毛皮の襟に再び顔を埋め、椅子に深く座り直した。言いたいことはもう言ったから、後は好きにしろという表情だ。
「…残念ながらモーガン卿の言うとおりだ。反対したい理由はあれど、陛下がそうした

いとおっしゃるのなら、我々には止めようもない」
　そう切りだしたイスカリオットの口調は重く、ユアンに考え直して欲しいという気持ちに溢れていた。
　宰相代理の憂鬱(ゆううつ)そうな面持ちを見て、ユアンは全てを話すときが来たのだと直感した。それはあの秋の外遊の事件から、ずっと胸に抱(いだ)いていた想いだった。
「議長、いいかな」
　ユアンがそう言ってロレンスを見上げると、彼はもちろんだとでも言うように頷いた。
「わかって欲しいのは…、皆でいるのが楽しいからこういうことを言い出したわけじゃないってことなんだ」
　もちろん、皆でいることが楽しいし、いつでもそうしたいんだけど。ユアンは付け加え、膝の上に置いた拳(こぶし)を眺めた。だけどそれだけじゃない。

「俺は…力不足で…。秋のイスカでの事件も止められなかった。沢山の犠牲者が出た。だから…皆の力を借りるしかない。一つの難問に全員で立ち向かう。全員のことを一人一人が受け止める。そうやって越えていくしかない…それがあの事件でわかったことだった」

「ユアン…」

ザンが囁(ささや)くような声で言った。イスカ領での出来事を思い出したのか、大切な弟を慮(おもんぱか)って辛(つら)そうに眉を顰(ひそ)める。

「だから今回も全員でフェイの就任を後押ししたいんだ。彼は一人じゃない。オウラードも独りじゃない。七領はいつも一心同体なんだってことを、この国の皆にわかっていて欲しいんだ」

ユアンは目を瞑(つむ)った。

「空いてしまった皇城が…誰かに盗(と)られるならそれでいいと思ってる」

「陛下！」

イスカリオットが抗議の声を上げた。
「ユアン、お前…」
とオーガストが立ち上がる気配がする。
「俺もそう思う」
そう言ったのはギデオンだ。
「たしかに俺たちは青二才だが、結束の固さなら今までの七侯を超える。初めからそうやって支え合ってきたんだ。その結束を見せつけることこそが、血統復古党(サングイニスト)のように国家転覆を狙う輩(やから)が再び現れることへの抑止になると思う。大切なのは城ではないからな。臣民に平穏をもたらすことこそが俺たちの役目だ」
「そういえば…今まで私たちの結束には誰も太刀打ちできませんでしたね」
ザンが笑みを含んだ声で言う。
「陛下」
間近から声がしたので、ユアンは目を開いた。目の前にロレンスが跪(ひざまず)いていて、ユアンを見つめている。

「城が国なのではない。皇帝無き皇帝領はただの土地に過ぎない。ユアンが居る場所こそが国なのだと俺は常々思ってきた。ユアンと七侯が共に有ること、それこそが帝国の心臓なのだと…人々に伝えよう」

友のまっすぐな瞳に勇気を貰い、ユアンは頷いた。

「皆で行こう、七領の隅々まで。それが俺たちのやり方だと思うんだ」

イスカリオットのため息が聞こえたので、ユアンは彼を振り仰(あお)いだ。

「ごめん…イスカリオット。また…面倒かけちゃうね」

「それも皇城の入り口を護るソレム領との関係が良好だからこそ、言えることだということを忘れないように。とにかく…旅先でもそれぞれが仕事を進められるよう体勢を組み直さねば」

眼鏡を取り、眉間を揉みほぐしながら首を振る。

「旅先で仕事させる気だよこの人…」
　とオーガストが嘆くと、それまで輝いていたギデオンの瞳が急激に光を失った。
「くれよ…休暇…」
「皇城に釘付けのままになるよりはいいではありませんか」
　と彼を慰めたザン自身も、やや気落ちした様子でため息をつく。
「そりゃまるごと観光というわけにはいきませんが…」
「みんな…！」
　ありがとう！と叫んでユアンは立ち上がった。
「じゃあやっぱり無理言ってでもタイタスには来てもらおう。タイタスなら俺の考えをわかってくれると思うんだよ」
　オーガストが「そうだな」とユアンの肩を叩いた、その時。
「皇帝陛下のお考えは承（うけたまわ）った。だがそれは不可能だ」

と暖炉の傍(かたわら)から声がした。ハンニバル・モーガンだ。
「ハンニバル…貴方、いったい何を」
「お前がタイタスを説得しろよな」
ザンとオーガストの言葉に、彼は首を振った。
「さっき言っただろう。七侯同士がプライベートでどうあろうが、領同士はそうはいかないと」
「どういう…ことなのハンニバル」
「タイタス・ラムが…あの馬鹿王子がただの我(わ)が儘(ままで出席を断ったと思っているのか？あのお祭り大好き男が…？そうじゃない」
「我が儘…じゃないんだね。説明しにくい…っていってたけど、してもらえるかな」
ユアンの言葉に頷いて、彼はようやく重い口を開いた。
「アマデウス・フロックハート、公(おおやけ)の立場で…つまりどちらかが七侯を辞めるまでは、もう二度と奴に会うことはないと。タ

イタス・ラムはそう言っている」
　珍しいことにハンニバルの声は少し掠(かす)れていた。いったん言葉を切り、咳払いをしながら彼は話を続けた。
「フロックハート卿は宰相としてもオウラード侯の就任式に同行せざるを得ないだろうから、今回は自分が出向かないようにするとの配慮だ」
　アマデウスというのはメサイア・リードの本名だ。帝国の北西にあるイスカ＝リンナム領の領主で、七侯の長ともいうべき宰相としてユアンを支えてきた青年である。秋に負った怪我や事件の後始末のために、宰相の責務は前宰相であったベテランのイスカリオットに預け、このところは領の内政にだけ集中していた。
　『二度と会わない』という強い否定の響きに会議室は一瞬静まりかえった。どの顔も、信じられないという表情だ。
「メサイアがどうかしたのか…」

言いかけたギデオンがなにかに思い当たったのか、ハッとして口元を押さえる。それ以上は表に出さず、彼は口を閉じた。

青い顔をしたギデオンを見て、ユアンは彼が何か知っていそうだなと考えた。あとで詳しく話をしてもらうことになりそうだ。

「メサイアとタイタスの喧嘩など珍しくはないでしょう。むしろ二人揃って大人しいほうが薄気味悪いぐらいです。顔を合わせるたびに、それこそ殴り合ってまでね。…それを会わないなどと、タイタスらしくない。何があろうと彼ならむしろ、一対一で面と向かって決着をつけようとするはずです」

ザンが言うと、またハンニバルが首を振った。

「今回はそういうことじゃないんですよ、オーデュポン卿。殴り合いで済めばそうしているでしょう」

「殴り合いで…済まない…？」
　ユアンは茫然(ぼうぜん)とした。もともとメサイアとタイタスは犬猿の仲で、だからこそ付き合いが濃いのだと思ってきた。あそこまでストレートに思いをぶつけ合えるのは、お互いを認め合っており、さらに遠慮の無い関係だという証拠でもある。殴り合っても次の日には肩を並べて歩けるような信頼関係を誰かと築いてみたいと、ザンなどはむしろ常日頃から彼らを羨ましがっているほどだ。
　その二人がなぜ――。
「一体何があったっていうんだ。喧嘩しながらもなんやかんや、あいつらは毎回助け合ってきただろ？言っておくがな…僕らも含め、簡単なことで壊れるような関係じゃないぞ？」
　オーガストがハンニバルの襟元を掴んだ。双方の身長差は大きいが、こんな時のオーガストは妙に迫力がある。

長年使えていた元主人に燃えるような眼で睨(にら)み付けられ、ハンニバルは視線を逸(そ)らした。
「私には…立場上どうしようもない。だからこうやってわざわざお前たちの知恵を拝借に来たんだ。私もあの馬鹿王子が唯一無二の存在を失うところなんて見たくはないんだよ。領主同士として決別せざるを得ないあいつらを…」
――なんとかしてやってくれ。
そう呟いた声は日頃冷静なハンニバルらしくもなく苦渋に満ちており、ユアンはぎゅっと心臓を掴まれたような気がした。

《02に続く》

千年迷宮の七王子SS

残雪のステイルメイト 02

02

「これは…なんと素晴らしい！」

驚嘆の声を上げ、メサイアは目の前の景色に酔いしれた。

「オクト城にこのような場所が隠されていたとは！」

そこは巨大な知の貯蔵庫だった。城の背後にある岩山を縦に貫くように彫られている伽藍（がらん）。明かり取り用に彫られた穴から陽光がカーテンのように差し込み、それが山の胎内に作られた白亜の図書館を青く浮き上がらせている。

図書館の表面には滅びたはずのイグニス文字が無数に刻み込まれ、円筒状の建物それ自体がまるでなにかの書物であるかのようにも見えた。

「貴方がそう言うのなら、ここにはそれなりに価値があるのでしょう」

まんざらでもないように答えたのは、かつてこの城の持ち主であったヒルダ・チェンバレンである。
「価値があるのはここに収納された書物だけではありません。この岩山そのものが、貴重な遺跡と言えます」
メサイアは革の手袋に覆われた長い指で、建物の壁を指し示した。
「岩盤をくり抜いた入れ子構造の様式は、神秘主義の影響が残っていたイグニス時代によく見受けられたものです。ただし現存しているものはほんのわずかにすぎません。皇城の地下に封じられていた宝物殿がこれとよく似ていましたが、あちらのほうが規模は小さかった」
口早に言い、メサイアは紫紺の瞳を輝かせた。
「そうしていると…年相応に見えますね、アマデウス・フロックハート」
彼の三倍近い年月を経てきたヒルダが目

を細めながら言った。アマデウス――メサイア・リードはこのオクト＝ノクテ領の北に接するイスカ＝リンナム領の主である。経験値を補って余りあるほどの才能の持ち主だが、二十歳（はたち）という年齢は家族を持つ元女領主の身からすれば、ほとんど孫にも等しい。

「立場もわきまえずはしゃいでしまいました。不意打ちのように訪れた私にこのような…ご厚意を示して頂き、感謝の言葉もありません」

「ザンからそうしろと手紙が来たのですよ。貴方は必ず我が城を訪れる。その時にオクト城の秘宝を見せてやって欲しいと…両国と二人の友情の証に」

「それは…」

　メサイアは目を見開いた。

（ザンが…僕のために…）

　彼は胸に手を当てると、老女の前に片膝を付いた。

「このたびは非公式な形になったことをお許し下さい。まずは個人的に謝罪に訪れるべきだと思いました。…公式の場では他領へ跪(ひざまず)くことは赦(ゆる)されない身の上ですので」

メサイアは頭(こうべ)を垂れた。跳ねていた髪がはらりと顔の横へ落ちると、天井から射す光が彼の顔に深い影を作る。

「この国の領主、七侯ザン・オーデュポンを我が領民の反逆に巻き込み、その身と心に重大な傷を負わせたこと、心からお詫び申し上げる」

岩山の胎内、古代の文字を宿した知の伽藍。その前庭で青年は膝を折り、元女王に跪いた。冬の青い陽光が新旧七侯の影を冷たい床に灼(や)きつけていく。

「…イスカ領主ともあろうお方が、簡単に跪いていいものではないわ。それは皇帝陛下のために取っておきなさい。それに私は代理を務めているとはいえ、すでにこの国

の王ではありません。謝罪するならザン…あの子に」

差し出された手を取り、メサイアは立ち上がった。そのまま彼の手を自分の腕に絡めるように導くと、ヒルダは出口へメサイアを促(うなが)した。

「正直言うと、あれはあの子の運命だったのではないかと思っているの。貴方とユアン・ジュノー＝イグニスに出会った瞬間に、すでにザンの身に起こることは決められていた…そんな気がしてならない」

彼ら八人が出会った千年迷宮城――そこでユアンは己(おのれ)が滅びた王朝の生き残りであると知ったのだ。

メサイアは「おっしゃる通りかもしれません」と頷いて、ヒルダの腕を取ったまま伽藍から伸びた階段を降り始めた。

階段は掘り抜かれた岩そのもので出来ており、そのままオクト城の空中回廊へと続いている。図書館のある洞窟から城までを

繋ぐ道を覆っている岩山の空洞には、自然のものだと思われる大穴がいくつか空いていて、周囲に積もった雪が中まで入り込んでいた。

内部を渡る二月の風は凍るようで、吹きさらしの回廊を渡る二人を嬲(なぶ)っていく。しかし君主たちの足取りは揺らがなかった。髪を踊らせながらまっすぐに顔を上げ、進んでいく。

メサイアがふと明るい南側に目をやると、大穴の向こう側の遥(はる)か彼方までルーメンの大地が広がっているのが見えた。そこに居る男のことを思うと、胸のどこかがちくりと痛むような気がする。メサイアは自らの気を逸(そ)らせるように、事件に話を戻した。

「私は子供の頃から、あのイグニスの神秘の血を求めてきました。それがユアンだと知って、必ず彼を玉座に付けるとこの身に誓った…」

だが第二子であるユアンには神秘の血は受け継がれていなかったのだ。奇跡を行える長子はすでに幼い頃に亡くなっていたと思われていた。
「しかしイグニスの長子は生きていた――まさか求めていたその者があのザン・オーデュポンだったとは…」
「それで貴方はユアンを捨て、一瞬でもザンに仕えようと思った？」
「！……」
メサイアが返答に窮(きゅう)するのを見て、ヒルダは慌てて謝った。
「妙な質問をごめんなさい。私はユアンが皇帝でよかったと思うわ。ただし大のザンびいきだから…そりゃあ彼がただの歌い手であった頃からね」
ヒルダはメサイアを見上げた。
「だから貴方が一瞬でもザンを認めてくれたのなら嬉しいと思ったのよ」
「…いつも認めていますよ。神秘の血がな

くとも、あの人は偉大です」
　メサイアがそう言って微笑むと、ヒルダも笑みを返した。
「あれは災いだったし、あってはならない事件だったわ。ザンがユアンの代わりに即位するなんて…見ていて奇妙なものだった。それに、これは私の個人的な願いだけれど、ザンにはやはりこのオクト＝ノクテ領の君主…私の後継者で居て欲しいのよ」
　メサイアは頷いた。
「ただあの時の即位式の貴方たちの姿絵が、このオクト＝ノクテ領内にも撒(ま)かれていてね」
　テロリストたちの手に落ちたザンが『真の皇帝』を名乗らされ即位した時、その脇に宰相として寄り添ったのがメサイア自身だった。おそらくはその時の二人の姿が絵が描かれ、即位の事実を知らしめるために犯人たちの手で他領にもばら撒かれたのだろう。

「その絵が今もこの領の娘たちの黄色い悲鳴の発生源となり続けているのよ」
　意外な言葉にメサイアは目を丸くした。
「黄色…い…」
「私は何十年にも渡り、領主としてこの国の芸術と文化を守護してきました。その結果なのかしら、オクト＝ノクテの領民は美しいもの、女たちはとりわけ美男子には寛容よ」
　二人は空中回廊を抜け、城の中へ入った。注意して見てみれば、入り口の観音扉を開く若者たちも、身に付けた制服もたしかに見目麗しい。
「だからいつでもオクト領へいらっしゃいな。次は我が領民に顔を見せてあげてね。姿絵などよりよほど美しいのだもの、貴方なら間違いなく歓迎されるわ、メサイア・リード」
　城内に入るとメサイアは彼女の腕から手を離した。

非公式な訪問に割いて貰えた時間はここまでだ。供の者に囲まれ、ヒルダは手を振った。

メサイアは一礼すると、奥の間へと消えていく元女領主を見送った。

◆

「どうでしたか、ヒルダ女王さま…いえ、チェンバレン卿のご様子は」

外套のフードで顔を隠したまま玄関口に回された馬車に乗り込むと、奥に座っていた青年が声をかけた。

名をユースト・ブランデル。メサイアが領主を務めるイスカ＝リンナム中央軍の将校であり、領主親衛部隊の一員である。

年の頃は二十台半ば。明るい緑の瞳に淡い藁色の髪。垂れた目尻といい、体格の良さといい、外見はちょうどフェイ・アクロイドの十年後といった印象だ。肩まわりがや

や大きいのは、彼の得意な武器が弓と投げ槍だからで、軍人らしくもなく後ろ髪を少し伸ばしている。

今回はお忍びの旅であったので、供(とも)はこの護衛と主治医の二人のみだった。そもそも病み上がりとはいえ、メサイアは自分の身を護ることにはかなりの自信を持っている。しかし周囲の者の猛反対の末(すえ)に、供を連れずにで他領へ向かうことは叶わなかったのだ。

ゆったりとした黒い革張りの座席に体を引き上げ、影のような漆黒の外套を引き寄せながらメサイアは答えた。

「前オクト侯はお元気であられた。相変わらず自らはあくまで引退の身だと控えめになさっていて、現領主ザン・オーデュポンの帰還を待ち望んでおられる」

オクト城の侍従がそっと扉を閉めると、鞭の音がして、そろそろと馬車が動き出した。

城の門から先には深い谷間を渡すように大きな橋が架かっており、その先はしばらく長い下り坂が続いている。橋に進み出たあたりから、六頭立ての馬車はぐんぐんと速度を上げた。

城の背後に隠されていたあのイグニス様式の大図書館を思うと後ろ髪が引かれる心地がしたが、前を向いて気分を切り替え、メサイアは外套の首元をくつろげた。

「お加減はいかがですか、殿下。我が領より気温が高いとはいえ、もっと厚着なさってもよかった」

と護衛の隣、メサイアの向かいに座る主治医が気ぜわしげに言った。

医師の名はディシトリアス・ゴア。年齢は隣のユーストとあまり変わらないが、目立つ印象の彼とは違ってどちらかといえば控えめな印象の青年だ。ダークブラウンの頭髪を短く刈り込んだ姿はどこか僧侶めいており、暗い色の瞳はよくよく見れば、エン

デトリアの古い血筋にときおり見られる濃い紫だった。
　ディシトリアスは少々変わった経歴の持ち主だった。メサイアと同じ《紅の光(ルブルムルクス)》という特殊な教育施設の出身者であり、その上部組織から脱走したという過去がある。医師としての腕は確かだし気性も穏やかな青年だが、少年だった頃のメサイアに命を救われたという因縁のせいか、やや主君を崇拝しすぎるきらいがあった。
「体調は悪くないようだ」
　そう言いながら目深に被ったフードを後ろに除(の)け、メサイアが顔をあらわにすると、二人の臣下は何故か目を丸くした。ディシトリアスの方は慌てて顔を背け、なぜか耳まで赤くなっている。
「いやだ…殿下、恋？恋なの…？」
　あっけにとられていたユーストが拳(こぶし)を口元に持っていき、裏声でそう囁(ささや)いた。
「もしやあの城に、素敵な出会いでも転が

っていたのです…？」
　体に似合わない乙女口調は彼独特の個性である。
　新興名家の長男でありながら出世が遅れていたのは、イスカの古い体質からユーストがはみ出し気味だったせいだと言われていた。ちなみに堅物である彼の姉のほうは先に少佐にまで出世して、現在は領主の親衛隊長を務めている。
「言っている意味がわからないな、ブランデル中尉」
　素っ気なく答えると長い足を前方に組み、メサイアは革張りの座席に深く背を預けた。
　外装も真っ黒な馬車は、紋なども一切付けず簡素な造りで、表向きは要人――それも七侯の一人が乗っているなどと気が付く者はいないだろう。ただし構造的には不意の敵襲にも耐えうるように堅固に造られており、内装も長旅に備えてそこそこは快適

なものとなっている。
　オクト城から続く長い門前坂を下り、馬車は城下町に入ったらしい。床に付いたステッキから、細かい石畳の規則正しい振動が伝わってくる。その大きな宝石の握りは以前あの盗賊が欲しがっていたもので、それを思い出すとまたメサイアの胸のどこかが微(かす)かにずきんと脈打った。
「また表情が曇られた…先ほどはこっちの目が潰れるかと思うほどお顔が輝いておられたのに」
　とユーストが残念そうに言った。
「出会いといえば…イグニス時代の遺跡を見せて頂いた」
　小さな窓から外を見やりながらメサイアは呟いた。
「あれはまさにイグニス以前のスコラの名残だろう」
「学校(スコラ)…ですか。そういえばオクト＝ノクテ領として独立するまでは、このあたりは

ルーメン領の一部だったとか」
　医師が答えると、メサイアは頷いた。
「古代ルーメン国は学園都市で栄えていた。当時は我がイスカ領も同様に学問が盛んだったという。僕はあれはその時の名残ではないかと思う。そもそもオクト城自体がルーメンの古い大学跡地を利用して造られたものだ」
「殿下…」
　と嘆くようにユーストが声を上げた。
「頬の血色が戻り、目が潤(うる)み、いったいいつもの美貌が何倍増しなのよ…と思ったら、そういうことでしたか。学問！遺跡！歴史！なんと色気のないお話か…」
「当然でしょう、ユースト様。殿下はまさにその『学校』の話をしにここまでやってこられたのですから」
　ディシトリアスが眉を顰(ひそ)めて言うと、軍人はため息をついた。
「たしかにそうだった。…それもあの野蛮

極まりないルーメンの暴君と取り引きをするために、殿下は走り回っておられるのでした」
　アマデウス様、と言いながらユーストは真剣な面持ちでメサイアに向き直った。
「そのルーメン領の件では、ヒルダ様はなんとおっしゃっていましたか。我が領のお味方をして下さるご様子でしたか」
「チェンバレン卿はなんとも言わなかったよ。…ただこちらから持ち出した『学校』の件については快く相談に乗って下さった。いまはこれが精一杯だろう」
　相変わらず窓の外に視線をやりながらメサイアが答えた。
　まだ昼間だったので首都の通りは行き交う馬車と人でごった返していた。街中はメサイアたちの馬車も速度を落として進むほかはない。思いきり駆けることができずにじれているのか、足踏みする馬たちの蹄（ひづめ）の音と嘶（いなな）きがときおり聞こえてくる。

「僕自身、誰かを味方に引き入れようとは思わない。たとえ政治なのだとしても…これは僕とタイタス・ラムの問題なのだろう」
「殿下はなにもかもを背負おうとしすぎているのではないですか？理由を話せば他の七侯たちも…とくにあのユアン皇帝陛下はこちらの味方をして下さるはずです」
「それ以上言うな、ユースト」
　とメサイアが低い声でひと言呟いたので、軍人は押し黙った。車内に重い空気が満ちていく。
　どうやら今回のことで七侯の友情を持ち出すことは、主君にとっては鬼門なのだと――そこでユースト・ブランデルは初めて気が付いたのだった。

　イスカの人々にとって年若い新領主は謎に満ちた存在だった。
　その整った容姿は人々を惹きつけたし、荒波のように起伏に富んだ経歴もすでに知

れ渡っていたが、人となりそのものを測る機会は少なかった。

ひとつはメサイア自身がほとんど感情を表に出さない人間だと言うこと、さらにはあまりにも多忙なために、じっくりと付き合う機会を持てないでいることが、その理由だろうか。イスカ城での彼はたいてい孤独に執務室で実務をこなし、付き従う者たちと仕事以外で口をきくこともめったにしなかった。

イスカ＝リンナム領の者たちも、風の噂で彼らの主君がユアン・ジュノー＝イグニス少年皇帝や他の七侯たちと親しく付き合っていると耳にすることはあった。しかし彼がいったいどのように他人に愛着を示すのか、友情を確かめ合うのかは想像も付かないことだったのだ。

そんな主君にとってかつてのライバルであり、もっとも縁の深いと言われるルーメン領主のタイタス・ラムは、彼もまたその生

い立ちで有名な英雄ではあるが、二人が実際はどれほど親密なのかを知る者はほとんどいなかった。

例外として主治医のディシトリアスだけは、彼らの仲の良さを知る機会があった。秋に皇帝一行がイスカ城に滞在したときに、他ならぬ医師自身がとある事件の渦中の人物となったからだった。

当時の様子を思えばディシトリアスとしては『むしろ二人は多少親密すぎるのでは…？』と疑いを持っていたほどだったので、その仲が決定的に破綻したと知ったときには驚いたものだ。しかしその理由を知った今となっては、仲違(なかたが)いもやむを得ないという気持ちになっている。

アマデウスとタイタス、二人の七侯が背負うものは本人自身の生き方そのものであり、それゆえにいったん分かたれた糸は誰にも結ぶことはできないと思われた。

ようやく表通りを抜けて、馬車は街外れの裏通りへと入っていった。石造りの建物に挟まれた路地をぎりぎりの車幅で通り過ぎ、馬車は人通りのない小さな広場へと進み出た。

広場の一角に古びた小さなアーチがあり、そこを抜けるととある屋敷の裏庭へと入っていく。馬車が動きを止めると屋敷の使用人たちが飛び出してきて、丁重にメサイアたちを出迎えた。

「ご主人さま、ここはいったいなんなのです」

身分を隠すために「殿下」とは呼ばないように気をつけながらディシトリアスが言った。

「ここは宿だ。昔馴染みの情報屋と落ち合う約束をしていてね」

身軽に馬車を降りながらメサイアは答えた。

裏庭の一角には来客用の大きな厩舎があ

り、その脇に雪が積み上がっている。オクト城に吹く荒涼とした風とはまた違う、染み渡るような寒さがここには残っていた。
「昔馴染み…ということは探偵時代の、ということですか」
　主君の身を護るように背後に立ったユーストに、メサイアは頷いた。
「お前たちは馬車に残っていてくれていい。中に入るなら昼食も取れるとは思うが」
「もちろん！ご相伴いたします」
　ユーストは嬉しそうに叫んだが、医師は建物を見上げ、はてと首を傾げた。
「ここは…ご主人さまの馴染みの場所…なのですか」
「なにが不満なの、先生」
「不満というわけではありませんが…しかし…ここは…」
　もしや娼館ではないですか、とディシトリアスがひそひそと耳打ちしたので、イスカ＝リンナム領軍の若き将校は目を白黒さ

せた。

◆

「イスカ＝リンナム領内には存在しない…いや、表向きは存在しないことになっていますからね、娼館の類(たぐ)いは。このオクト＝ノクテ領ではかなり手広く商売している業者もいると聞きますが」

案内されたテーブルで食事を待つ間、ユーストは珍しそうにあたりを見渡した。

大きな窓は色つきのステンドグラスで、地上一階にある食堂は昼でもほの暗かった。室内のそこかしこに立てられた背の高いランプが、並べられたテーブルの影を床に落としている。床の絨毯は厚く、出入りする給仕の足音もほとんど聞こえないほどだった。

日中の営業時間外であるせいか、娼館の案内役が挨拶に訪れたほかは、従業員、娼

婦や男娼もほとんど階下に姿を見せない。
　娼館という慣れない場所ではあるものの、人気(ひとけ)のない館内に一種の居心地の良さを感じて二人の供(とも)は警戒を解いた。
「まだその情報屋は来ていないのですかね」
　主治医の言葉にメサイアは頷いた。
「先に来ているはずだが…しばらく待ってみるとしよう」
「しかしここは…一見するとただの高級食堂ですね、それも庶民には手が出ないような値段の」
「昼間はただの食堂だが、夜になれば客は食事を楽しみながらひとときの相手を物色するのだよ。…そういえばここへ初めて来たのはとある事件の際、犯罪者が逃げ込んだと知ったからだった。僕はそいつを確かめるために、まさにこの食堂で給仕の真似事をしたのだ」
　四年ほど前のことになるかとメサイアが言うと、また二人の臣下は目を丸くした。

「なんとまあ、この短い旅路でなんど主(あるじ)の意外な一面を拝見したことか！私にとってはそれが一番の収穫であったと言いますか」

ユーストが手を広げると、ディシトリアスも頷いた。

「ほとんどの者は生まれた領から出ることなく一生を終えます。それを思えば、一体貴方はどれだけの人数分の経験をしてきたというのでしょうか」

「おおげさだ、二人とも」

メサイア自身、皇帝候補になる以前は決して自らの意思だけで行動してきたわけではない。領外で派手に活躍することによって、ある意味反政府組織の陰謀に加担してきたという一面もある。それをあえて説明することももどかしく、メサイア・リードはただ決まり悪げに口を噤(つぐ)んだ。

そうやって再び静まりかえったテーブルに、そっと磨かれたグラスが差し出された。

いつのまにか給仕が背後にやって来ていたようだ。
「どうぞ、お飲み物でございます」
　目の前に美しい細工の壺が掲げられる。ワインが注がれるのを待ちながら、その声にふと思い当たってメサイアは紫水晶の目を見開いた。
「ついでに今宵のお相手には私めをご指名下されば」
「――――」
　振り返り、メサイアは絶句した。背後に立ってワインの壺を手に微笑んでいるその顔には見覚えがあった。
「なぜ君がここに…」
「そんな作り笑顔じゃご指名は取れないわよ、ジェド」
　料理を手に現れた金髪の可愛らしい女給にディシトリアスが目を丸くした。
「貴女さまはたしか…」
「知り合いなの、先生？やだ、極上美形の

少年少女！しかも双子？ここの子って上等すぎて恐ろしいわ…いいの本当に」
　やや興奮気味のユーストに、医師は首を振った。
「いいのって…中尉どのはいったい何を血迷っておられるのです。もちろん、いけません。そもそも彼らはここの従業員ではありません。うっかり手を出したりしてごらんなさい、一生後悔いたしますよ」
「従業員じゃない…？どういうこと…？」
「この方々は…皇帝陛下の幼馴染みであられる――白鳳騎士団騎士のベル兄妹でいらっしゃいます」
「は…白鳳騎士団？陛下の親衛隊がなぜここに…」
　信じられないというように、ユーストは後ろへのけぞった。その彼の頭上から、また別の声が降ってくる。今度は成人した男の低い声だ。
「そんなヒヨッコどもより今宵は私を指名

して頂こうか、アマデウス・フロックハート殿下」
　テーブルの傍(かたわら)に色の浅黒い、黒づくめの男が立っていた。それを見た主君の表情が硬くなり、またたく間に青ざめるのをディシトリアスは見た。
　がたんと音を立ててメサイアが立ち上がる。彼は男をまっすぐに指(さ)した。
「こんなところになんの用だ！ルーメン領主の参謀が…ハンニバル・モーガン！」
「ルーメンのハンニバル…だと？」
　ユースト・ブランデルが立ち上がり、主君と男の間にすばやく身を割り込ませる。
　ルーメン領主タイタス・ラムの教育係は胸に手を当てると、その頬にうっすらと笑みを浮かべた。

「娼館というから、もっといかにもな雰囲気かと思っていたわ」
　豪華な室内を見渡しながらアナ・ベルが

言った。
「見て！隣の寝室、ユアンの部屋より内装が凝っているわよ。窓は開かないけど、彫刻の透かし模様から明かりが取れるようになっているの」
　皇帝ユアン・ジュノー＝イグニスと共に辺境の集落で育ち、去年から皇城に住まい始めた彼女にとっては、いまだ見るもの全てが珍しいらしい。
「そいつがいかにもというやつだよ、お嬢ちゃん。たしかにここは特別金払いの良い客専用の部屋ではあるが、あんたみたいな娘があまりじろじろ見ていい場所ではないぞ」
　そう言いながらハンニバル・モーガンは客人たちにソファに座るよう身振りで勧めた。応接用のテーブルに食事の用意が調えられており、イスカ人たちは彼らが自分たちを待ち受けていたのだとわかった。
　メサイアは大人しく勧めに従ったが、医

師のディシトリアスは席に着くのを辞退し、部屋の隅に引き下がる。一方護衛のユーストはむっつりと口をひき結んだまま、主(あるじ)の背後に立った。
「せめてこんな場所に妹を連れてくるのはやめたほうがいい」
　席に着いたメサイアがそう言うと、ジェドが頭を掻きながら薄笑いを浮かべた。
「俺もそう思ったんですけど、どうしても来るって言い張って」
「あら、私は大丈夫ですよメサイア様。お気遣いには感謝します」
　いつもの抑揚のない声でアナが答えると、ジェドが顔を顰(しか)めた。
「ほらね。ほんとしょうがない妹ですみません」
　ジェドはアナの双子の兄で、二人は見るからによく似ていた。妹より背は高いが体つきはほっそりとしなやかで、よく動く青碧の瞳は知的かつ明朗な人柄を思わせる。

ともすればぶっきらぼうに見えがちな妹とは対照的に、ジェドの方は十七歳にして世慣れた雰囲気の持ち主だった。
「そもそも宰相殿が『こんな場所』がお好きなのがいけないのですよ。ああ、そうそう貴方の情報屋は別室に転がしてあります。あとで解放してあげますよ」
ハンニバルが新しいワインの封を開けながら人差し指だけを立てて階下を示した。囚われた情報屋の男はおそらく地下室にでも放り込まれているに違いない。
「今回モーガン家の息の掛かった店は避けたつもりだったが…」
メサイアは差し出されたグラスを受け取らず、そう答えた。
「もともと僕の全ては皇城に筒抜けになっている。隠れ家や行きつけの場所も全て七侯に即位した時に白状してあったのだからね。陛下から遣(つか)わされた君たちがここを知っていること自体は不思議ではない。だが

…まさかここで捕らえられるとは。ユアンから反応があるとすればもう少し後になると思っていたよ」
「ちょうど洞穴の道で行き違いになりましたよ、貴方からの親書を持った使者とはね」
　ジェドが笑みを浮かべた。
　洞穴の道とはイスカ＝リンナム領と皇帝領を結ぶ、巨大な地下道のことだ。長い間その存在は秘密にされてきたが、来春には一般に開放される準備が進んでいる。
　現在その道を使っているのは整備をしている技術者たちやメサイア自身、そしてイスカ城と皇城の関係者に限られていた。
「だけど貴方から返信が届くまでもなく、ユアンには予想できたのよ。貴方がフェイの就任式を欠席すると言い出すことはね」
　さりげにグラスを受け取ろうとしたアナの手を避(よ)けながら、ハンニバルはいやいやと首を振った。
「うちの馬鹿王子が出席を辞退したのを聞

いて、ユアン――あの坊主は『タイタスが来ないなら、メサイアも辞退すると思う』と即座に答えたのだ」

タイタスを差し置いて自分だけが七侯の輪に入ることをあの人は望んだりしないよ、とユアン・ジュノー＝イグニスは言ったのだった。抜け駆けをするぐらいなら、孤独であろうとする。それがメサイア・リードなのだと。

主君の言葉を聞いたメサイアは驚かなかった。

右も左もわからないまま皇帝の椅子に座った少年に様々なことを教え込んできたのは他ならぬ自分自身だったからだ。だからだろうか、全て話さずともユアンには思考を読まれていることがある。

「ユアンはタイタスとメサイア、二人の欠席を許さないと言っている。どうあっても七侯全員をオウラードに連れて行くつもりだ」

ジェドが肩を竦(すく)めて言った。アナの手を避けたグラスを反対側から巧妙に奪い取って、やれやれとでもいうように色の濃いワインをあおる。
「それで俺たち三人がここに来ることになったんだ」
ジェドの言葉にハンニバルも頷いた。
「私がここに居るのはルーメン人としてではない。あくまで陛下の密使としてだ。…できれば二人の七侯には顔を合わせて話をしてほしいと、陛下はそうおっしゃっている」
「ユアンらしい人選だ」
メサイアは皮肉げに答えた。あのユアン・ジュノー＝イグニスは人間を信じている。だからこそ、あえてタイタスの腹心であるハンニバルを直接寄越したのだ。それが仇(あだ)となってメサイアに避けられるなどということは考えもしない。
ユアンの人を信じる気持ちにメサイアは

過去、何度も支えられてきた。しかしごくたまに彼の真っ直ぐな純粋さは、それが正しいがゆえに他人の隠していた柔な部分に突き刺さることがある。メサイアにとっては今がまさにそれだった。

「話し合いはもう終わったのだ」

提案をはねのけるようにメサイアは言った。目の前に並べられた料理は手つかずのまま冷え、それがこの虚(むな)しい会合の有り様を表しているかのようだ。

「あの男とは、もう顔を合わせることもないだろう」

メサイアがそう言うと、目の前に立つ男の瞳が微(かす)かに揺らいだ。メサイアは不思議なものを目撃したような心地で、改めてハンニバルを眺めた。

――この男は悲しんでいるのか…？

己の矜持(きょうじ)のために一国を陥(おとしい)れるほどの男、あのハンニバル・モーガンが、他人のために感情的になるとは。

たしかにあのタイタス・ラムには一種の魅力がある――とメサイアは考えた。計算尽くで生きている男を捕らえて放さない自由な姿。いったん懐(ふところ)に入れば彼の人柄の温かさを知り、ますます離れがたくなることだろう。

ほんの少し前までは、彼自身が生涯共に歩いて行くことを運命と思っていた。顔を合わせては罵(ののし)り合い、殴り合い、時には手を差し伸べ合う関係が続くことを疑いもしなかったのだ。

メサイア・リードは琥珀(こはく)色の隻眼を想い、ソファの背に回した手を握りしめ、失った痛みにただじっと堪(た)えた。

◆

イスカ＝リンナム領主メサイア・リードとルーメン領主タイタス・ラム、二人が仲が決裂したのは、とある囚人たちの扱いにつ

いての意見が割れたのが原因だったという。
　イスカの地で皇帝の地位を巡って事件が起こったのは、今から数ヶ月前のこと。その犯人として捕らえられたのは、なんと年端もいかぬ子供たちの集団だった。
「本当に…あれを子供たちが計画したと知ったときには恐ろしい気持ちになったよ」
　スープを口に運ぶ手を止めて、ユアンは窓の外を見た。
　すっかり陽が落ちた庭園には明かりが灯(とも)っておらず、窓から漏れる光が届くテラスにも濃い闇が迫ろうとしていた。ふいに夜の暗さに吸い込まれるような心地がし、少年は慌ててテーブルに視線を戻した。
「俺をおびき出してザンを誘拐するために…あの子たちは同じ子供を何人も犠牲にしたんだ。イスカ城でも彼らは何人もを死に至らしめた。それも残酷なやり方で…」
　向かい側に座ったロレンスは黙ってユア

ンの話に耳を傾けていた。夕飯はたいていこの友人と共に摂ることにしていたが、そこでユアンは毎日のように様々な悩みを彼に打ち明けている。
「最初に死んでいったのはみんなルーメン領の子供たちだった」
　蝋燭（ろうそく）の光に揺らめくスープの表面を眺めながらユアンは言った。
「俺がルーメン領を訪問したから…それに巻き込まれたんだ」
「ユアン」
　もの言いたげなロレンスに向かって、ユアンは手を振った。
「いいんだ、わかってる。俺に責任はあるけど、どうしようもできなかったってことは。…だけどあの時のタイタスは見ていて気の毒になるぐらいだった」
　領民を、それも小さな子供たちすら護ることができないのかと、タイタス・ラムは自らを責め続けていた。

そして己に誓ったのだ。
どうあっても子供たちを殺した犯人を追いつめるのだと。
自らの領軍を率いてユアンと共にイスカ＝リンナム領まで攻め上り、そこでようやく彼らは数々の真実に辿り着いたのだった。
「領内で起きた事件のけじめとして犯人たちをルーメン領で裁き、処刑しなければならないと…タイタスは言ってるのだな」
ロレンスが静かに言った。
「領主としてはもっともだろう。そう主張しなければ主権は保たれない」
「だけどメサイアの考えは違った。彼は…犯人たちを再教育したいと考えているんだよね。子供だからまだ善悪を学ぶ余地があると」
意外だった、とユアンは告白した。メサイアなら厳しい判断に出るものと思っていたし、逆にタイタスならばきっと子供たち

に温情をかけると思い込んでいたのだ。この話をユアンたちに教えてくれたギデオンも、同じように考えていたらしい。
「犯人の子供たちはメサイアと同じ教育機関の出身だよね」
「《紅の光(ルブルムルクス)》だな。あれは…過激派の工作員を作り上げる目的で運営されていた。特殊な環境で人格形成されてしまったがゆえに、あのような罪を犯したのだと、メサイアはそう主張している。たしかにそう言われてみればそのような気もするが」
　と友人が答えたので、ユアンは頷いた。
「イスカリオットからの報告によると、メサイアは自国ではなくオクト＝ノクテ領に彼らを収容する学校を作ろうと考えているらしい。領主代理のヒルダさんにそれを交渉しに出かけたようだと言っていたよ」
　中立の立場にある隣国に囚人を置くことで、タイタスの譲歩を引き出す算段だという。

「…俺はどっちかっていうとメサイアの考え方に賛成できるし、味方をしたいよ。だけどタイタスの説得に力は貸せないんだ。タイタスにはタイタスの護らなければならないものがある…」

それが一国の主権だ。ただしタイタス個人としてはメサイアの意見をもっともだと認めたい気持ちもあるに違いないとユアンは考えていた。しかし彼は犯人を捕らえる名目で軍を動かしたのだし、他領に犯人の身柄を譲れば相応の批難を受けることだろう。

間が悪いことにルーメン領は最近まで反乱続きで、タイタスが領主として緻密に努力を重ねたからこそ、ようやくそれが収まり始めたところだったのだ。

「タイタスは批難を受けること自体は恐れていないだろう」

ロレンスがタイタスを庇(かば)うように言った。

「ただ…親しいがゆえに国の大事をメサイアに譲ったと思われるのがまずいと思っているんだ。メサイアのためにも、ユアンのためにも」
「え…」
　ユアンは目を見開いた。
「友人関係のために自国の矜持を傷付けたとしたら…問われるのはその関係のあり方なのだと思う」
「それって…俺たちの仲の良さのせいで損をしていると、ルーメンの人が感じてしまうってこと？」
　騎士団長は頷いた。
「だからメサイアとタイタスは王として争わなければならない。自分の民のために、帝国の安定のために、争って見せなくてはならないんだ」
「そんな…」
「そうやってしばらく争えば、しぶしぶという形でメサイアの求めに応じて囚人を譲

ることも可能になる。たぶん…メサイアの願いを叶えるために、タイタスは本物の喧嘩を始めたんだ」
「本物の喧嘩…」
　ユアンは力なく呟き、持っていたスプーンを皿の脇に置いた。
「気持ちはわかるけど、それが…領民に対して責任を持つってことなのかな。…俺たちが大人になるって…ことなのかな」
　項垂(うなだ)れた主(あるじ)の姿を目(ま)の当たりにして、騎士団長の背が緊張した。わずかに焦りの表情を浮かべ、ユアンに向かって手を差し伸べる。だがしかし伸ばした手をどうすることもできず、逡巡(しゅんじゅん)したあげくに彼は手をテーブルに置いた。
　そのようにしてロレンスがときおり見せる動揺に、ユアンはほとんど気付いていなかった。たいていの場合はユアン自身が下を向いているからだ。
「俺は…やっぱり諦めたくはないよ。どこ

かに道があるはずだ。お互い責任ある立場でも、並んで歩いて行ける道が…」

俯(うつむ)きながらほとんど囁(ささや)くような声で呟いた主(あるじ)に向かって、ロレンスは微笑みを浮かべた。ユアンのその粘り強さがこの世で彼のもっとも好ましいものだからだ。友人の微笑にもユアンは気付かず、ようやく顔をあげたのはしばらく経ってからのことだった。

すっかり冷めてしまったスープを無駄にすまいと再び食事を始めたユアンを眺めながら、ロレンスは一つの想いに捕らわれていた。

――だがしかし、タイタスはなぜ『二度と』メサイアには会わないなどと言ったのだろう。喧嘩をしてみせるなら最悪ポーズだけでも良いはずだ。

そこにあの元盗賊ならではの事情が隠れているような気がして、ロレンス・アクロイドは遥か遠くのルーメン城に思いを馳(は)せ

た。

《03 に続く》

千年迷宮の七王子SS
残雪のスティルメイト
03

03

「さすがにまずいでしょ、関門をシカトするのは」

背後で親衛隊長がぶつくさこぼすのを聞き流して、タイタス・ラムは下生えをかき分け、積もった落ち葉の中を進んだ。

林の中に点在する窪地にはときおり雪が残っていて、凍った地面は靴底から体温を容赦なく奪い去っていく。しかし若き領主の足取りは軽かった。昼なお暗い丘陵の木陰をすいすいと登りつめる。

林の途切れたあたり、丘陵の天辺（てっぺん）から反対側はなだらかな下り坂になっていて、その向こうに石を積んだ塀が延々と続いていた。

タイタスは林の終点に立って、ソレム領との境を見渡した。

「さてと。どうやってあれを越えるかだな

…」
「普通に越えましょうよ、正規ルートで」
　背後からまた聞こえた声に、タイタスはにやりとしながら振り返った。
「へえ、俺さまの足に付いて来られたじゃねーか」
　息を切らしながら立ち止まった二人の臣下が、心からうんざりしたようすで主君を見上げる。
「健脚であられるのはけっこうなことですがね、殿下」
　と答えたのは、彼の親衛隊隊長を務めているグレアム・バーロウだ。口調はやや年寄りめいているが、実際の年齢は三十を少しすぎたばかりだった。背は高く、体格も軍人らしく厚みがあったが主君の堂々とした体躯には及ばない。庶民階級の出身で、気取ったところのない男だ。
「あんたが馬を降りて荒れ地を進むなんて言い出さなきゃ、こんな季節外れのピクニ

ックはしないで済んだはずなんです」
「隊長の言うとおりだ。街道をいったほうが断然早いし暖かい」
　そう相づちを打ったのは、親衛隊副隊長のアゼル・ブラックソーンである。短く刈り込んだ髪に隙のない表情、無駄のない体つきは護衛というより、どちらかといえば間者に向いていそうなタイプに見える。
　年の初めに二十一になったタイタスとアゼルは歳が近く、アゼルの方が二つほど年上であった。軍の若手の中でも抜群に腕が立つ彼は、去年の夏に副隊長に取り立てられたばかりだ。ややぶっきらぼうなところがあるが、根が正直で裏表のない若者だった。
「馬なら今ごろ領境（くにざかい）の店で一杯やれていたかもしれないのに」
　ぼやく二人に向かって、彼らの君主はやれやれと首を振った。
「あのな」

タイタスは腰に両手を当て、その場に仁王立ちになった。派手な金髪が吹き渡る木枯らしに踊っている。
「なんのために俺らだけで行動してると思ってんだよ？関門なんか通ったら俺さまが皇城の近くまで来てることがもろバレじゃねーかよ」
「バレていいんですよ！」
我慢できなくなったように、年長のバーロウ隊長が叫んだ。
「そもそもあんた、皇城から出頭するように言われてるでしょ。大人しく出頭しなさいよ！いまかいまかとユアン陛下がお待ちですよ！」
「だいたいなぜ正規軍の俺たちがコソコソ領境破りするはめになっているのか…」
副隊長も頷く。
「殿下が関門を通りたいっていえば誰も逆らわないっすよ？だってあんた領主様だもの」

頭を掻きながら「聞き分けのないことを言うなよ…」と呟いた主君に二人は声を揃えて「お前がな！」と怒鳴った。
「しかたないな、お前らがそこまで言うんなら堂々と行くしかねえ」
悠然と丘を下(くだ)りだしたタイタスの後を追い、親衛隊の二人は慌てて林から飛び出した。
「…皇城から呼び出されたってことは、やはり今回のことに納得されていないのですかねえ陛下は」
グレアム・バーロウはタイタスに並んで歩きながらそう言った。アゼルの方は背を護るようにタイタスの後にぴったりと付いている。領境が近いので、何かあればすぐに動けるように二人の軍人も心構えだけは怠らない。
「そりゃあユアンは納得していないだろ。俺さまだって納得してるわけじゃねえよ」
『今回のこと』というのは、イスカ人の

囚人たちの扱いを巡ってイスカ＝リンナム領の主、メサイア・リードと揉めている件のことだ。
　囚人はまだ年端もいかない子供ばかりだったが、このルーメンで同じような年頃の子供たちを幾人も殺した罪に問われている。
「イスカ領主様が囚人の引き渡しに応じて下されればよかったのですが」
　とグレアムが肩を落としながら言うと、タイタスはまた首を振った。
「無理だろうな。こうと決めたら梃子（てこ）でも動かねえのよ、あの性悪（しょうわる）は」
「…だがこのままでは我が領民はおさまらないでしょう。我が軍の中にイスカ領へ攻め上る準備をしている隊もいると、もっぱらの噂です」
「まあただの噂なんだがな」
　幾分硬い表情でタイタスは答えた。
「そう噂を流しやがった奴らがいる」

「どうも元領主バーチ卿のシンパのようです」

背後からアゼルが囁(ささや)いた。

メルヴィン・バーチはタイタスの前にルーメンを治めていた七侯の一人だ。新皇帝のユアン・ジュノー＝イグニス率いる新体制そのものが気に入らず、かつてクーデターを謀(はか)った人物である。

現在は皇城の監獄に拘束されており、生涯そこを出ることはないだろうと言われていた。だがルーメン領では相変わらず彼を支持する一派が根強い。

秋の皇帝訪問の際にも領内はいったんまとまりを見せたが、平民で盗賊出身のタイタスが領主になることに抵抗を示す者たちが消えてしまったわけではなかった。

「あらかじめ噂を流して世論を盛り上げておけば殿下がメサイア様に譲歩したときには『腰抜け』と批難できますもんね」

苦い口調で親衛隊長は呟いた。反対にタ

イタスが強硬な態度に出れば、それによって仲の良い七侯の間にひびを入れることが出来る。どう転んでも反対派にとっては溜飲が下がる展開になるというわけだった。

去年秋に行われた皇帝陛下のルーメン訪問は、その後の事件を差し引いても領民の心に深く感銘を与え、そのことも水面下で反対派の反感を買う要因となっていた。タイタスを手伝い、その訪問の演出をしたのが宰相でイスカ＝リンナム領主のアマデウス・フロックハート――メサイア・リードだと言われている。

粗野な元盗賊に的確なアドバイスを与える天才の存在は、いまや反対派にとって目の上のこぶに等しかった。軍隊を動かすような事態にでもなって二人の中に亀裂が入ればいいと彼らが考えているのは明らかである。

「やはりメサイア様ともう一度話し合うべきではないですか」

「奴と話すことはねえよ」
　むっつりと口元を引き締め、不機嫌さを隠そうともせずにタイタスは言った。
「そのことでユアンに言い訳をするつもりもねえし、悪いがフェイの就任式にも行くことはできねえ」
「それでも『あのひと』の頼みだけは断れないときた」
　副隊長が言うと、
「関係ねえんだよ、あのひとは！」
　とタイタスが気色ばむ。
　胸に火が点(つ)いた勢いのまま、彼は大股で丘を横切った。臣下の二人も遅れないように続き、三人は吹きさらしの丘をあっという間に降りていく。目の前にはいつのまにか領境の高い石壁が聳(そび)え立っていた。
「本当に関係ないと思いますか？罠ですよ、この突然の呼び出しは。…というかお説教だと思いますよ、さすがにタイミングがタイミングですからね」

「あのひとのお説教ならいくらでも聞くぜ」
　タイタスは目の前の石垣に足をかけた。
「ザン・オーデュポンの声に、俺さまはいつだって聞き入ってしまうんだよ。ただしたいてい内容は頭に入っちゃいないがな」
「まあそれなら問題ないか…っておい」
　親衛隊長は慌てて領主を止めようとした。
「あんたなに塀をよじ登ってんですか！それじゃあやっぱり不法侵入でしょうか！正々堂々とソレムに入国するんじゃ…」
「だから正々堂々と塀をよじ登ってるじゃねーか」
　するすると石壁を登りながら元盗賊は答えた。
「丘の上から見たときには、この近辺に見張りはいないようだったからな。…さっさと越えちまうぞ、てめーら！ぼやぼやしてっとザン様との約束に遅れちまう」
「もうほんと…」

「めちゃくちゃな王様だな…」
　二人の臣下はあっけにとられ、そして急いで主(あるじ)の後を追い始めた。

◆

「本当に来たのですね」
　微笑むザンにどぎまぎしながらタイタスは茂みの中から歩み出た。ユアンやロレンスなら遠慮なく飛びついて抱きしめるものを、相手がこの青年となるとさすがの元盗賊も遠慮がちになる。
　ザン・オーデュポンの顔を見るのはおよそ二ヶ月ぶりで、タイタスは眩しそうに隻眼を細めながら敬愛する芸術家に片膝を折った。
「遅くなってすまないと思ってる…」
「いいえ、時間通りですよタイタス」
　ザンはまた微笑んだが、タイタスは殊勝(しゅしょう)に首を振った。

「そうじゃなくて…あんたの誕生日に間に合わなかったから」
　しおらしい物言いにザンは少し真顔になり、そしてまた口元に笑みを浮かべた。
「そろそろ…信仰の対象などではなく、友人として扱ってくれませんか」
　驚いてタイタスは彼を見上げ、そして笑顔を返した。
「ありがたいけどそりゃ難しいな、ザン。俺にとってあんたは命の恩人だし、それは一生変わらないから」
　タイタスが片方の眼を失ったのは、ほんの小さな子供の頃だった。それはまだ盗賊団を作る前のことで、彼はその頃、同じような境遇の子供たち数人と寄り添い合いながら、路上で毎日を暮らしていた。
　しかし、その日は運が悪かった。たまたま市場を警備していたルーメンの兵士に見つかり、その時に受けた暴力によって、タイタスは左眼とともに姉とも母とも慕って

いた少女を失ったのだ。
　少女の骸(むくろ)が冷たくなっていくのを感じながら、タイタスは一瞬で世界が溶けてなくなってしまうような不安に襲われた。物心つく前から家にも親にも縁がなかった彼は、世界にとって自分たちが不必要な存在だということはとうに気付いていた。しかし命を奪われるほど憎まれているとは知らなかったのだ。
　急速に何もかも遠のいていく中、聞こえてきたのがザンの歌声だった。暗闇にいたタイタスにとってはそれが唯一の光となった。盲目で彼自身暗闇の中に生きていた少年の歌が、彼を世界に繋ぎ止めてくれたのだ。それ以来、タイタスにとって歌手のザン・オーデュポンはこの世になくてはならない人となった。
「タイタス、私はいつでも唄いますよ。貴方がこうして会いに来てくれるのならね。それとも誕生日に送ってくれたあの素晴ら

しいリュートを弾きましょうか」
　付いてくるように手を振って、庭から小屋の方へ歩いて行くザン・オーデュポンの姿を見ながら、タイタスは少しぼうっとした。これは夢じゃねえのか。またこんなふうにこの人に優しく声をかけてもらえるなんて――
（メサイアとの絶縁を決めたときに、俺さまはもう心のどこかで皆のことも失ったかと思っていたんだ。いろいろきついもん抱えたメサイアには仲間の支えが必要だし、俺さまにはそれがなくても耐えられるとどこかで覚悟していたからな）
　だがザンから密会の誘いが届いたとたん、タイタスの覚悟はあっけなく崩壊した。新年の休暇を共に過ごしたばかりだったのに、会いたくてどうしようもなくなったのだ。
　本音を言えばユアンや他の連中の顔も見たくてたまらなかった。理由は『もう会え

ないと決めていたから』だ。

タイタスが木立を振り返ると、少し離れたところから親衛副隊長のアゼルが敬礼を返した。その脇には親衛隊長のグレアム・バーロウが立っており、数人の騎士と何かを話し合っていた。城からザンを警護してきた青鹿騎士団だろうなとタイタスは考えた。警備に関する情報交換をしているところらしい。

タイタスは臣下に目配(めくば)せをすると、自らもザンの後を追って小屋の中に入っていった。

大ソレム湖はちょうど皇帝領とソレム領、それにルーメン領の北端を跨(また)ぐ大きな湖である。『大』と名の付くだけあってその面積はマグナ・エンデトリアーを誇り、湖畔から見る景色はほとんど海と変わらなかった。

密会の場所に指定されたボートハウスは

その大ソレム湖に面して建っている。タイタスが敷地に侵入した林の反対側、湖に向かって大きなテラスがあり、居間との間には掃き出し窓が並んでいた。夏にはそこを開け放つのだろう。今は閉めきってあり、大きな暖炉に火が入って室内は暖かかった。

半分カーテンの閉じられた窓の向こうには深碧の湖面が広がっている。晩冬の光を跳ね返して、大ソレム湖は静かにさざめいていた。

「波が光そのもののようです」

窓際に立って湖を眺めているザンが言った。

「もう明るい景色も目を開けて見えるようになったんだな」

そう答えたのはタイタスではない。想定外の人物がそこにはいた。ギデオン・レッドフィールドだ。

「眩しいのは眩しいのですが、私の目もだ

いぶ光に慣れてきましたよ。おかげで最近は誰かの手を借りなくても歩き回れるようになりました。とはいっても昼は始終薄目ですが」
「手を取って案内をすることができなくなってがっかりしているファンは城にも多いぞ。俺もその一人だが」
　ギデオンは暖炉の脇のソファで楽しげにワインの封を開けている最中だった。タイタスが『なんでいるんだよ？』とでも言うように横目で睨(にら)むと、ギデオンは手を休めて両腕を広げた。いつものように腕に飛び込んでこいと言っているのだろう。タイタスがそれを見なかったことにしたので、年長の青年は少し寂しそうな表情になった。
「この別荘はロックフォードの持ち物なのですよ」
　タイタスを宥(なだ)めるためなのか、ザンはそう言った。ロックフォードというのはギデオンの父親の名字だ。マグナ・エンデトリア

の中央を占めるソレム領を牛耳るほどの大貴族であり、ギデオンはその名を過去に一度は捨てたのだった。しかし彼が七侯であるソレム領主の位に就いてからはその出生も隠し通せることが出来ず、実家との関係は再び繋がりつつあった。

　つまりギデオンの協力があって初めてこの密会が成立したのだと、ザンは言いたいようだった。

「今貴方がここに…皇城の近くまで来ていることは、ユアンも知りません。護衛の青鹿騎士団員たちもついさっきまでは私がここに遠出を楽しむために来たのだと思っていたのです」

「領境のソレム兵はいったん下げておいたぞ。誰にも目撃されずに通れただろう」

　笑みを浮かべながらソレム領主が言った。

「なにもかもあんたたちにお膳立てして頂いたってことかな」

HAZUNO AIKAWA/HALYOU @aikawayou

タイタスが皮肉げに言うと、ザンは少し俯(うつむ)いた。
――違う、そうじゃない。俺さまはあんたに悲しげな顔をさせるためにここまできたわけじゃない…。
タイタスは拳(こぶし)を握りしめ、唇を噛んだ。
「そっちが言いたいことはわかってる。メサイアと仲直りして、フェイの就任式に出ろと言うんだろう。だけど…俺さまはザンに会いに来たかっただけだ」
幼い頃に命を繋いでくれた救い主(ぬし)。彼に手を差し出されたら、タイタスにはそれを拒むことなどできない。
「…しかし面倒なことになったものだ。秋の事件で犯人たちを無事に牢へ放り込んだと思ったら、今度はそれが我々の喉に刺さった小骨になるとは」
と実際に自分の手で彼らを牢に入れたギデオンが言った。
「たとえ小骨であってもこれは致命傷にな

りかねません」
　湖を見ていたザンは、外の景色を遮断するようにカーテンを引いた。
「我々七侯の結束に亀裂が入ること、それはすなわちユアンの政権が短命に終わることを意味します。なんとしても…それだけは避けなければ」
「それはあんたの未来視なのか」
　タイタスがそう訊ねると、ザンは首を振った。
「異能力に頼るまでもなく…考えてみれば明らかなことです。我々はほとんどその結束のみでこのエンデトリアを治めてきました。一人一人の経験不足は、元七侯の力を借りてもいかんともしがたい。この地の混沌は若輩の私たちの手には余るものなのです。もしもその結束を失ったら…思ったより早くユアンは斃(たお)れることになるでしょう」
「お前はあの千年迷宮城でもそう言ったな、

ザン・オーデュポン。誰ひとりが欠けても、生きてはここを出られないと。その状況は今も変わらずってことか」
　ギデオンが暖炉の炎を見つめながら言った。表情豊かな茶の瞳に、踊る光が映り込んでいる。
「弁解しようとは思わねえけど…俺さまがメサイアと会わ
ないと決めたのは単なる我(わ)が儘(ままま)じゃねえんだ」
　そう言って腹を決めたように、タイタスはギデオンの向かいに腰を下ろした。
「説教は甘んじて受け入れるが、決めたことは変えねえし、それはメサイアも同じだろう」
「もしかして…と思うのですがタイタス、貴方、メサイアと密約を交わしたのではありませんか」
　ザンが両の眼でタイタスを見た。片方はユアンそっくりの青い瞳。もう片方は――

禍々(まがまが)しいほどに美しい紅(あか)の瞳。幼い頃のザンはその瞳でこの世のものならぬ者たちを見ていたのだという。

タイタスは自身を見透かされているような気になり、身震いした。焦がれる相手に全てを支配される感覚。悪寒にはどこか甘いものが混じっていて、彼は一瞬目眩(めまい)を覚えた。

ザンを前にした者は多かれ少なかれ同じ感覚を持つらしいが、それもまた彼の王者としての性質なのかもしれない。

（ザンの目が見えるようになったのは嬉しいけど、あの瞳のせいでますます逆らえねーから困る…）

「あの性悪(しょうわる)と…何を約束したのは話せねえよ。話さないのが約束だからな」

タイタスがやっとそう呟くと、ギデオンとザンがちらりと視線を交わした。そこに約束があった時点で、二人の間にどういうことが起きたのか、ザンたちにはおおよそ

想像が付いた。『おそらくタイタスはメサイアに囚人を譲り渡す約束をしたのだ』と。
「あなた方は密約を実現させるために…そこに取り引きがあったことすら匂わせないために、もう二度と会わないと決めた。そのことはわかりました」
　ザンがそう言うと、ギデオンは首を振った。
「俺はよくわからんけどな」
「取り引きしたこと自体が、それぞれの領民への裏切りに他ならないからですよ。タイタスがメサイアに囚人を譲るのはそれぞれの領内事情に兼ね合わせても難しいことです。二人が仲良く協力し合う関係だと思われたままだと、タイタスには余計に身動きが取れない。だから…この先彼らは仲違いの演技を続けたまま、お互いの利益を取ることにしたのです。一国の領主としてね」
　ギデオンはまた首を振った。
「だから俺にはわからんね。大切な相手と

会えなくなるぐらいなら、俺ならば国を捨てる」
「簡単に言ってくれるな」
　顔を逸らしてタイタスが言った。
「領民一人一人が俺さまにとっては大切な存在なんだよ。…ギデオンだってそうだろうが。メサイアだってそうだ。国をほったらかしていたことで事件が起こったことをあいつは後悔している」
「もっとも貴方は他に隠していることがありそうですけどね」
　ザンの顔からはいつもの微笑みが消えていた。
「私たちは二度と隠し事をしないと誓ったのに」
　タイタスはソファから立ち上がった。この場にいることが、耐えられなくなったのだ。大好きなザンの声が、今は針のように感じられる。
「帰る」

「タイタス」
　ギデオンが立ち上がった。
「一足飛びに大人になってくれるな。お前がお前でいるために、俺たちがいるんだから」
　掃き出し窓に手をかけたタイタスを、さらにギデオンは引き止めた。
「なんだよ、もう離せ」
「ユアンはここでの密会のことを知らないと言ったな。それは本当だが、俺はユアンからお前への言付けを預かっているんだ」
「聞きたくねえから」
「反抗期か」
　ギデオンはため息をついた。
「いいか、ユアンはやはりお前に皇城に来て欲しいそうだ」
「だから行かねーし」
「メサイアはそろそろ到着するぞ」
　タイタスは目を丸くした。
「オクト＝ノクテ領で身柄を拘束されたん

だ。ユアンが赤狼騎士団を一隊まるごとやって、彼が訪れた娼館を包囲した。遣(つか)わされたのはジェドとアナの双子、それからハンニバル・モーガンの三人だ」
「ハンニバル…あいつ…俺さまを裏切りやがったのか…」
　タイタスは拳(こぶし)を握りしめた。
「もうわかるな？このボートハウスは騎士団に包囲されている」
「青鹿騎士団か…」
「それは俺たちの身辺警護に付いてきてくれた部隊だ。ここにはもう一つ、別の部隊が来ている」
　タイタスは掃き出し窓から外を見て「あれは」と呟いた。
　テラスから湖に伸びる桟橋(さんばし)の上に誰かが立って腕を組み、湖面を眺めている。
「さっきは誰もいなかったのに…」
「私がカーテンを閉めたので、そろそろ潮時かとあそこに出てきたのでしょう」

湖を渡る冷たい風に翻る白い外套、長く青い髪。タイタス・ラムを越えるその長身。
「そう、ここを包囲しているのは白鳳騎士団です」
それを聞いて一瞬タイタスは身を固くしたが、振り返り苦笑を浮かべた。
「俺さまに包囲網が破れないとでも思ってんのか？ロレンスと勝負しろというならともかくな」
盗賊王としてかつて蛮勇の頂点に立った青年はそう言い放ち、掃き出し窓を開け、テラスを出た。気付いたロレンス・アクロイドが桟橋から真っ直ぐに歩いてくる。
「よーロレンス、相変わらずだな」
タイタスは片手を上げた。
「俺さまはここから逃げさせてもらうぞ！二人の部下は預けていく。今度ばかりはお前はユアンの頼みを聞いてはやれないが、悪く思うなよ」
そう言って身を翻そうとしたときだっ

た。ロレンスが懐から白いものを取り出した。それを高く掲げる。
「いいや、俺は今日もユアンの願いを無事に叶えるだろう。ルーメン領主タイタス・ラム。皇帝の名において、帝国騎士団長ロレンス・アクロイドがお前の身柄を拘束する」
　ロレンスが差し出した素朴な封筒には、ユアン・ジュノー＝イグニス皇帝直筆の手紙が入っていた。そこにはタイタスが皇城に従わざるを得ない事実が書かれてあった。
　ユアンからの手紙にはこうあった。
――来てくれないとわかっているから俺は卑怯（ひきょう）なことをするよ、タイタス。
　人質を取ったんだ。君の大切な者たちを。

　順を追って話そうか。
　秋にルーメンへお邪魔したときに、俺はそこでいくつか用事を済ませたと言ったね？

HARUNO AZORI /HAR@RU @eikawayou

君は気が付いていたかな…俺はあのときロレンスだけを連れて、お忍びでいくつかの監獄をまわったんだ。皇帝ではない、君の弟分…盗賊団の一員としてね。

知っていると思うけど即位してから俺は度々ラム団の皆に恩赦を出そうと頑張った。だけど誰ひとりそれに応(こた)えてはくれなかった。みんなタイタスの邪魔になってはいけないと、監獄に留(とど)まる決心をしていたのだそうだ。だって君が盗賊の出身だったということが、領内の反対派の反発の原因にもなっていたからさ。

あのとき俺は彼らと取り引きをしたんだ。こっそり全員を監獄から出す代わりに、ルーメン領から外へ出してあげると。それならタイタスの足枷にはならないだろうと、彼らはようやく了承してくれた。そうして俺は彼らを全員監獄から出すことにしたんだ。

もちろん皇帝であってもルーメンの民を

勝手に領外へ連れ出すことなんかできない。だけどもともと路上で暮らしていた彼らには戸籍がなかったから、厳密に言うと法的にはルーメンの民ではなかったんだよ。で、彼らには急遽(きゅうきょ)パルヴァ＝ノーテの戸籍が与えられることになった。この辺は法律に詳しいギデオンの入れ知恵だね。

それが決まった後、秋の事件の関係でパルヴァ領軍がルーメンへ入る機会があったね。アデル兄ちゃんがパルヴァの名代である前七侯のジュリアス・エイリーとともにそれを率いていたのは知っているだろう？実はその時にジュリアスが戸籍と釈放の手続きは済ませてくれたんだ。

このことはハンニバルも知っている。彼は宰相の権限を全て君から与えられているので、その権力を充分に発揮してくれた。そしてイスカから引き上げるために再びルーメンを通過した際に、ジュリアスは彼らを全員パルヴァ領へ連れて帰ったんだ。パ

ルヴァの地で自由の身になった彼らだけれど、いっさいの出自は秘密になっている。

今まで話さなくてごめん。だけどラム団の兄弟たちから口止めされていたんだよ。彼らは今回、俺のために喜んで人質の役を買ってくれた。

ラム団のみんなの命が惜しければ…と言えばいいのかな？ああ、命をどうこうはないから安心して下さい。でも彼らの身柄は預かっているよ。

兄弟たちを返して欲しければ、俺に会いに来て下さいタイタス。来なかったらあの子たちはきっとがっかりする。

ここまで書けばもういてもたってもいられなくなったでしょう？

じゃあね、待っています。

あ、リィプも待ってるって。便せんの端を囓(かじ)りだしたからそろそろ封筒にしまうことにするよ。

君の友人、ユアン・ジュノー＝イグニス

《04 に続く》

千年迷宮の七王子SS
残雪のスティルメイト
04

医者は
ソレムより
← 服装が古い
ティトリアス
イスワから
来たので
厚着
ロシア
ぽい
ちょいいかつい
制服
ユースト
マント

04

「ここが我(わ)が君(きみ)の皇城での仕事場…というわけですか。うーん、ちょっと地味すぎませんん？」

とあたりを見渡しながらユースト・ブランデル中尉が言った。

彼はイスカ＝リンナム領主親衛隊所属の将校で、今回メサイアが同行を許したただ一人の護衛だ。切れよく引き締まった体躯はいかにも軍人だったが、やや『柔軟すぎる』態度が彼をちぐはぐな印象にしている。

平たくいえば彼の心の中には『乙女』が住んでいて、そのために殺風景な執務室の様子がどうしても気になってしまうようだった。

「無愛想っていうか…質素っていうか…。あの孔雀みたいな王子のように飾り立てろとはいいませんが、こう…もうちょっとな

んとか」

彼が『孔雀』と評したのは七侯のうちの一人、ルーメン領主を指してのことである。メサイア――君主アマデウス・フロックハートのライバルでもあり、このたびのいざこざの元凶でもあるタイタス・ラムに、ユーストは辛辣な態度を隠そうともしなかった。

半生を謳(うた)った物語が帝国中に広まっているせいか、タイタスは領(くに)を問わず庶民からの人気が高い。イスカ領の将校としてはそれも気にくわないことのひとつであった。過去名探偵として名を馳(は)せ、七侯就任後も史上最年少の宰相として皇帝を助けている自分たちの主(あるじ)のほうが、英雄としては名高くて当然ではないかという思いがどこかにある。

「このあたりにご自分の肖像画でもおかけになったらいいのではないですか。モデルがモデルですもの、きっと素晴らしい絵に

なることでしょう」
　書棚の上を指して振り返ったユーストに、彼の主(あるじ)は返答しなかった。塵(ちり)一つない執務机の上に書類を広げ、黙々と雑務に向き合っている。
「アマデウス様は余計なものを仕事場に持ち込まれるのがお嫌いなのですよ」
　部屋の隅に佇(たたず)んでいたディシトリアスが代わりにそう答えると、将校ははっと目を見開いた。
「今までどちらにいらしたんですか先生！」
「いえ…」
　主治医は困ったように目を泳がせた。
「私めはずっとここにおりましたが…」
「存在感なさ過ぎでしょ！今気が付いたわ！」
「どこにも行けるはずがないでしょう。今我々三人はアマデウス様のこの執務室に軟禁されているのですから」
「で、軟禁されているはずの状況でなぜ殿

下は平常通り仕事をされているのかしら」
　二人が執務机を振り返ると、素早く書類にサインを施(ほどこ)しながらメサイアが答えた。
「どうせここから出られないのならば、目の前にあることを片付けた方がよいに決まっているからだよ。どれもこれもいずれは僕自身が手を付けなければならない仕事だ。ユアンがわざわざ執務室に閉じ込めてくれたのだから、沙汰があるまではこうして過ごすのがよいのだろう」
　最後のは多少の皮肉も込められているが、それでもメサイア自身の本音に間違いはなかった。皇城へ着くまでの馬車の中でも騎士団の先導をこれ幸いと、持ち込んだ仕事にひたすら集中していたのだ。あまりにも熱心すぎて、外の空気でも吸って休みが取れるようにと主治医自ら停車を幾度も騎士団に要請したほどだった。
「どうせ出られないとおっしゃいますが」
　とユーストが手を広げて言う。

「殿下がこうやって大人しく監禁されるタチだとは知りませんでしたね」
「これでも監禁はされ慣れているのだよ」
　ブラックジョークとも付かぬことを言いながら、恐ろしい早さでペンを走らせている。そんな主(あるじ)の姿を見ながら（殿下は殿下で案外天然なのかもしれないわね…天才とはいえ二十(はたち)歳の若者だし）とユーストは密かに考えた。
「我がイスカ城には及びませんが、皇城は古い歴史を持つ城です」
　再び室内を見回しながら彼は言った。その視線が今度は軍人ならではの鋭いものに変わっている。
「どこかに隠し通路ぐらい、用意されているのでは？」
「たしかに」
　書類から目を上げずに、メサイアは答えた。
「僕の座るこの椅子の背後の壁だが、羽目

板が一部外れるようになっている。どうも皇城の地下に続いているようなのだが…」
「失礼！」
　飛びつくようにメサイアの背後に回り込み、ユーストは樫の壁に手を這わせた。蔦の模様が彫り込まれた飾りに仕切られた羽目板を一つずつ確かめていく。
「普通に動きますね、ここの一角」
「そんなところに本当に隠し通路が…」
　とディシトリアスも身を乗り出した。
　壁の下側、屈んでやっと通れるほどの大きさの板が隠し扉絵の通路になっているようだ。床に膝を付いたユーストは笑みを浮かべながらそれを少しずつ押した。
（これで一泡ぐらいは吹かせてやれそうじゃないの）
　皇帝のお召しでは仕方がないとはいえ、あのルーメン領主の宰相ハンニバル・モーガンにまんまと身柄を拘束されてしまったことに関しては主（あるじ）の護衛として忸怩（じくじ）たる

思いがある。
「さあアマデウス様、さっさとここから脱出いたしましょう。そうすればあのタイタス・ラムとも無理矢理顔を合わさなくて…」
　済みます、と言いかけた時だった。隠し戸のすぐ間近、通路の闇の中に濡れるように光る双眸を見つけ、ユーストの明るい瞳が凍り付くように開かれた。ハッハッと荒く短い獣の生温かい息が顔にかかる。悲鳴を上げる間もなく、ユーストはそれに体ごと引き倒されていた。
「だから僕は諦めたのだよ。大人しくしているしかないようだとね」
　メサイアが背後を振り返ると、仰向けに倒れた青年将校の腹の上に人間の大人ほどの巨体を持つ犬が乗っかって、楽しげに尻尾を振っているところだった。
「こいつはいったいなんなんですかーっ！」
「ロレンスの犬だよ。見張りを頼んでおいたんだ。とても優秀なんだよ」

「ロレンスってあの…帝国騎士団長…？」
　思わず聞き返したユーストは訊ねた相手を見て目を丸くした。
「そうだよ。ロレンスが引き取る前は、前の皇帝陛下が飼われていたんだけど」
　執務室の大きな机に乗り出すようにして、見知らぬ少年が微笑んでいる。いや、容姿は何度も似姿や彫刻で目にしていたので全く知らぬわけではない。しかしいつか少年がイスカを訪れた際に、ユースト自身は首都近辺にはいなかったので、本物に出会うのはこれが初めてのことだった。
　その透き通るような瞳――
「皇帝陛下…！」
「待たせちゃって…わざわざ来てもらってごめんね、メサイア。それにお久しぶりです先生。あと初めまして、ブランデル中尉」
　主君のアマデウスが席を立ち、机の向こう側へ回るのをユースト・ブランデルは床の上から呆然と見やった。

「陛下。このたびは私事でご迷惑をおかけしております」
　臣下の礼を取ったメサイアに再び笑いかけ、ユアン・ジュノー＝イグニスは親しい友に手を差し伸べた。

◆

　ユアンはメサイアの連れてきた二人のイスカ人をお茶に招いたが、彼らは辞退して客室へ引き下がった。捕囚の立場にあるのはメサイアだけなので、ユアンは彼らに皇城で自由に過ごすようにと伝えた。
　ユーストとディシトリアスは主（あるじ）の難しい立場をよく心得ていた。ここからは皇帝と彼らの主君、そして同僚の七侯たちの間で内輪の話が始まると感じたのだろう。
　それでも二人からは領主を護り切れない無念さがそれとなく伝わってきて、ユアンとしてはなおさら（メサイアから無理矢理

話を引き出すのはやめよう）という気持ちになったのだった。

皇帝の私室である居間には掃き出し窓から午後の陽が差し込んで、ソファに座る帝国宰相の整った姿にも柔らかい陰影を落としている。

階下からはときおり年老いた侍従長の声が響いており、なにやら城全体が慌ただしかった。ユアン一行がオウラード領へ出発する日が近付いており、城の者たちはみなその準備に大わらわなのである。

しかしこの居間だけは、まるで時が止まったようにしんと静まりかえっていた。皇帝陛下と彼の宰相の話し合いの場を邪魔すまいという暗黙の了解があるのか、さきほどから周囲を通りかかる者すら見かけなかった。

「ブランデル中尉は新しく編成したっていうメサイアの親衛隊員なんだっけ。明るい

し馴染みやすい感じのお兄さんて感じだね」

新しく、というのはイスカでは最近まで前の領主の親衛隊が形骸化しながらも残っており、それを一度解体して人員を一新する必要があったからだ。隊員はすべてメサイアが吟味して選び直したが、信頼できる者の数が圧倒的に少なかったがために、親衛隊は前領主のものよりずいぶんと小さな規模だった。

「ああ見えて有能な男です」

と、メサイアは短く答えた。

「そっか」

ふいに二人きりなのを意識して緊張しながら、ユアンは温まったカップにそろそろとお茶を注ぎ始めた。こんなふうに誰かにお茶を淹れている最中は、ユアンの動作は普段よりゆっくりしたものになる。

それを口にする相手を想いながら、ひとつひとつ丁寧に所作を終えていくこと。そ

うやってユアン手ずからお茶をふるまうことが、今では大切な人たちとの時間に欠かせないものとなっていた。ただし今日はお茶を淹れるまでもなく、頭の中がメサイア・リードで占められている。

顔を合わせたらどんな話をしようか、無理に城へ呼び出した自分を怒ってはいないだろうか——起きて顔を洗っている時も、朝食のパンを口に運んでいるときも、午前の執務中もユアンは彼のことばかりを考えていた。

さらにクーデターの主犯である子供らの扱いを巡って、彼がタイタスと対立していること。そのまま対立を解消できないで、二人が離反しようとしていること。それだけではなくどうもその奥に複雑ななにかが絡まっているらしいこと——

ユアンが掴んでいることといえばそれぐらいしかなかったが、数少ない情報のどこかになぜだか嫌な予感がまとわりついてい

て、ユアンを落ち着かない気分にした。こうやっている今もメサイアに訊ねたいことは山ほどあるのだが…。
「ユーストは隊長を務めているブランデル少佐の弟でもあります。彼らの実家は名の知れたイスカ南部の旧家で、現在は地元ぐるみで僕を支援してくれているのです」
　自身でも主君に対して態度が頑(かたく)な過ぎたと思い直したのか、メサイアはいくぶん口調を和らげて説明を加えた。
「兄弟でいっしょにメサイアを護っているんだね。兄妹で白鳳騎士団にいるジェドとアナみたいだね」
「彼らはベル家の双子とは違って、姉と弟で年齢がいくつか離れてはいますね。いずれはさっきのユーストが家名を継ぐはずですが、軍の中では姉のほうが出世は早かったようです。今回は彼女に城を任せてきました」
　領を離れるときは本来ならばタイタスや

ザンのように周囲の者に権限を与えるか、あるいは摂政を置くべきだったが、メサイアはその代わりにイスカ城に議会を設けようと考えていた。ただその議員の選出方法からしていまだに揉めている段階で、摂政代わりを務めてもらうはずの議長を決めるどころではなかったのである。

「じゃあ俺からの親書はお姉さんに届いたかな。しばらくメサイアを預かるからって書いておいたんだ」

メサイアは口を噤(つぐ)み、ただ軽く頷いた。

彼が先ほどから自分の目を見ないことにユアンは気が付いていた。

メサイアの顔を見るのは、年越しの休暇以来のことである。彼の周囲には相変わらず甘い花の香りが漂っていたが、中毒症状はかなり緩和されてきているようで、依存から抜ける日もそう遠くはないと、ユアンは彼の主治医から聞かされていた。

歩く時に杖をついてはいたが、それもほ

とんど補助的なものに過ぎず、短い時間ならかなり激しい動きも可能なのだと、メサイア自身は主張している。

ユアンは二つのカップをテーブルに置いた。明るい日差しの中、淹れ立ての湯気が琥珀(こはく)色の表面からくっきりと立ち上がっている。

「メサイアが親衛隊を編成し直したっていうことに俺はほっとしているよ。ようやく自分の身を護ることを考えてくれたんだなあって」

「自分の身ぐらい護れますよ…と以前の僕なら答えていたことでしょう。今でも腕が衰えたとは思わないが…やはりこうなっては」

ユアンは彼の向かいに座り、やや自嘲気味に呟いたその顔を眺めた。メサイアはどこの誰から見ても容姿端麗な青年だが、自信に満ちた以前の姿に比べると現在はどこか疲れのようなものが漂っている。

メサイアはカップを手に取って、その中身を一口味わった。こわばっていた口元が微(かす)かに綻(ほころ)ぶのを見て、ユアンの胸が熱くなる。メサイアの微笑みが見たい。もっともっと笑いかけてくれたら嬉しいのに――

「やはり僕は弱くなったのでしょう」

「メサイアは強いよ。ザンや俺たちを救うために自分の身を犠牲にしてくれた…それを弱くなったとは言わないよ」

「以前の僕には怖いものなどなかった。怖いもの知らずゆえに、常に勝利者であることが出来た。他人のことなど顧(かえり)みなければ、人は大胆になれる…だが今の僕はそうではない」

秋の事件の際、目の前で幼い子供たちが狼に喰い殺されそうになったという場面があった。自分自身が命を失う危険性があったのに、それでもメサイアは丸腰のまま飛び込んでいったのだ。

「あの時の僕は勝算よりも目の前の領民の

命を選んだのです。今の僕には大切なものがたくさんある。それを失うわけにはいかず、結果的に自分を崖っぷちまで追い込んでしまうことがある」

そう言いながら、メサイアの頭の中にはタイタスの顔が浮かんでいた。これまで放埒に生きてきたはずのあの盗賊も今、まさに同じ痛みを抱えようとしているのだ。

「ロレンスが以前、同じことを言っていたよ。護らなければならない人が出来たとき、同時に俺には弱点が出来てしまったって」

ユアンの言葉にメサイアは頷いた。

「ロレンスはそれでかまわないと言ったけど、その時俺は思ったんだ。じゃ…じゃあ俺が…ロレンスを護ればいいんじゃないのかって」

そう言いながらユアンは顔を赤らめて口をもごもごとさせた。自身の剣の腕が、ロレンスを取り巻く騎士団の誰にもかなわないことを知っていたからだ。

照れ笑いを浮かべた少年の姿にメサイアは思わず笑みを漏らし、それからカップの中に目を落とした。彼は主君のこういう単純さが嫌いではなかった。ユアンは本能的にいつも正しい。その真摯さは、丁寧に淹れられた茶のように人の心をほぐしてくれる。

「でも俺たちが目指しているのってそういうこと…のような気がするんだ。背負っている重いものを分け合えれば…弱点を別の誰かが塞いでいけば…みんなで一つになって進んでいけば、嵐にも負けずに未来を見られるって」

「お前は正しい、ユアン」

不意に慇懃(いんぎん)な態度を捨て、メサイアが真っ直ぐに自分を見たので、ユアンの心臓が大きく揺れた。

真っ直ぐであるのにメサイア・リードの瞳は暗かった。

「僕たちはお互いにお互いの重荷を背負う

ことにしたのだよ」
「それは…タイタスと君のこと？」
　ユアンはふいに襲ってきた寒気を押さえるように、両の手で膝頭を掴んだ。
「やっぱり君らはただ反目し合っていたわけじゃなかった…囚人の子供たちの処刑を巡って、すれ違いの末に決裂した――それはただの見せかけだ。そういうことなんだね？」
「ユアン…」
　メサイアは苦しげに俯(うつむ)くと、思い切ったように顔を上げ、そして立ち上がった。
「お前を皇帝の座に押し上げたことを後悔していない。僕が心に決めた王はお前だけし、それは今でも変わらない」
　ユアンは目を見開いた。
「い、いきなりなにを言い出すんだよ、メサイア」
「だが無理にタイタスとの密約を明らかにしようとすれば、我々の絆は断ち切れるだ

ろう。どうかそっとしておいてくれ」
　ユアンは唇を噛みしめてしばらくなにか言いたいのを堪(こら)えていたが、やがて我慢ならないとでもいうように立ち上がった。
　テーブルを挟んで睨み合う二人の間を、差し込む冬の陽が刺し貫いている。
「意味がわからないよ、メサイア。君はいつもそうだ。俺の知らないところで自分のことをなんでもかんでも決めようとする」
　ユアンは悔しげに声を絞り出した。
「また俺から離れようとしている。突然あれこれ言われても、俺にはなにもわからないのに…」
「ユアン、わかって欲しい。詳細は僕の口からは言えない」
　予感はあったのだ。これはもしかして大(おお)事(ごと)なのかもしれないと。
　二人が決裂したと聞いたとき、いったい彼らの間になにが起こったのか、ユアンにはほとんど掴むことが出来なかった。二人

が自分の元を去るような予感がしたことだけは覚えている。
「ユアン、僕には護りたいものがある。奴にも護りたいものがあって、その中にお前も入っているんだ」
囁(ささや)くようにメサイアが言った。わけもわからないまま、ユアンは首を振った。
「せめてわかるように説明して欲しいんだよ」
「無理だ」
短く答えると、メサイアは目礼した。そのまま杖を取り上げ部屋から出て行こうとし、そして驚いたように立ち止まった。ちょうど居間へ入ってきた人物と鉢合わせしそうになったからだ。
胸ほどまでしかないその相手を見おろして、彼は「オーガスト」と呟いた。
「お前かよ。人の視界を塞いでんじゃねーよ」
いつものように可憐なドレス姿で現れた

オーガストは、邪魔だと言わんばかりに同僚を乱暴に脇へ押しのけた。
「まったく面倒ばかり引き起こしやがってお前らお子様コンビときたら」
「相変わらずの兄貴ヅラか」
　メサイアが冷笑を浮かべた。
「これでも宰相殿よりはいくつか年上なんだよ！」
　オーガストが噛みつくように言ったが、この手のやり取りは二人にとってはいわば挨拶のようなものだ。
「年末はポーカーで身ぐるみ剥いでやったことを忘れるなよ」
「…とはいってもペチコートの枚数分、君の方がよけいに脱いでいたような気がするが」
　メサイアと七侯オーガスト・モーガンとの仲はタイタスとのそれよりも一見穏健だが、実際はそうでもなかった。オーガストが歯に衣着せぬ性格だというのもあるが、

どこか似たもの同士だからだろうか、会えば張り合って皮肉の応酬となる。ギデオンなどから言わせればそれもまたじゃれ合い、『睦言(むつごと)』に過ぎないのだったが。

「まあとにかく座れよ」

淡い紫のドレスを着たパルヴァ侯はふんと鼻を鳴らした。居間に残る剣呑(けんのん)な空気に気付いているのかいないのか、ずかずかと居間の中央へ歩み寄る。

「オーガスト、戻っていたの。今日はどこかの妖精みたいなドレスだね」

ユアンは慌てて彼を出迎えた。

「妖精さんみたいにお願いは叶えられないが、報告ぐらいならできるぞ」

「報告…ってことは、そうか、タイタスがもう近くまで来ているんだね！」

笑顔になったユアンとは対象的に、メサイアはますます表情を硬くする。

「あの馬鹿が…まんまと捕まったか」

「まあそう言ってやるなよ。あいつの方は

白鳳騎士団が総出で迎えに出向いたんだぜ？」
　馬車の中でも逃げられないようにずっとロレンスが羽交い締めにしていたらしい、と言いながらオーガストは暖炉の上からビスケット入りの籠（かご）を手に取った。ユアンがメサイアに振る舞おうとお茶を淹れる前から温めていたものだ。
「それで今やつはどこに？」
　メサイアが訊ねるとビスケットにむせながらオーガストが待てと手を振った。片手でユアンが新しく淹れたお茶を受け取る。それを口にしてひと心地着いてから、ようやく彼は話を続けた。
「ソレムの例の農場だよ。…ほら、覚えてるだろ？ユアンが皇城から追われていたときに隠れ家にした、あの農家だ」
「ギデオンのお母さんの家だね」
　ユアンが懐かしげに言った。
　あれは彼らが即位する前のことだ。反逆

の汚名を着せられて、永久牢に突き落とされる寸前だったユアンを仲間が助け、匿(かくま)ったのがその農場だったのだ。
「そこにラム団の幹部だった二人を呼んでおいたのさ。とくに奴と親しかった義兄弟を」
　メサイアに説明するようにオーガストが言った。
「ユアンがルーメンを訪ねた際に開放した盗賊団の連中だな」
　納得がいったようにメサイアは頷いた。
　今から数年前に盗賊団を告発し、牢に入れたのは探偵だったメサイア自身なのだが、彼としても内心そのことがずっと引っかかっていたのだろう。ユアンがこっそり彼らを解放したときに手段を考え、率先して準備を手伝ってくれたのはメサイア自身だった。もちろん口止めされているから、彼が裏で手伝ってくれていたことはタイタスには話していない。

「タイタスの喜びようときたら…！まるで遠征からロレンスが戻ったときのワン公たちみたいにはしゃぎまわってさ。義兄弟を抱えたまま、こう庭中をごろごろと…」
　その様子が目に浮かぶようで、ユアンは思わず頬を緩めた。
「よかった。会えたんだね」
「本当にユアンが彼らを解放したのだと知って、タイタスは感謝していたよ。だから一応逃げないで皇城まで行ってやると、そう言ってたな。…もちろん、」
　と、オーガストは部屋の入り口に立っているメサイアを、横目でちらりと見やった。
「メサイアとは極力顔を合わさないようにするだろうけど」
　――もう二度と顔を合わさない。
　それが二人の間にあった取り決めの一つだ。ユアンにはそれ以外のことはなに一つわからない。
「どうせこいつはなにも話さなかったんだ

ろ」
　とメサイアを指してオーガストが言った。
「もしタイタスの気が変わることがあったとしても…とにかく奴はロレンスが必ず連れ帰る。で、無理矢理二人を招集したのはいいが、どうやって口を割らせるつもりだ？それとも鎖に繋いででもフェイの即位式に連れて行くか？」
「繋いでも逃げちゃうよ、この二人なら。メサイアもタイタスも本気になればそれだけのことはやり遂(と)げるし、俺だってそんなことはしたくない」
「いっそ仲直りするまで出られない部屋に二人を閉じ込めちまうとか」
「そんな部屋はこの城にはないよ」
　ユアンは真面目くさった顔で答えた。
「そんなところに入れたらメサイアは怒ってもう二度と口をきいてくれなくなるよ」
「かまいませんよ、この僕が密室からの脱

出に失敗するとは思えませんし」
　冗談ともつかない顔でメサイアが言う。
「俺はさ…俺の我(わ)が儘(ままま)を通すために、やっぱりけじめはつけないといけないと思ってるんだよ」
「どういうことだ？」
　栗鼠(りす)のようにビスケットを頬張りながら見上げたオーガストに、ユアンは決意するように大きく頷いてみせた。
「つまりね…俺は決闘を申し込もうと思うんだ」
「誰に？」
「もちろんメサイアとタイタスにだよ」
　答えながらユアンは拳(こぶし)を握りしめた。どこまでやれるかはわからない。しかし自分の身を彼らの前に晒(さら)さないまま、なにも危険を負わないままで、欲しいものが手に入るなどということはユアンには考えられなかった。
「これは真剣勝負だ。皆の前で俺はメサイ

アとタイタスと闘おうと思う。それで…もしも俺が勝ったら――」
　ユアンは驚いているメサイアに人差し指を突きつけた。
「全てを話してもらう。それからいっしょにフェイの即位式にも出てもらうよ！」
　ビスケットで頬をふくらせたまま、ぽかんと口を開けていたオーガストが、慌てて口の中のものを呑み込んだ。
「止めろユアン！怪我ですまないぞ！お願いだ！ここで止めさせないと、僕がロレンスに殺される」
　ユアンにはもうなにも聞こえなかった。世界の全てが遠ざかっていく。指を突きつけたその先にたった一つ光るもの――メサイア・リードの紫水晶（アメジスト）の瞳だけがユアンの視界を占めていた。

《05に続く》

千年迷宮の七王子SS

残雪のスティルメイト

05

05

お前の顔なんか見たくもねえ、と言いながら、タイタス・ラムはユアン・ジュノー＝イグニスの首に腕を回し、胸元にしっかりと抱き込んだ。

それが傍目(はため)からすると、いつものように親愛の情を示す行動に見えたのだろう。

「お前、ユアンに怒ってたんじゃなかったのか」

オーガストの呆(あき)れるような声がユアンの耳にも聞こえてきた。

「だからこうやって俺さまの目から見えねえようにしてんじゃねえか」

ユアンを抱え込んでいる外套の布地から振動と共に降ってきた声は、たしかに少し怒りを孕(はら)んでいるようだった。

「あ、それユアンをナイナイしてるつもりなの…」

HARUNO ATORI / VAL YOU FRIENDS CO.

「なんだナイナイって！ガキみたいに言うな！ユアンときたら俺さまの弟分のくせになんでもかんでも勝手に決めやがって」
　悪態を付きながら腕でぐいぐいとユアンの頭を締め付けてくる。外套がクッションになっているせいか痛くはないし、タイタスから伝わる熱で暖かかったが、少々息苦しい。
「皇帝さまだかなんだか知らないが、いちいち俺さまが従うとでも思ってんのかよ」
　タイタス自身がユアンを皇帝の位に就けた七侯の一人だというのに、ずいぶんな言い草だった。
「弟分だからこそ、貴方の兄弟たちを牢から解放したのですよ。ユアンはずっとそれを望んでいました」
　窘めるように言うザンの透き通った声は、こうやっていてもユアンの耳に明快に届いた。
　背後で誰かが声を上げなにか言ったが、

あれはたぶんギデオンじゃないかなとユアンは考えた。彼の声は柔らかい低音(バス)で女性の間ではなかなかの評判なのだけれど、耳を塞がれているとやや判別がしづらい。
「そろそろ息が続く限界だ」
　とすぐ傍(そば)でまた別の声がして、気が付くとユアンはタイタス・ラムの腕から解放されていた。ユアンの体を背後に押しやるようにして、タイタスとの間に割って入ったのは騎士団長のロレンス・アクロイドだ。
「たしかに…そろそろ…限界だったかな、ありがとう…ロレンス」
　そう言うとユアンは息を深く吸い込んだ。タイタスの胸に遮(さえぎ)られていた空気がどっと肺に流れ込んでくる。
　息を整え終わると、少年はあらためて背を伸ばした。
「お帰りなさい、タイタス。待ってたよ」
　ユアンが手を差し出すと、ルーメン領主はふんと鼻を鳴らし、顔を背(そむ)けた。

皇城の南西にある玄関口は、かつては皇帝が私用で使うために作られたものだったらしい。広い馬車止めから数段高くなったテラスに頑丈な木製の両扉があり、入ると小さいが豪華な造りのホールになっている。

この玄関ホールと続きの応接間は、現在はイスカに続く洞窟やその他の道の整備をするための事務所としても使われており、皇帝領側から出入りする者たちでごった返していた。

タイタスを連れ帰った一行はその賑(にぎ)やかな玄関口で馬車を降り、ホールを抜けて城の正面側――つまり東のソレム側へ向かう大廊下の途中で皇帝の出迎えを受けた。

夕刻が近付いており、天井の高い大廊下には明かりがすでに灯(とも)っている。外壁を等間隔に穿(うが)たれた窓からは先ほどまで薔薇色

の夕陽が差し込み、一行が到着した頃には大理石の床にほっそりとした縞模様を作っていた。ユアンが一行を出迎え、挨拶をしていたほんのひとときの間に、それらはどこかへ消えてしまったようだ。床に落ちた照明の光輪が、それと入れ替わるようにどんどんと存在感を増していく。

他に人気(ひとけ)もない大廊下の中央で、タイタスに同行したロレンスとギデオン、ザンに加えオーガストが駆けつけて二人の再会を見守っていた。

見知った顔ばかりだが、ユアンとしてはそこにメサイアが居ないことが残念だったし、他の者も同じように感じているに違いなかった。メサイアは現在皇城内に滞在しているが、やはりタイタスと顔を合わせるつもりはないらしく、自身の執務室に籠(こ)もりっきりだ。

皇城の森の中の隠れ家で、皆で揃って休暇を過ごしたのはつい二ヶ月ほど前のこと

である。その際にも一人遅れて到着したメサイアをタイタスが手荒く歓迎するという場面があり、いかにも仲間うちの気安さを思わせるその光景を思い出すたびに、ユアンの胸がきりきりと痛んだ。

力一杯抱きしめておいて、しかし再会の挨拶には一切応(こた)えようとしなかったタイタスは相変わらず横を向き、ユアンのほうをちらりとも見なかった。

その背後には彼の親衛隊員たちが跪(ひざまず)いていたが、二人の顔にユアンは見覚えがあった。秋にルーメン領を訪れた際や、その後にイスカ＝リンナム領へ遠征した際にも、彼らにはあれこれと世話になっている。

「ええっとバーロウ隊長と副隊長のアゼルさん…でしたよね。お久しぶりです。お二人ともいきなり城まで来て頂くことになって申し訳ないです」

ユアンがそう言うと、二人は跪いたまま

顔を上げ、慌てて手を振った。
「とんでもございません、陛下。むしろ私たちのほうこそ、さっさと皇城に顔を出したらどうかとうちの殿下に進言していたぐらいですから」
　と親衛隊長のグレアム・バーロウはどこか晴れ晴れした顔つきで言った。彼とすれば主君が皇帝のお召しにこうやって応える形になったことで、ひとつ肩の荷がおりたといったところなのだろう。
「ほんと、申し訳ないのはこちらのほうですよ。すみません、この人が聞きわけないもので…」
　とタイタスを指したのは、その主君と同じ年頃の青年、アゼル・ブラックソーン副隊長だ。
「多少荒っぽい手ではありましたが、まんまと罠に乗っかってしまったうちの主（あるじ）がアホなだけですし…とにかく陛下の元までこられてほっとしています」

ユアンに促(うなが)されて立った二人の軍人は、やれやれというように肩を竦(すく)めた。
「だけど…あんまり怒らないでやってくださいよ、陛下。タイタス様はタイタス様なりになにかお考えがあって皇城を避けられていたんです」
バーロウ隊長の耳打ちにユアンは頷いた。
「じゃあなぜこんな事態になったのか、隊長たちも知らないんだね」
こんな事態、とはタイタスとメサイアの行き違いから生じた一連の案件のことだ。表向きはテロ首謀者の身柄を巡っての対立だったが、裏にはまだ複雑な事情が隠されているようだった。
「ルーメン人としてはイスカに譲れない気持ちはありますがね、たしかに」
ルーメン人の親衛隊長は苦笑いした。
「それに殿下が過去のいきさつからアマデウス様とは気が合わないのも知っていま

す。…当時探偵だった宰相閣下に牢に放り込まれた敗北感がまだ消えないのかもしれないし」
「敗北してねえし！」
　タイタスが怒鳴ったが、親衛隊長はシカトを決め込んだ。
「…だからといって皇城にまで頑(かたく)なな態度を取るのは間違いだと思うんですよ」
「タイタスは良い部下を持ちましたね」
「まじでこいつよりよほどものがわかってる」
　ザンとオーガストが厳しい顔のまま、うんうんと頷く。
「いやいや、これは恐れ多い。オーデュポン閣下とモーガン閣下からお褒めの言葉を頂いてしまうとは…」
　照れたように頭を掻きながら、親衛隊長は少し赤面した。
「一生の思い出にします…」
　と呟いたアゼルの首に腕を回し、締め上

げながらタイタスは唸(うな)り声を上げた。オーガストはともかく、ザンが自分を差し置いて部下を褒めたことが気に入らないのだろう。
「ラム団の兄弟を自由の身にしてくれたことには感謝してるし、それに免じてここに来てやったが…それでお終いだぜユアン」
「タイタス…」
　ユアンが言いかけると、タイタスはそれを遮(さえぎ)るように長い腕を振り上げた。
「なにも言うな。騎士団まで使って俺さまをいいように呼びつけて、それで満足だろうが。それ以上なにを言おうと俺さまは従わねえぞ？ここにあいつが来ているのも知っているが、俺さまは会わずに帰るからな！」
「それは困るよ、タイタス。俺はもう宣言をしてしまったんだ」
「なんの宣言だ」
　と訊(き)いたのはギデオンだ。

「決闘だよ」
　ユアンが答えたので、周囲の者はみな目を丸くした。
「ユアン…？」
　珍しくロレンスが怪訝（けげん）な表情をあらわにしている。その横でオーガストが「あー」と呻（うめ）きながら額（ひたい）を押さえた。
「だからそれは…さっき僕がさんざん言い聞かせただろユアン。こいつらを城に留（とど）めている間に、僕らが他になにかいい手を考えるから、そいつだけは諦めろって…」
「諦めるもなにもないよ。もう俺はメサイアに決闘を申し込んだんだ。同時にタイタスにもね」
　ユアンがはっきりそう答えると、あたりがしんと静まりかえった。皇帝その人の口から出た、『決闘』という思いもよらない言葉。
　一行が事情を呑み込むまでに一拍は費やさねばならなかったようだ。次の瞬間、薄

暗い大廊下は騒然となった。
「あいつらが決闘…じゃなくてユアンがあいつらと決闘…だと？まさか…正気なのか」
　ギデオンがユアンの両頬を両手で挟むようにして瞳を覗き込んだ。真意を問うと言うよりは、本当に正気を疑っているようだ。
「しょ…正気だけど」
「ユアン…？大丈夫なのか」
　ロレンスもユアンの額（ひたい）に手を当て、首を傾（かし）げる。
「熱も出てないから、ロレンス」
「だれか！ルキウス…アデルをここに呼んで下さい！」
　弟の本気をいち早く察したのか、人を呼ぼうと手を挙げるザンを、ユアンは慌てて押しとどめた。
「やめてよザン、兄ちゃんに説教させようとするのは…。何を言われても俺の意思は変わらないから」

「冗談だと思うだろ？これが大マジなんだよなあ…」
　オーガストが心痛な面持ちでため息をついた。
「決闘…って、陛下が？」
　ルーメン人の親衛隊長はあっけにとられてそれらを眺めていたが、やがて信じられないとでもいうようにおそるおそる口を開いた。
「アマデウス様…メサイア・リードといえば、探偵時代から腕っぷしの強さで有名でしたよね？対して陛下には剣の心得はないはずですが…」
「もし本当になさるにしても、双方に代理でも立てられるのでは？うちの殿下と決闘なんて…そこらの軍人ですらやりたがりませんよ」
　副官のアゼルが小声で答えると、それを聞きつけたユアンが首を振った。
「自分の腕で闘うよ。俺だってロレンスに

剣は習っているし、それに…」
　ユアンは一瞬言葉を詰まらせた。自分が力不足ゆえに決闘という方法しか思い当たらなかった、そのことが少し恥ずかしかったのだ。
「これは…メサイアとタイタスが決めたことを曲げさせるってことで…。だけど二人はたぶん死んでも他人には従わないと思うんだ。だから…」
　すべてを投げ出すしかない。生身の自分、そのままを。
「もうこの方法しかないんだよ…俺には」
「…そうかよ」
　押し黙っていたタイタスが、ようやく口を開いた。ここへ来て初めて彼はユアンを見たが、琥珀の隻眼には見たこともないような鋭い光が宿っていた。その瞳がまるで獣のように冷徹だったので、ユアンは微(かす)かに身を震わせた。
「俺さまを舐めてるんじゃなければ、お前

は俺さまの前に命を投げ出すって言うんだな？…それともお前が相手なら手心を加えるとでも」

タイタスが本気で怒っていることが伝わってきて、ユアンは平静を保とうと唇を噛んだ。意識して体中を緊張させる。そうでもなければあっという間に気圧(けお)されて、心が砕けてしまいそうだったからだ。

「これは…それほど深刻な事態なんだと、俺にはわかったからだよ、タイタス」

さっきからもの言いたげにこちらを見つめているロレンスに向かって、ユアンは頷いてみせた。ユアンの身を護ることを剣に誓っているロレンスには言いたいことがいろいろあるだろうが、もう決めたことなのだ。

「ユアン…」

タイタスが歯の間から押し殺すように呻(うめ)いた。

「お前…」

「帝国中にこの決闘のことを知らせる手配は、実はもう済ませてあるんだ。だからこれは皇帝から七侯への正式な申し出っていうことになる。決闘から逃げれば負けを認めたことになるし、結果も全土に知れ渡ることになると思う」

ユアンは言い終えると口を噤(つぐ)んだ。

宣言を聞いたとたんに、タイタスの目が開かれて、瞳の瞳孔がぎゅうと絞られるのをユアンは見た。

彼には決闘の意図が正確に伝わったのだ。ユアンがタイタスを、そしてメサイアを決して逃しはしないということが。

皆が口々に自分の名を叫ぶ中、静かに押し黙っているロレンスの姿がユアンの目に入った。彼がこの場の誰よりも青ざめているように見え、ユアンの胸が痛んだ。

ロレンスは今、きっと考えているのだろう。

自分がなにを選択すべきか――

ユアンがなにを決めたところで、実のところロレンス・アクロイドには選択肢がまったくないわけではない。手を尽くして宣言の発表を止めることもできるし、決闘の時間が過ぎるまで騎士団に命じてメサイアとタイタスを捕らえて隠しておくことも出来る。

名誉を損じないよう、病欠を装ってユアン自身を拘束しておく手がないわけではないし、最悪決闘が行われても、自身や騎士団が介入するという手もある。

だが彼は止めないだろう、とユアンは思った。

ロレンスはいつも、そうすると決めたユアンのことを尊重し、信じているからだ。そしてそのことをユアンも信じている――いや、知っている。

（ごめん、ロレンス…。また自分はロレンスに心配をかけている。そして皆にも）

（なによりメサイアとタイタスの二人を…

俺は…）

　そう考えて、体の芯から震えが湧き起こるのをユアンは感じた。

　だがやりとげなければならない。

　そうまでして取り戻さなければならない大切なものが、この世にはたしかに存在する。

◆

　マグナ・エンデトリア帝国皇帝領に建つ皇城の中心は、なんといっても正門から通じる大ホール、加えてそこから半階ほど南側上がった場所にある大広間、ホールを挟んでちょうど逆側の回廊の先にある謁見の間ということになるだろう。このあたりは皇城が建てられたおよそ六世紀前とあまり構造が変わっていない。

　謁見の間の裏手にあたる二階部分には皇帝自身の執務室があり、さらに奥へ進むと

庭園に面した明るい一帯が、皇帝の私的な空間となっていた。そこへは庭園に突き出すように作られたテラスの横から上がることもできるし、皇城の中央を登っていく広い階段を使うこともできる。

帝国七侯の一人であり、司法相を務める現パルヴァ領主のオーガスト・モーガンは今、ユアンの私室から続いているその階段を駆け下りていた。何層にもふわりとドレープのかかったドレスを翻し、二段飛ばしに降りていく姿はまるでどこかのお転婆な姫君のようだ。普段ならあたりを通り過ぎる城の者――とくにギデオンや年上の騎士たちの微笑みを誘う光景に違いなかった。

しかし今朝は少々様子が違っている。普段のオーガストからは想像も出来ないような思い詰めた瞳、きりりと真一文字に結ばれた唇。目の下にはたっぷりと黒ずみの層が見て取れた。何事かと思うような形相に、すれ違った城の者はあっけにとられ、彼に

道を譲った。
「ロレンス…！ロレンスはいないのかよ！」
　階段を底まで降りきったオーガストは、半地下になっている廊下へと転がり出た。
　ずらりと小部屋が並ぶこのあたりは騎士団員の私室になっていて、入り口のアーチの左右にはマグナ・エンデトリア帝国とユアン・ジュノー＝イグニス皇帝を示す小さな旗が掲げられている。
「ええっと…どこだっけ、あいつの部屋」
　似たような扉が続く廊下を、オーガストは見回した。
「ったく、ロレンスの奴はまだこんなところで寝泊まりしてんのか…これじゃあ平（ひら）の騎士団員と変わんねーじゃんって言ってるのに」
　騎士団長に就任してもなお、素朴な一人用の寝室を使い続けるロレンスを、幼馴染みのオーガストは以前にも非難したことがある。曰（いわ）く、身分にそぐわないだの、かえ

って周りが気を使うだの、序列があやふやになってしまうだの。
『ここが一番ユアンの部屋に近い』
　というのがそれらに対するロレンスの短い答えだった。一帯は皇帝の警護を任された者たちのための控え室なのだから、それも当然ではあるのだが。
（あいつ、ほんっとまじユアンのことしか頭にないからなあ）
　だからこそ、今朝はここまで飛んできたのだが。
「モーガン卿？」
　半地下の廊下には庭園からの光が少しだけ入り込んでいる。その物陰から声をかけられ、オーガストは振り向いた。
「なんだ、ジェドか」
「団長をお捜(さが)しですか？」
　物陰から進み出た少年に、オーガストは苦笑して見せた。
「いいからオーガストと呼んでくれよ。ユ

アンの幼馴染みにお堅い付き合いは求めてないよ」
「まあいいですよ、俺もそっちのほうが」
　首を竦(すく)めたのは、もうふた月も経てば十八の誕生日を迎えるジェド・ベルだ。
　透き通るような淡い金の髪と、明るい碧(あお)の瞳。細身の少年はどこかユアンと印象が近く、その仕草や物腰も狭い村で共に育ったと聞けば納得できるような雰囲気があった。
「俺もこれから行くところだったんです」
　団長のところへ、と言いながらジェドは大きく欠伸(あくび)をした。つられて欠伸をしたオーガストを見て、笑みを漏らす。
「可愛い欠伸だなあ。そうやってるとほんと女の子みたいで勘違いしそうになりますよ。これが年上の同性とはね。もしかして…そっちも昨日は寝てないんですね」
「まあね。ところでどこなんだ、ロレンスは」

足早に廊下を抜けながら、オーガストは訊ねた。
ジェドは彼よりは少し背が高いぐらいで新米騎士としても小柄なほうだが、その身のこなしは敏捷で、並んでついて歩くのに苦労するほどだった。
「団長は白鳳騎士団の第二演習場です。ユアンもそこにいますよ。昨日の夜中からね」
「ユアンも…？まさか…」
ジェドは頷いた。
「まさかと思うでしょ。昨日は一晩中、決闘のための一夜漬けをやってたんですよ、あの二人」
はあっとオーガストはため息をつき、またきりりと表情を引き締めた。
「なにやってんだあいつは。ユアンを止めるのが仕事だろうが！」
「団長は信じてるんですよ、ユアンの判断を。だけど…ユアンの腕は信じてないみたいですね」

「当然だっ！」
怒鳴りながらオーガストはほとんど走るようにして、皇城の北側に広がる庭へと飛び出した。

皇城に属する騎士団は五つの団にわかれており、それぞれが独立して演習場と詰め所、宿舎を抱えている。そのどれもがこの皇城北側の平地に集まっていて、あたりはさながら小さな町のようだった。
皇帝の親衛隊である白鳳騎士団は、結成自体はユアンの即位とほぼ同時だったために、その歴史はまだ浅い。ただし使用している建物はいずれも年代物で、それぞれに帝国の歴史が色濃く刻まれていた。中の人員が入れ替わっても、歴代皇帝の親衛隊が代々施設を受け継いでいるためだ。
白鳳騎士団の第二演習場は比較的新しく、およそ二世紀前ほどに建てられた木製の屋内道場だった。やや手狭で施設も充分

でないため、普段は倉庫として使われている。

入り口の大きな両扉は閉めきってあったが、すべての窓がつっかえ棒が支えている隙間の分だけ開いており、そこからわずかに午前の太陽が入り込んでいた。それでも黒い板張りの床は冷え切っていて、中央に立つユアンの息は白かった。

オーガストが中へ踏み込むと、彼は驚いたように振り返った。

「オーガスト！どうしたの」

「どうしたのはこっちのセリフだ！こんなところでなにやってる」

「なにって…」

ユアンが返答に詰まると、傍(そば)に立つアナ・ベルが代わりに答えた。今オーガストをここまで案内してきたジェドの双子の妹だ。

「決闘の準備をしているんです」

アナがユアンに付けさせているのは、古い革の防具一式のようだ。使い込まれて黒

光りしている革の胸当ての両脇には新しい革紐が編み込まれていて、少女はその端を力任せに引いていた。
「ちょ…アナ、きつすぎるよ」
「紐が緩んだら、脇から簡単に切っ先が入ってしまうわよ」
「だけどこれじゃ息ができないよ」
「これしき我慢できないのなら、やっぱり私が代わりに出るわ」
「そうもいかないよ」
　ユアンは自分の動きを確かめるように腕を振った。両腕には肘から指の根元までを覆う小手が、太腿までを覆う革のブーツに重ねて膝から下にも同様の防具が取り付けられている。
「そんな薄い皮の防具で、どうやってタイタスの大剣を受け止めるっていうんだ」
　オーガストは眉を顰(しか)めた。
「いや、この練習用の防具、使い込まれててけっこう硬いんだよ。すごい古いみたい

だけど、手入れもされているし…」
　トントンと軽く足を地面に打ち付けながら、ユアンは答えた。
「いやいや装備とかそういう問題じゃなくて…」
「この城の中で調達できるものの中では、その防具が一番ユアンに向いていると思う」
　そう言いながら扉から入ってきたのはロレンスだ。全身から湯気が上がっているように見えるのは、彼がどこかで水を浴びてきたばかりだからだろう。薄いシャツが体に貼り付いて、そこにさらに濡れた長髪がまとわりついている。
「風邪引きますよ、団長」
　ジェドが投げたタオルを受け取って、ロレンスはそれを頭から被った。
「冬に水浴びなんて正気じゃない…」
　と言いながら幼馴染みの顔を見たオーガストは、一瞬言葉を途切らせた。

この一晩、ユアンに剣の手ほどきをしながらも内心は嵐のように荒れていたのだろう。どこか狂気じみた光が青い瞳の奥に残滓のように鈍く輝いていて、オーガストは胸の底が冷えるような思いがした。

（正気じゃいられないってか…）

良く耐えたな、と言ってやりたかったがそこは堪(こら)える。

（本人にも何を耐えたのか、本当はわかっていないのかもしれないしな…だけど僕は、ロレンスがユアンを抱えて昨日のうちに城から出奔していても、たぶん驚かなかったと思う）

ロレンスの頭の中では『ユアンの気持ちを尊重すること』が最優先になっているのだろうが、本能の部分では『ユアンの存在そのもの』こそが重要だと思われるからだ。

「あのさ…言いにくいんだけど、やっぱ無理だったよ」

心の中で「ごめんな」と謝りながら、オ

HARUNO ATORI /HALYOU @alkawayou

ーガストは続けた。
「こっちはこっちでギデオンと帝国中の法令と過去の資料を掘り返してみたんだが、やっぱり『皇帝の私闘』を禁じた例は見つからなかった」
　それさえ見つかれば、ユアンの名誉を傷付けずに決闘を止めさせることができると思ったのだ。
「エンデトリア憲章では七侯同士の私闘は禁じているんだが、皇帝と七侯の間の私闘というのは前代未聞だったようで」
　わかっている、というようにロレンスは頷いた。
「オーガスト…」
　ユアンが少し泣きそうな顔で呟いた。
「本当にごめん、皆。心配かけて」
「ユアンが決闘に負けて死ぬなんて、誰も思っちゃいないさ」
　ジェドがもう一枚、タオルをロレンスに放ってやりながら言った。

「お前は勝つ。それはわかっているんだよ」
「皆信じているもの」
　アナが頷いた。
「普通にやれば、ユアンが負けることはわかっているわ。一方的な勝負になる。…だけど、タイタス・ラムも、メサイア・リードもユアンを殺そうとはしないと思う。ううん、殺せないのだわ、ユアンが大切だから。私たちは二人のユアンへの気持ちを信じている。だから、最終的にはユアンが勝つことになると思う」
　問題は――
（そのことをメサイアとタイタスもわかっているということだ。だから…あの二人はユアンに対して相当怒っているはずだ。それこそ自分への忠誠や友情を天秤にかけさせ、彼らの意思を曲げるような行為だからな、この決闘は）
　つまり、ユアンは彼らをすでに地にねじ伏せているのだ。ユアンを屈服させられな

い以上、彼らの思惑は破綻する。つまり二人は負けを認め、密約もいずれは暴かれることになるだろう。

（メサイアとタイタスはそのことを受け入れるのだろうか。受け入れざるを得ないだろうが…。取る手立てがこれしかなかったのはわかるが、これは相当荒れるぞ、ユアン）

メサイアとタイタスの間に交わされた密約は、おそらく自分たちが考えているより重いものだろう。結果的にはその重い決断を曲げさせるのだから、並大抵のことでは収まらない。

ユアンは皇帝であり、彼らは臣下だが、決して一方的に捧げたり捧げられたりする間柄ではなかった。対等の友人だと認めているからこそ、きちんと代償を払わせようとするだろう。

さらにメサイアもタイタスも生温い世界で生きてきた青年ではないし、ただ甘やか

して頭を下げることがユアンのためになるとは決して思ってはいない。

そして――

青白いロレンスの横顔を見上げながら、オーガストは考えた。

ユアンはすでに傷付くことを受け入れている。

それが腕一本なのか、足なのか、耳なのか、その青い瞳なのか。代償を払う覚悟で、皇帝ユアン・ジュノー＝イグニスはそこに立っているのだった。

《06 に続く》

千年迷宮の七王子SS
残雪のスティルメイト
06

06

太陽の化身が地上に降り立ち、人々に知識と光を与えた。それがかつて滅びた国《アディール》の成り立ちだと言われている。

海を隔てた彼方の国――今は別の部族に取って代わられ、名前も変わっているが、そこがハンニバル・モーガンの生まれ故郷なのだった。

国を追われたときにまだ幼い少年だったハンニバルは、豪商モーガン家の跡取り、オーガスト・モーガンにその身を買われて以来、自分の過去を無いものとして振る舞ってきた。

オーガストから与えられた《ハンニバル》という名だけが自分の名前だったし、奴隷という身分でありながらもモーガン家の一員として生きることは誇りでもあった。

オーガストという希代の才能に巡り会え

たこと、そしてその出会いが自身を成長させてくれたこと――故郷を失ったことはむしろ幸運とすら言えるのではないかと彼は考えていた。

だから本気で忘れていたのだ。海の向こうの《アディール》のことなどは。

（あの“馬鹿王子”のせいで、思い出すことが多くなってしまったが…）

暗闇に馬を走らせながら、ハンニバルは主君に思いを巡らせた。

皇帝候補として選出される前から、タイタス・ラムは謎多き人物だった。義賊の首領として世間に名は轟（とどろ）いていたが、路上育ちで、両親はおろか、年齢すらわからない有り様であった。

それが明らかになったのは、つい一年前のことである。

（まさか、同郷の出身…それも世が世なら私の王となる人物だったとは）

盲点だった、とハンニバルは考えた。新

しく皇帝の位に就いたユアン・ジュノー＝イグニスとオーガストを加えた七侯たちには興味があったが、正直その中でもタイタス・ラムにはあまり注意を払っていなかったからだ。

現七侯、ルーメン領主タイタス・ラムは本名を《シャハル・アディール》といい、亡国アディール王家最後の生き残りであるらしかった。本人も最近までそれを知らずにいたが、昨年の春に海の彼方の陰謀に巻き込まれかけて、全てが明らかとなった。

その半生はユアンと七侯の手によって英雄譚として広められ、いまや全ての帝国民の知るところとなっている。

（まさかタイタス・ラムの出自が今回のことに深く関わっているとは…あのユアン・ジュノー＝イグニスもまだ気付いてはいないだろう）

皇城を発（た）つ前に、ハンニバルはユアンから決闘を決意したことをひそかに告げられ

ていた。タイタスとメサイアの密約を暴(あば)き、彼らが仲間から距離を置くのを食い止めるためだ。

（そもそも今回の問題を陛下に持ち込んだのは私だ。タイタスとアマデウス・フロックハート卿との間に、囚人の取り扱いについて行き違いがあったようだと。しかし彼らの間に実際は何があったのか…どんな約束がとり交わされたのか。おおよそは推測できるものの、ルーメンの摂政役を務める私の口からそれを語ることは出来なかった）

ただの推測であれ、自領の重大な密約を他者に明かすのはルーメンへの裏切りにあたる。個人的にはそれ以上に、タイタスを裏切りたくないという気持ちが大きい。しかしこのまま放っておけば必ず近い未来、ユアンの政権に悪影響が出ることは確実だ。

なによりユアンや仲間たちに対して秘密を持つことで、タイタス個人が生まれ持っ

ている太陽のような率直さが翳(かげ)ってしまうことが、ハンニバルには耐えがたかった。
（なんやかんやいって馬鹿王子の馬鹿さにはいつも救われているし、私はそれを…おそらくはほとんど愛しているといっていい）
　そうして悩んだ末に、二人の主君への忠誠が同時に守られるギリギリの線が、ユアンに事情を話さずに相談を持ち込むことだったのだ。
（まあそれだけでもタイタスは激怒しているだろう。あとはあのユアン坊やがどうやって彼ら自身からそれを引き出すのだろうかと思っていたが…）
　その方法が決闘とは…ずいぶん思いきったものだ。
　風を切る馬の背の上で、ハンニバルは唇にうっすらと笑みを浮かべた。彼はユアンのその、安全も外聞も大人げも捨てた泥臭い選択が嫌いではなかった。得たいものが

あるなら、代償は払わなければならない。かつて少年にそう教えたのはハンニバル自身だ。

あの時も迷いながらユアン・ジュノー＝イグニスは、帝国臣民全ての安全のためにそれを支払った。彼にとってもっとも失いたくない、価値のあるもの――彼に忠誠を誓った騎士、ロレンスの命を。

あの瞬間がなければハンニバルは今ここにいなかった。ユアンが本物の代償を支払ったからこそ、ハンニバルは彼を信用することができたのだ。そして少年に跪（ひざまず）き、忠誠を誓い、ハンニバルはユアン・ジュノー＝イグニスの家臣となった。

ちょうど正午になる頃か、と異国生まれの青年は洞穴の底知れぬ闇を見上げた。そろそろユアンとタイタス、それにメサイアを加えた三者の決闘が始まる頃合いだ。

皇帝領とイスカ領を繋ぐこの巨大な地下道には、時を示すものはなにもなかった。

HARUNO ATORI /HALLOU

しかしハンニバルにとってはすでに通い慣れた道で、通過する拠点の数でおおよその時間は計れるようになっている。

最近この洞穴の道へ足を踏み入れたのは、つい数日前。オクト＝ノクテ領の娼館でイスカ領主アマデウス――メサイア・リードを捕らえた際のことだ。あの時は皇帝領までの道のりを馬車を護送する騎士団について進んだが、現在は逆だった。イスカ＝リンナム領へ向けて、闇の道をひた走っている。

秋にイスカで起きたクーデター事件の際にも、ハンニバルは幾度かここを行き来した。その頃より道は格段に通りやすくなっている。

もともとが長い年月をかけて整備されてきた洞穴だが、現在は利便性がさらに増しているようだった。ユアンがイスカの民のために、この地下道を開放すると宣言して以降、大規模な改修事業がどんどん進めら

れているためだ。
　長い洞穴の皇帝領側は領境あたりまで人足が入り、道を補修したり、馬を休ませられる宿泊施設の建設が行われていた。かつてここを使っていた者たちが休息のために置いていた小屋を中心に拠点が広げられ、その間の道を等間隔に松明が照らしている。
「この分なら予定より早く着きそうだ」
　ちょうど地下道の半分を過ぎた頃だろうか、ハンニバルは拠点の一つで馬を降りた。後を追ってきた部下たちも、すっかりくつろいだ様子で鞍から降ろした荷物を整えている。
「いつもながらこの道は快適ですよ。二月にしては暖かいし」
「拠点ごとに世話の終えた馬を用意してあるのが助かります」
　共に皇城を出発した赤狼騎士団の若い団員も数名、馬を降りながら言った。馬も人

も全力疾走を終えたばかりで、白い息を鞴(ふいご)のように吐き出していたが、彼らの顔は一様に明るかった。

今回は命の危険もなく、無事に皇帝から与えられた任務を終えられそうだと誰しもが安堵している。この先、ハンニバルたちが目指しているのはイスカ城だが、騎士たちのほうは洞穴を出たらオクト＝ノクテ領に向かう手筈になっていた。

「アマデウス・フロックハート卿自らが、馬を置くように整備されたらしい」

とハンニバルは言った。メサイアの馬車を護送したときに、付き添っていたイスカ人の将校がそう自慢するのを聞いた気がする。

「それで皇城とイスカ城との情報の共有が、今ではどこよりも早いのですね」

騎士の一人が頷いた。

「もともとは彼自身がここで馬を使うために置いているのだそうだ。今はお体にさわ

るので馬車を利用されているが」
「全力で走らせても馬が潰れない距離をよく知っていらっしゃる。さすがはメサイア・リードといったところか」
「そろそろ宰相にも復帰して頂きたいものだ」
　馬のための施設がどうのと言いながら、騎士たちがしきりに感心している。彼らはオクト＝ノクテ領に届ける親書の中身――皇帝陛下の決闘の件をいまだ知らされていないのだろう。任務とはいえ前向きにこの旅路を楽しんでいるようだった。
　だが皇城の庭では今まさに、彼らが護るべき皇帝陛下とその宰相アマデウスとの間で決闘が行われようとしている。そしてハンニバルの主君であるタイタス・ラムも――
（あまり無茶をしないでくれよ、宰相殿も馬鹿王子も。代償とはいえ、ユアン・ジュノー＝イグニスが血を流すことで傷付くのは

…)

おそらく、お前たち自身なのだから。

馬飼が新しい馬を引いてきたので、ハンニバルはそれに跨(また)がった。イスカ＝リンナム領へ続く道、静かな闇の中に松明が点々と続いている。

彼らはこれから帝国全土に、皇帝と七侯の決闘を宣下しに行くのである。そしてハンニバルの懐(ふところ)にはもう一つ、ユアンから託された勅令書が隠されていた。

勝負がつき、それがイスカ城にもたらされたとき。

タイタス・ラムとメサイア・リードは決闘の果てに隠された、ユアン・ジュノー＝イグニスの真意を知ることになるだろう。

◆

少しは寝られたのかい、と訊ねられてユアンはうん、と頷いた。なにか食べた方が

いいと言われたが、それには首を振った。
「ちゃんと朝に食べたから、今はいいよ」
「…そうか」
　アデルの声が普段より静かだったので、ユアンは「大丈夫」とまたくり返した。
　胃にものを入れることで身が重くなれば、昨夜あれほど叩き込んだ動きを再現できるかどうかユアンには自信がなかった。

　晩冬の太陽が精一杯の高さまで天空を登り、時刻は約束の正午になろうとしている。
　ユアンが決闘の場所に選んだのは、皇城の庭園の一角にある小さな広場だった。普段からユアン自身が剣の練習をするのに使っている場所で、そこがいいだろうと提案してくれたのはロレンスだ。そのほうが緊張しないで済むだろうと彼は言ったが、ユアンはやはり少し緊張していた。
　広場の周囲には人の二倍ほどある高さのカメリアの木が植えられていて、花は終わ

りかけていたが、冬も濃い緑が目に清々しかった。その根元や、広場の隅(すみ)には数日前に降った雪がまだ残っており、真昼の太陽を受け白く輝いている。

すでにメサイアとタイタスを除く皆がそこに集まっていた。大切な者たちの顔を一人一人見回しながら、ユアンは使い慣れた練習用の剣の柄を握りしめた。

意外だったのはたぶん来ないだろうと思っていたアデルが、真っ先に姿を現したことだ。ユアンは昨夜初めて、この血の繋がらない兄と本格的に喧嘩をした。言い争いは物別れに終わり、お互いに顔を背(そむ)け合って別れたのに、今はこうやってただユアンの心配をしてくれている。

アデルの横には目を閉じたザンが寄り添っていたが、こちらの血の繋がった兄の方は何を考えているのか、その静かな表情からは読み取ることができなかった。昨夜はザンもひとしきりユアンを説得しようと試

みたのだが、弟の決意が固いことを知るとふいに黙り込んでしまったのだ。

ザンの横にはギデオンがいて、身を捩(よじ)って逃げようとする少女ベレンガリアの手をしっかりと握っていた。

ベレンガリアは誰かが怪我をしたら自分が手当をするのだと名乗りを上げ、広場へとやって来た。当然、子供である彼女に決闘を見せるのは早いのではないかと周囲は困惑した。そういうわけで人一倍子煩悩なところのあるギデオンが、先ほどから彼女を広場から追い出そうとやっきになっていたところだった。しかししまいには、少女の粘(ねば)りにとうとう折れたようだ。

手を繋いでいるのは、決闘を見せる代わりに、せめて大人が傍(そば)に付いているべきだと考えた末(すえ)のことだろう。どうせ繋ぐならザンの手がいいのだとベレンガリアがしきりに主張していたが、これは自分の役目だと言わんばかりに彼は手を離そうとはしな

かった。

立会人に選ばれたのは宰相代理のイスカリオットで、もともと感情の薄そうな顔が今日はさらに無表情になっていた。もちろん言いたいことも多いだろうが、彼は皇城をとりまくあらゆる事柄に対して原理主義を貫く男だった。その性格ゆえに、最終的にはいつも必ず彼は皇帝が決めたことには従うのだ。

仏頂面のイスカリオットの横には女装姿のオーガストが仁王立ちしており、身長差の大きい奇妙なコンビがそこにできあがっていた。

オーガストは今朝会ったとき同様目の下に隈(くま)を作ったまま、アデルがユアンのために作ってきた弁当をせっせと平らげていた。大口で魚のパイを頬張って、ただひたすら中空を睨(にら)んでいる。それが猛烈に頭を働かせている時の彼のいつものポーズだったので、ユアンは声をかけずにあえてそっ

としておいた。
「ユアン、これでどう？」
「痛くないよ。ちょうどいい具合に隙間もできてる」
　広場の中央に立つユアンの傍（かたわら）には幼馴染みの双子が寄り添って、装備の最終点検を行っているところだった。
「ほらね」
　と言いながら、ユアンは胸当ての間に指をねじ込んでみせた。ロレンスが「しっかり固定すべきだが、少し余裕があるのがいい」とアドバイスをくれたおかげで、アナが革紐を少し緩めてくれたのだ。
　双子の上司でもあるロレンスといえば、先ほどから少し離れたところに立ってこちらを見守っていた。時間を追うにつれその表情が焦燥に覆われ、青ざめていく様子なのが、ユアンにとっては気がかりといえば気がかりなのだが――
　幾度か「大丈夫、ロレンス？」と声をか

けたが、そのたびにジェドが「団長は大丈夫じゃない」と代わりに返答するので、ユアンは密(ひそ)かに閉口していた。

騎士団に所属する幼馴染みたちが、団長のロレンスと共に過ごす時間が長いことはユアンにもわかっている。しかしジェドの、いかにも彼の全てをわかっているとでもいうような口ぶりには、ユアンとしても胸のどこかがもやっとせざるをえないのだった。自分には見えないロレンスの姿が、幼馴染みにだけは見えているのだとしたら…それはちょっと悔しい。

そうやってジェドが口を挟むたびにロレンスは首を振って否定し、律儀に「問題ない」とくり返した。

「ユアン、これを」

最後にロレンスが頭部を覆う防具を差し出してきたので、ユアンは黙って彼の方へ首を差し出した。

革の防具には頬当てと、さらに額から鼻筋

にかけては革で覆われた鉢がねが取り付けられている。ロレンスがそれを被せると、ユアンの顔は半分ほどが隠れて、視界がいくらか狭くなった。

この古いフェイスガードも他の防具と同じくロレンスがどこからか見つけてきたもので、年期のために光沢を帯びた表面は、軽さの割には充分な防御力がありそうだった。アナが言うには「動きやすいし、うっかり当たった時にもかすり傷を避けるには最適、だけど本気で刃を突き立てられたらおしまい」という強度であるらしい。

「後ろを」

そう言われてユアンは後ろを向いた。ロレンスの手がひとつひとつ確かめるように、後頭部の革紐を締めていく。祈りを込めるかのようなその手つきに、ユアンは神妙な気持ちになり、目を瞑(つむ)った。

（これからなにが起こるとしても…どうかロレンスが――皆があまり動揺しませんよ

うに。俺の決心で皆が傷付くことになるけれど、それでもメサイアとタイタスの重荷を、俺も共に負えますように）
「ロレンス」
　ユアンは背後に立つ友に囁（ささや）いた。
「言ってなかったけれど…なにがあっても…手は出さないと約束してくれるよね」
　少し息を呑むような気配があったが、
「ああ」
　と短く答えが返ってくる。
「もしもの…ないと思うけどさ、もしもの時は、あの二人の判断を尊重して欲しい。俺に何があろうとそれは俺の選んだことで、あの二人は変わらずにずっと友達だから」
「…友人でも許すかどうかはわからない」
　ユアンにもしものことがあったら、と背後から呟く声が聞こえてくる。
「俺は信じるよ、ロレンス。君のことも、二人のことも」

ユアンは紐を結ぶ彼の手が少し震えたような気がした。だがロレンスはそれをやり遂げると主(あるじ)から離れ、双子たちとともに広場の端へと引き下がった。

これで準備は整った、とユアンが顔を上げた、ちょうどその時だった。

「遅くなりました」

広場の入り口に、護衛を連れたメサイア・リードが入っ てきた。その背後、続いて庭園の小道をやってくるのはタイタスとその親衛隊長たちだ。

二人は顔も合わせずに、並んでユアンの前に立った。

「時間だ」

懐中時計を睨んでいたイスカリオットが言い、手を挙げた。広場の中央から残っていた者たちが退いていく。

「さあ、始めようぜ、ユアン」

肩に担(かつ)いでいた幅の広い大剣を降ろし、タイタスが真っ直ぐにその切っ先をユアン

に向ける。
「ユアン、本当に…」
　前のめりに足を踏み出しかけたアデルを、アナが引き止めた。
「アデル、今邪魔をしてユアンの気を逸(そ)らしたら、よけいに危険だわ」
　ユアンはイスカリオットに頷いてみせ、そして剣の鞘(さや)を払った。
「決闘だ、タイタス、それにメサイア。どっちでもいい、同時でもいい。かかってくるといいよ」
　ユアンが剣を構えると、唸(うな)り声を上げてタイタスが前へ飛び出した。

◆

　タイタスが飛び出すと同時に、メサイアは背後へ引いた。目を合わさずとも彼がそうしたがるのはわかっていたし、先に行かせるべきだと思ったからだ。

HARUNO ATORI /HALYOU @aikawayou

（ユアンが正式な決闘を申し出たときから、これは茶番になることがわかっていた。だがタイタスが本気なら、これは“危険を伴(ともな)う茶番”になる）

ユアンがちらりとこちらを伺うのが見えたが、メサイアは動かなかった。今はまだ、自分の出る幕ではないと思われたからだ。（それにしても相変わらず阿呆みたいだな、あの剣は）

騎士団の修練所で、タイタスがあの大剣を振り回しているところを、何度か見かけたことがある。もともとは白鳳騎士団本部の壁に掲げられていた歴史ある宝剣だが、実用性については首を傾(かし)げざるをえなかった。

タイタスは長年短剣を自らの得物にしていたはずだが、七侯の役目として皇帝軍の総司令官を任されたときに帯刀を勧められ、最近では剣も扱うようになっている。大剣がこのような場面では実用的ではない

ことも知っているはずだが、もしかするとだからこそあえて選んだのかもしれなかった。
（見かけ倒しだが、迫力はある。まずはとにかくユアンを脅(おど)したいのかもしれないな）
　タイタスの扱う剣の軌道は読みやすかった。今のところはユアンも正確にそれを避けている。
　かといって、彼が振り回しているあの大剣をまともに受ければ、その時点で革の装備などなんの役にも立たない。打ち所が悪ければ、なにもかもが一瞬で終わってしまう可能性すらある。
　だが少なくとも今は、たしかにタイタスの剣さばきは脅しの範囲を出てはいなかった。ユアンを追いつめることにのみ、神経を集中させている。
（盗賊め、ともかく今は冷静なようだ）
　本人達の冷静さとは裏腹に、広場は異様

な緊張に満ちていた。誰もがこの決闘のどこまでが本気なのか、固唾(かたず)を呑んでそれを見定めようとしている。

ユアンがどう主張しようが、帝国中に宣下された神聖な決闘であろうがなかろうが、どちらかが怪我をしたとたんに、ここにいる者たちは即座に止めに入ろうとするだろう。

ユアンの動きは剣を避けることのみに重きを置いており、それはいまのところ功を奏しているようだった。タイタスの腕が持ち上げられるたびに、大剣が空を切る。その際に鉄の塊が奏でる重い音は、聞く者の背筋を凍らせた。

再びタイタス・ラムの腕が高く差し上げられる、その瞬間を狙って、またユアンの足が軌道を変えた。代わりに大きな刃が広場の床に振り下ろされ、鈍い音とともに敷石がいくつか地面から飛び上がる。その威力に、思わず周囲から声が上がった。

（とことん避けるようにユアンを訓練したのはロレンスだろうが、もしあれが一つでも当たっていたら…）

メサイアはちらりと背後を伺った。広場の外縁に一際（ひときわ）背の高い騎士の姿を認め、彼は目を細めた。石のように動きを止めたロレンスは、ユアンを一心に見つめながらもほとんど顔色を失っていた。

その帝国騎士団長の両脇にはタイタスの連れてきたルーメンの親衛副隊長と、メサイアの護衛であるユースト・ブランデルが腕を組んで並んでいる。もしロレンスが飛び出すようなことがあれば、それを止める目的で張りついているのだろう。闘いの天才であるロレンス・アクロイドが乱入すれば、危ないのは主君であるタイタスやメサイアのほうだからだ。

（よけいなことを…）

ユーストがメサイアの代わりに剣を取りたいと申し出てきたのは昨晩、遅くなって

からだ。
『殿下の代わりに私が陛下に斬られます。あるいはそれをお望みなら…あの少年を私が斬ります。その咎はすべて私が引き受けたく思います』
　メサイアは首を縦に振らなかった。それではこの決闘の意味がなくなる。
『ユアンが見つけたたった一つの解決策が、決闘という茶番なのだよ』
『茶番なら、なぜ行う必要があるのです！』
　ほとんど叫ぶようにユーストは答えた。
『結末がわかっていたとしても、命を賭けた末に着く勝負でなくてはならないからだ。ちょうどタイタス・ラムと僕が真剣に関係を絶ったようにね』
『意味がわかりません、殿下』
　怒鳴った彼の前で、メサイアは扉を閉めた。ユーストが自分の身を案じているのはわかったが、これはあくまでユアンが自分たちのために用意した試合なのだ。

「ユアン、てめえ！」
　再び剣をかわされたタイタスが吠える。あれはそろそろ本気で頭にきているな、とメサイアは内心身構えた。
「逃げ回りやがって、ロレンスの差し金か？そうやっていれば、俺さまがいつか諦めるとでも？でなければ、腕一本でも差し出せば、それで俺さまが納得して負けを認め、膝を付くとでも思っていやがるんだろう」
　ユアンがふと動きを止めた。メサイアの脳内に危険信号が点(とも)り始める。目の前の状況に煽(あお)られて出たタイタスの売り言葉に、ユアンもまた振り回されているのだ。
「俺はそう思っているよ、タイタス。それが気に入らないのはわかってる…だけどそこまでやれば、きっと君が手を引くだろうと思っているんだ」
　タイタスを睨み返すユアンの瞳は、いつしか激情の色を帯びていた。燃えるような眼光。

（あの瞳だ。千年迷宮城で剣を手にしたギデオンを、前にした時のユアンの眼――）

一瞬周囲を忘れ、メサイアは思わずその色に見入った。

絶望的な状況で見せるユアンのあの熱は、それでも前に進むという少年の決意の表れである。かつて出会った千年迷宮城で、メサイアはその光に撃ち抜かれたのだ。

同じく苛烈な光を眼に宿したタイタスが、ぐっと片足を引いて姿勢を低くした。柄を握りしめる両手に力が込められるのを見て、ほとんど意識しないまま反射的にメサイアは自らの剣に手をかけた。

「引けよ、ユアン。今勝負を降りるなら許してやる…！」

タイタスの恫喝（どうかつ）には、悲壮な響きが混じり込んでいた。それに真っ先に気が付いたのは、ザンだっただろう。

「まさか本当に、タイタスには引く気がないと…？」

ザンが小さく叫び声を上げると同時に、ロレンスが身じろぎし、それを両脇で二人の軍人が食い止める。タイタスの真意が理解できないのだろう、ロレンスにはまだ迷いがあって、そのせいで彼は一瞬足を止めた。

「引け！ユアン！」

振り下ろされる大剣――

（まずい！）

そう脳裏に言葉が浮かんだときにはすでに、広場の中央にメサイアは身を踊らせていた。

がちん、と金属のぶつかる嫌な音が響く。両者の間に割り込むように立ったメサイアが、両手で構えた細身の剣でそれを受け止めていた。

「ユアン！」

「もうやめろ！」

「やめさせてくださいメサイア！」

広場の端々から悲鳴が上がる。

「な…」

剣を止められたタイタスが、大きく目を開いた。彼が驚いたのはメサイアにではない。その後ろに立つ、ユアンに対してだった。

ユアンは目を閉じ、剣を持つ右腕を降ろしていた。その場所から一歩も動こうとはせず――

『なぜ避けない、ユアン？』、タイタスはそう言いたかったはずだ。言葉を失ったまま食いしばった口を開いて、彼は大きく息を吸い込んだ。広場中の者たちが息を止める中、メサイアは二ヶ月ぶりに昔なじみの好敵手の顔をまっすぐに見た。

「ユアンは引く気がないのだよ。お前は彼をもっと脅せば心理的にも追い込めると考えた。まだユアンを屈服させられると希望を抱いている…だが、我々の陛下はやはり覚悟を決めておられた」

「どういう…ことだ」

「お前の脅しの一撃に乗じて、血を流そうとしたのだ」
「なに…」
　メサイアの背後に立つユアンを、タイタスが盗み見た。そのとたん、隻眼に恐怖の色が浮かぶのを見て、メサイアにはユアンが今どんな顔をしているのかが手に取るようにわかった。
　彼は今、静かな表情をしているに違いない。すべてを受け入れ、前へ進むために覚悟した者の表情だ。
「ユアン…」
　タイタスの顔が歪(ゆが)んだ。悔しさ、哀しみ、憎しみ、愛おしさ。ユアンと自身に対して、そのすべてがない交ぜになっている。
「どうあってもユアンは我々に参ったと言わせるつもりでいる」
「俺さまは負けを認められねえんだよ！それはお前だってわかってるはずだ！」
「諦めろ」

とメサイアは低く囁(ささや)いた。我々はもう負けているのだから――

ユアン・ジュノー＝イグニスは自分の剣の腕がさほどではないことで、逆に優位に立っていた。お互い相手を傷付けたくないと思っている同士が剣を握れば、先に剣を手放すのは自然に『腕が立つほう』となる。

それを見込んだ上で、相手が先に音を上げるように脅しをかけたのがタイタスだった。だがユアンはそれで引くような臆病者ではない。

「ユアンは生粋の馬鹿なんだよ。お前と同じようにね」

メサイアが言うと、背後で「酷いな」と小さく呟く声が聞こえた。

「そして自分の価値というものを低く見積もっている。彼はここにいる誰もが、彼の血一滴すら見たくないと思っていることを、本当には理解していないのだよ」

「わかっているけど、俺はそれに甘えるわ

けにはいかないんだ」
　また背後で小さく声が聞こえた。
「小さな子供でも、護られるだけの存在でもない、俺は――俺が臣民のための騎士であることを心に誓ったんだから」
「く…」
　ユアンの声を聞いたタイタスが、また呻(うめ)き声を上げた。タイタスも、メサイア自身も、またユアンと同じ理由でここに立っているのだった。領民のための騎士であろうとして、主君であるユアンと衝突せざるを得なかったのだ。
　ルーメンの領主であるタイタスの背には、それに加えさらに多くの責任が乗せられていた。かつて滅びた国の、人々の命だ。
「…だが僕も領民の手前、この程度で負けを認めるわけにはいかない。あとは僕に任せてもらおうか、タイタス」
「誰が…お前なんかに…」
　そう言いながら、タイタスは剣を降ろし

た。
「お前だってユアンを納得はさせられないくせに…」
「ああ」
　とメサイアは頷いた。
「だが僕はお前のように甘くはないのだよ、タイタス」
　メサイアは自覚していた。ユアン・ジュノー＝イグニスに惹かれて、膝を付くしかない自身がここにいる。
　だがタイタスのように一方的に護るべき少年としてユアンを見ているわけではないのだ。タイタスはいざとなれば最終的には立場を捨てて、ユアンを取るだろう。その上で全てを背負おうとする。そういう意味でも彼は生まれついての王者、英雄なのだった。
　例えばロレンス・アクロイドは他の誰よりもユアンを必要としている。ユアンが無事でありさえすれば、マグナ・エンデトリア

が滅んでも彼は満足するだろう。
　だがメサイアの想いはもっと昏(くら)い。
　ユアンの人となりが正道を歪めるもので、皇帝の椅子に座らせたことが間違いだったと気付いたときには――
（僕はおそらく帝国から彼を奪うだろう。だれの目にも届かないところに連れて行く。そして僕自身が目を閉ざすだろう。その後の世界を知りたくないあまりに）
　それゆえにそもそも傷付けることなどは厭(いと)わない。それが自分の手によるものならば。
「ユアン、剣を構えるがいい。僕が代償を支払わせよう。君への気持ちを天秤に量(はか)り、僕たちを屈服させたその傲慢さには辟易(へきえき)させられる」
　だが、同時に愛おしい。身を投げ出してそれでも離れられないと告白されたも同然の、この茶番が。
　タイタスが後ずさると、メサイアは剣を

構えた。視界の端でロレンスが顔を押さえるようにしているのが見える。メサイアにはそのロレンスの苦悩ですら、今は心地よかった。

ユアンがまっすぐに自分を見ている。メサイア・リードを捕らえようと、灼きつくような瞳で見つめている。

そのことにただ、メサイアは体の底から震えるような喜びを感じた。

《07 に続く》

千年迷宮の七王子SS
残雪のステイルメイト
07

07

縦横無尽に襲い来る刃（やいば）になすすべもなく、ユアン・ジュノー＝イグニスは後退した。攻撃を避けきれずに後ずさるたび、メサイアが同じだけ間合いを詰めてくる。

「っ…」

的確に打ち込まれる刃を剣で受け止めながら、ユアンは次第に心からも体からも余裕が失われていくのを感じていた。

決闘が始まったのは小一時間ほど前になるだろうか。

実をいえばタイタスの剣を避けることに神経を使いすぎて、メサイアを相手にする頃にはすでに、ユアンの気力はかなりのところまで消耗していた。

そのうえでメサイアの変則的な攻撃を受け止めるには、先ほどよりさらに集中力が

必要だった。一撃一撃が容赦なく、ユアンの神経を削いでいく。
（こんなに軽やかに見えるのに、メサイアの剣は重い…）
　絶え間なく繰り出される刃は、まるで生き物のように自在だった。動作に移る前からすでに予測されていたかのように、切っ先が無駄のない弧を描き、ユアンの行く手を阻(はば)む。
（これが治療中の人の身のこなしとは…とても思えないよ）
　メサイアは息一つ乱していなかった。彼の主治医によれば、紅い花(ヴァ・ミキュラス)の中毒症状で弱った体はいまだ完治とはいえない状態らしい。しかし今のところ、その足さばきにも剣さばきにも病人らしき弱々しさは影も形も見えなかった。
　かつて国家転覆を企んだ巨大組織、その工作員教育施設で仕込まれた体術は、いまだメサイア・リードの中に息づいている。そ

の手練手管のわずかしか、彼はまだ見せてはいないはずだが――

昨晩ロレンスから叩き込まれたようにはうまく攻撃が避けられず、ユアンは唇を噛んだ。

『相手から距離を開けるな』というのが当代一の使い手であるロレンスからの助言だ。実際タイタスを相手にしていたときには、接近して対処するそのやりかたが上手くはまっていた。拳闘でいえば『抱きつき』に近い戦法だ。

大剣が恐ろしいのは、大きく振り回されたときの破壊力がとてつもないからで、相手の懐(ふところ)に入ってしまえばその威力をかなりの割合で削ぐことが出来る。また意図的に相手の動作範囲を狭めることで太刀筋を制限し、動きを読みやすくすることも可能だ。

ゆえにロレンスはユアンがかすり傷を負うことを前提にに試合を想定した。もちろ

んそれ以上の大怪我を負わせるような事態にはさせないという、内心の自負もあっただろう。とにかく彼は、動きやすさと不意の接触による軽傷を防げることを優先して、ユアンに軽い防具を用意したのだった。

ところがメサイアは持ち前の俊敏な動きと鋭い牽制(けんせい)で、ユアンに近寄ることを許さなかった。ちょうど切っ先が引っかかる距離から幾度も刃(やいば)を突き入れられて、ユアンの防具にはいくつもの傷が付き始めている。

（どうしたらいい…？いつまでこれを続けていればいいんだ？…いや、いつまで続けられる？）

先ほどからブーツの踵(かかと)が吹き溜まりの雪を踏んでいることに、ユアンは気付いた。いつのまにか広場の端まで追いやられていたのだ。

この決闘は、ユアンさえ『参った』と言わなければ、そのままユアン自身の勝ちと

なるはずである。腕前の差は明らかで、メサイアもタイタスもそうすることは容易(たやす)いのに、ユアンを殺すことは出来ないからだ。

それをふまえたうえで、いわば『血の代償』を払うつもりでユアンはこの場に立っていた。彼らと彼らの領民を有無を言わさず従わせる代償に、幾ばくかの傷を自らが負おうとしているのだ。

大剣を持ち出してきたタイタスは、その圧倒的な力を見せつけることでユアンを縮み上がらせ、勝負そのものから手を引かせようとした。しかし何があっても引かないと決めたユアンに脅しは効かない。

一方メサイアは、自分たちには敗北の道しか残されていないことをすでに認めていた。そして『代償を払わせる』と宣言し、ユアンの前に立ったのだったが。

（代償…、メサイアは俺のどこをどうやって奪う気でいるのだろう）

息を切らしながら、ユアンはメサイアを

見つめた。
（さっきはものすごく怒っていたような気がしていたけれど…）
　打ちかかるメサイアに押され、再び後退しながら、ユアンはふと違和感を覚えた。あのメサイアの瞳、あの色は――
「――！」
　それは一瞬だった。流れるような銀色の軌跡が飛んできて、ユアンの脇の下に突き入れられる。防具の無防備な隙間、その奥で脈打っている心臓が、どくん、と一つ、大きく揺れた。
「ユアン！」
「よけて…！」
　ロレンスとアナの声が飛ぶ。
　広場の隅（すみ）に追いつめられていたユアンは、切っ先から逃れるようにとっさに身を捻（ひね）った。雪の残る床に倒れ込むように手を付いた彼は、左腕の異変に気が付いた。
（防具が…）

体の向きを変えた時に切っ先を引っかけたのだろう。左の肘を覆っていた防具の上から中ほどまでが斜めに裂けて、腕から垂れ下がっている。

中のブラウスも少し裂けて肌が見えていたが、痛みはなく、傷は付いていないようだった。

（メサイアは…心臓を狙ったの…？）

彼はタイタスと交代して以来、擦るような距離でユアンをさんざん嬲（なぶ）ってきた。だがここまで踏み込んできたのは、この一撃が初めてだ。

（まさか…）

ユアンは目の前に立つメサイアを見上げた。太陽を背後に回したその姿は、輪郭以外が影に覆われている。彼が今どういう表情をしているのかは、ユアンにもわからなかった。

「立て、ユアン・ジュノー＝イグニス」

そう命じたメサイアの声には抑揚（よくよう）がな

く、感情を読み取ることは難しかった。
「性悪(しょうわる)、てめえ…！」
　タイタスの怒鳴り声が聞こえる。
「メサイア！」
「メサイア…！」
　幾人かの声がしたが、メサイアの影はユアンに剣を突きつけたまま、ピクリとも動かなかった。
「待って、誰も止めないで」
　ユアンは立ち上がった。ズボンに付いた泥を払うと、剣を構え直す。
「気が済むまで、終わらないからね」
　誰が、とはユアンは口に出さなかった。ここにいる者は皆わかっている。メサイア・リード、彼が『参った』というまではこの決闘は終わらない。
「必ずこれを決闘として公式な歴史に残すんだ。そのためには最後まで続けて成立させなければならない。だからみんな止めないで。止めたらもう一度やり直すだけだか

ら」
「では、続行ということでよいのですな」
　イスカリオットの問いに、ユアンは頷いた。
　メサイアから目を離すわけにはいかないので、今はあまり周りの状況は見えない。それでも皆の心配は手に取るようにわかった。
　誰しもが、いますぐこの決闘を終わらせたいと思っている。ユアンの騎士であるロレンスも、その気持ちを抑えるために今頃己の手を強く握りしめていることだろう。
「続けなさい、ユアン」
　突然、広場の向こうから静かな声がした。
「決めた以上は、最後までやりとげるのです」
　意外な言葉にユアンは驚いた。
（ザン…？）
　普段は穏やかで、荒事をよしとしない彼が、まさか決闘を続けるように勧めるとは。

（だけどあのザンが、そうせよと言ってくれるなら…）
　背中を力強く押されたような気がして、ユアンは改めて、構えた剣をメサイアに向けた。
「いいよ、メサイア。さあ、続けよう」
　言い終わるか、終わらないかのうちに、再び流星のような刃（やいば）がユアンを襲った。

◆

　――それからのことは、よく覚えていない。
　ユアンに傷を負わせるように深く繰り出される切っ先。すんでのところでそれを受け止め、避け、交わし続けるうちに、ユアンにはメサイアの姿すら目にする余裕がなくなっていった。
　あたりを覆う緊張と、鎧や衣服を紙一重で切り裂いていく凶器に心が押しつぶされ

そうになる。足は泥のように動かず、荒く上がる息の中、ユアンの頭の中は雪のような白に塗りつぶされて、すべての思考が停止していった。
（早く逃れたい――この重圧から）
　声に出せない叫びを抱えたまま、身も心も次第にバラバラになっていくのを感じ――
　気が付いたときにはユアンは一人、広場の床に広がる血を見おろしていた。
「これ…は…？」
　自分は今、いったい何をしていたのか…？
　しばらくの間、ユアンの目に見えるものは色だけだった。
――紅、赤、あか。
　ゆっくりと意識が戻り、少しずつ視野が蘇ってくる。赤い血溜まりの脇にメサイアがうずくまっているのが見えた。なにが起こったのかわからず、ユアンはただ驚愕し、

目を見開いた。
「メ…メサ…」
　我(われ)を取り戻したとたんに、周囲の音が耳に飛び込んでくる。
「メサイア！」
「…性悪(しょうわる)！」
　それを自分がやったのだとようやく気が付いて、ユアンの背に最初の震えが走った。
　寒気が全身を貫き、体の隅々まで到達する。ぎこちなく開いた指が剣を取り落とし、息を吐く唇が震えた。
――わけがわからなくなるまで追いつめられた。
　血を流すことが自分の役目なのだとわかっていながら、心臓や急所を狙う剣に恐怖を覚え、がむしゃらに逃げ惑い――そしてユアンはなにかに駆り立てられるようにして、ついに己の刃をふるってしまったのだ。
「俺…まさか…」
　ごめん、と言いながらユアンは力を失う

ように膝から床に崩れ落ちた。俯(うつむ)いて膝を付いているメサイアの前に自らも座り込む。
背後でイスカリオットが鋭くなにかを叫んでいたが、よくは聞き取れなかった。入るな、とか待て、とか、なにかそう言う意味の言葉のようだ。
「メサイア、俺はもう無理…俺は、…」
もう戦えない、と言いかけた時だった。目の前の影が、白い面(おもて)を上げて、ユアンのほうへと手を差し出した。
血で濡れた指が、ユアンの唇を押さえる。
「それ以上は口に出してはいけません、ユアン」
青ざめた頬にメサイアは笑みを浮かべた。
「敗北の言葉は僕の台詞なのですから」
「メサ…イア」
「よく見て下さい、傷は浅い」
「だけど…俺は…」

@aikawayou

　言ったでしょう、とメサイアはまた微笑んだ。紫水晶の眼に午後の光が差し込んで、やけに透き通って見える。
「君に必ず代償を支払わせると」
　そういうとメサイア・リードは立ち上がり、怪我をしていない方の手を高く差し上げ、
「参りました」
　と高らかに宣言した。

「だから言ったのだ！私が必要になると！」
　あっけにとられる大人たちを尻目に、広場に飛び出していったのはベレンガリアだった。オーガストが抱えていた弁当のバスケットをひったくると、その底から油紙に覆われた小さな包みを取り出す。
「そこを動くでないぞアマデウス・フロックハート！いますぐ我が一族秘伝の傷薬を処方してやるのでな」
「紅百合草が入っているでしょう、それ」

メサイアは少し嫌そうな表情になったが、黙って少女の治療を受け入れた。
彼の上着、右上腕部分は大きく裂けて垂れ下がり、中のブラウスが真っ赤に濡れている。指まで伝った血が地面に落ちていたが、今はその手を脇に座ったアデルが掴んで支えていた。
「まったく君は、怪我ばかりして」
「その叱咤も懐かしいですね、今となっては」
相変わらず生徒のように扱うアデルに、メサイアは苦笑いした。
「アマデウス、さっき君の護衛が猛烈な勢いで主治医を呼びに行ったのだが」
イスカリオットが庭園の向こう側を指した。
「無駄足になると教えてやった方がよくはないか」
「好きにさせてやって下さい。ディシトリアスがやって来る頃には治療は終わってい

るでしょうが」
　そう答えながら、メサイアは少し顔を顰(しか)めた。消毒を終えたベレンガリアが、傷に直接軟膏を塗り始めたからだ。
「まさかベレンガリア、その薬が必要になると知っていたのか」
　キツネにつままれたような顔で、ギデオンが呟いた。メサイアの傷を覗き込み、やれやれと頭を振っている。
「私ではない。ザンが言ったのだ。決闘で誰かが血を流すかもしれないと」
「そしてそれはユアンではないと知っていたのね」
　とユアンからズタズタになった防具を外しながら、アナが頷いた。
「だから決闘をやめさせなかった…と」
「かといって、メサイアやタイタスが血を流すことを望んでいたわけではないですからね」
　ザンが抗議した。

「ただ…その時まで立ちこめていた暗雲が、晴れると感じたのです。ユアンがどうしても決闘をするのだと、私に決意を述べたときに」
「知ってるなら言っといてくれよ！こっちがどんだけハラハラしたか！」
　叫ぶオーガストに、ザンはただ困った顔をして見せた。
「そこまで明確なものではないのだ。予言の力というものは」
　メサイアの傷に手際よく布を巻き付けながら、ザンの代わりにベレンガリアが答える。
「一応ロレンスには事前に伝えておきましたよ」
　ザンが言うと、だからか、とオーガストが頷いた。
「決闘の間中、よく我慢したなとは思っていたんだ。ザンから悪いようにはならないと聞いていたんだな」

それでも死にそうな顔になってたが、とオーガストは幼馴染みの姿を見やった。ロレンスは今アナ・ベルとともにユアンの脇に膝を付き、主君の体に怪我がないか確かめている最中だった。
「ほんと…大丈夫。疲れてるけど、痛いところはないよ…」
小さな声でユアンがそう言うと、騎士の顔が少しほっとしたように緩んだ。
あたりの空気が急に和(なご)やかになる中、ユアン自身は現実に立ち帰ることができずに、まだどこかぼうっとしていた。自分の剣がメサイアを傷付けたことに対して、心の整理が付かないでいたのだ。
「メサイア…本当に大丈夫…なんだね？」
ユアンがメサイアを見ると、彼は少し気まずそうに目を伏せた。
「ユアンはもう気にすんな。いじめすぎだろ、性悪が！」
アデルの作ったパイに食らいつきながら

タイタスが言った。
「どういう…こと？」
「お前はメサイアに復讐されたんだよ、ユアン」
　オーガストがおお怖（こわ）、と呻（うめ）きながら首を竦（すく）めた。
「風が出てきたな。陽が落ちる前に城へ帰ろうぜ。暖かい部屋の中で説明してやるよ。メサイアとタイタスから聞かなきゃならないこともあるし、お前の企（たくら）みについても話してもらわなきゃ」
　ユアンは頷いた。
　ようやく終わったのだと、実感が湧いてくる。
　決闘は成立し、ユアンは勝った。それがもたらす意味を、皆に包み隠さず話す必要がある。
　ユアンがこれからすることを、全て知っていてもらわねばならない。――とくにメサイアとタイタス、二人の七侯には。

◆

その日の夕方はあれこれを皆で語り合う気満々だったのに、ユアンが起き上がったときにはもう夜も深まっていた。

あれからユアンは皆に支えられながら城へ戻り、まずはメサイアが無理矢理救護室に連れて行かれるのを見送った。その直前に傷の様子を看(み)た彼の主治医、ディシトリアスの表情は気ぜわしげではあったが、落ち着いていた。

すでにイスカの地で顔見知りとなっていたその医師が幾分青ざめながらも微笑んでみせたことで、ようやくユアンは少し休みを取ろうという心地になったのだった。

自室へ戻り、たっぷりとした湯に浸(つ)からせてもらって、アデル手製の熱いスープを口にして、そこからあとはもう記憶が無い。

「いたた…」

大きなベッドの上に起き上がり、ユアンは呻(うめ)き声を上げた。腕と太腿あたりを中心に、全身の筋肉が悲鳴を上げている。
（やっぱり向いてないのかなあ、剣…）
寝室は暖炉の炎で暖まっていて、少し暑いぐらいだった。ユアンが体を冷やさないようにと、誰かが部屋の係に言っておいてくれたのだろう。
（厨房に行ってお湯を沸かせないかな…ゆっくりお茶が飲みたいや）
薄い寝間着にガウンを羽織って、ユアンは素足を柔らかいスリッパに突っ込んだ。
「おいで」
ベッドの脇にある大きな籠に近付くと、ユアンは舌を鳴らした。小さくさえずるような鳴き声がして、藁(わら)で作られた巣の中から二十日鼠が頭を出す。手を差し出すと鼠はそれに飛び移り、温かい手のひらの上でまた鳴いた。
「昨日から放っておいてごめんね、リィプ。

厨房にいっしょに行こうか？」
　巣から出てきて寒かったのだろうか。肩まで駆け上ったリィプはユアンの言葉に応えなかった。さっさと首元からユアンの寝間着に潜り込む。
「起こして悪かったって。リィプだって好きなくせに、厨房」
　飼い鼠の無愛想にブツブツ言いながらユアンが寝室から居間に通じる扉を開けると、そこには長身が立ち塞がっていた。驚くようにして振り返り、目を丸くする。
「ユアン…！」
「ごめん、驚かせた？ロレンス…ていうか、なんでここにいるの」
「ユアンが眠りに就くまではいたんだが。さっきまたアナと交代したばかりだ」
「そうじゃなくて護衛なら他に頼める人がいるだろ…。っていうか俺、護衛とかいいから皆にちゃんと寝てもらいたいよ。ロレンスも疲れているだろうに」

「もう充分に休ませてもらった」
　見ればロレンスは普段より軽装だった。一度は休みを取ったというのは本当らしく、険しかった表情にも明るさがもどっている。
「…ずいぶん心配かけちゃったね」
　居間を抜け、暗い廊下に出る。並んで歩きながらユアンが謝ると、ロレンスは逡巡（しゅんじゅん）するようにこちらを見つめ、それからようやく口を開いた。
「今回ほど…己の弱さを実感したことはない」
「いやいやロレンスは強いよ？帝国で一番だよ」
　慌ててユアンが言うと、彼は首を振った。「事前にザンから悪いようにはならないと、聞かされていた。…それにも関わらず、俺は…危ういところで幾度もあの決闘を…ユアンが二人のために立てた計画を、すべて台無しにするところだった」

「それは…俺が心配をかけたからいけないんであって！ロレンスはよくがんばってくれたよ」
　なぜロレンスを励ますはめになっているのかよくわからないまま、ユアンは声をかけた。とにかく自分のしでかしたことのせいで、友人を落ち込ませたくはない。
「あの時――決闘の最中にメサイアがユアンに代償を支払わせると宣言したとき、彼は俺を真っ直ぐに見た。それで俺には彼がユアンを傷付けるつもりがないことを確信したんだ」
　ロレンスは遠くを見るように答えた。その時のメサイアの瞳を思い出しているのかもしれない。
「彼が俺の目を見なかったら、俺はすぐにでも広場に飛び出して、あの決闘をめちゃくちゃにしてしまっていたかもしれない」
「…たまにはめちゃくちゃにしてもいいんだぜ？」

階下に降りたところでそう声がしたので、ユアンとロレンスは同時に目を丸くして、薄暗がりにいる人物を見つめた。その様子がおかしかったのか、クスクスと笑いを漏らしながら彼はまた言った。
「お前ならあのクソ生意気で負けず嫌いなメサイア君にお仕置きができるんじゃないの、ロレンス」
「オーガスト！」
「疲れは取れたかユアン？こっちも少し休ませてもらったよ」
オーガストも厨房へ向かう最中だったらしい。ユアンと同じように寝間着にガウンを引っかけた姿だ。アデルの作った夜食が厨房に残っているはずだと彼は言った。
「ロレンスはさ、メサイアに感謝してるふうだけど、奴はユアンに復讐したんだよ」
「復讐って、さっきもそんなこと言ってたよね」
オーガストの言葉に、ユアンは首を傾(かし)げ

た。
「お仕置きされなきゃいけないのは俺の方だから、復讐…？されて当然だし、それに怪我をさせたのは俺の方だ…」
「それが奴の思惑だったって言ってんの」
欠伸(あくび)をしながらオーガストは答えた。
「ユアンに手を出させることが、奴の狙いだったんだよ」
「俺に手を出させる…」
あの時ユアンは追いつめられていた。怒りを孕(はら)んだ宣言から始まった、メサイアの激しい攻撃に耐えかねて反撃し、とうとう彼の右腕を傷付けたのだ。
「奴はユアンを疲れさせ、考える余裕を奪っていった。わざとすれすれの攻撃をすることで恐怖させ、ユアンの理性を封じ込めたんだ」
「それで俺は反射的にメサイアに剣を向けてしまった…？」
「自分を護るために反撃に出たということ

だな」
　ロレンスが頷いた。
「ユアンにも生物としての防衛本能が備わっていた…」
「そりゃ俺にだって本能ぐらいあるよロレンス！だけどそれをメサイアが利用しただなんて…」
「考えても見ろよ、いくら反射的に出した攻撃とはいえ、メサイアにお前の剣が避けられないわけないだろう」
　オーガストがため息をつく。
「そう言われるとそうかもね…じゃあメサイアは俺に自分を傷付けさせたんだ…」
　自分の未熟な腕前が一種のアリバイになっていることに、今さらながらに複雑な気持ちになりながらユアンは呟いた。考えてみれば決闘の間中、その苛烈な刃（やいば）とは裏腹に、メサイアの瞳（め）はあまりにも冷静だった。ユアン自身がそれに違和感を持ったほどだ。

「ああ見えて、メサイアもかなりの集中力を使ったことだろう」
　ロレンスが言った。
「あれだけの手数を繰り出しておきながら、ユアンにはかすり傷ひとつついてはいなかった」
「だからぁ、お前はなに感心してんだよ…ん？明るいな、誰かいるのか」
　厨房の入り口にある観音扉は膝から胸ほどまでの高さしかないが、その上下から光が漏れて周囲の廊下まで明るくなっている。ユアンたちが扉を押して入っていくと、中ではギデオンとジェドがなにかの話で盛り上がりながら、夜食を楽しんでいる最中だった。
「ジェド、帰ってたんだね」
　ユアンが幼馴染みに駆け寄ると、ジェド・ベルは笑みを見せた。
　ユアンは事前に、決闘のあらましを各領に知らせて回る手配のいっさいを彼に託し

てあった。だからジェドは決闘が終わると同時に『決闘は皇帝陛下に軍配！』の知らせを伝えるため、広場から走り去ったのだった。行き先は城の北側にある騎士団の詰め所だ。

決闘が始まる前から、詰め所には伝令が待機していた。彼らは皇城から出立し、決闘の続報を各領にもたらすために次の中継地点へ向かう手筈になっている。ここにジェドがいるということは、その手続きの全てが終わったことを意味していた。

「問題はなかったか」

とロレンスが問うと、新米騎士は、

「滞(とどこお)りなく」

とはきはき答えた。

「ユアンが休んでいると聞いたんで、ついでに宿舎でひと寝入りしてきましたよ」

「有能な部下をお持ちだな、騎士団長殿は」

赤ワインと燻製(くんせい)肉を挟んだパンをそれぞれ両手に持って、からかうように言ったギ

デオンに、ロレンスは律儀に頷いてみせた。
　深夜だというのに年長のソレム侯の髭(ひげ)は綺麗に整っていた。髪からローブの肩に雫(しずく)がときおり落ちていたから、（たぶんお風呂を使ったばかりなんだろうな）とユアンは考えた。
「メサイアのあのやり口について、ひとしきり盛り上がっていたところでな」
「宰相殿は恐ろしいお方です」
　とジェドもうんうんと頷いた。
「まさかユアンをあそこまでいじめ抜くとは思いませんでしたよ。相当腹に据えかねていたんでしょうね」
「やっぱり怒っていたよね、メサイア…」
　ジェドから回ってきた皿を、ユアンはオーガストに渡した。胡桃の乗った蜂蜜掛けのペイストリーを頬張って、棚から人数分のカップを取り出す。その間もロレンスが炉を覗いて薪が燃えているのを確認し、湯を沸かす準備をしてくれている。

「それでなんでメサイアが俺に自分を斬らせたのかが、まだわかっていないんだけど…」
　ユアンがそう言うと、ギデオンが首を振った。
「いや、お前はもうそれを身を以(もっ)て知っただろう、ユアン」
「どういうこと？」
「自分が傷付くより、痛かったってことを」
　そう言われて、ユアンは息を呑んだ。手に持ったスプーンから、少し茶葉が落ちる。
「そんな…じゃあ、メサイアは…」
「お前に『犠牲』を払わせたんだよ。自分より痛い――大切な人の身を切らせるという」
　ギデオンはやりきれないとでもいうように、グラスに注がれた液体の表面を見つめ、そしてそれを飲み干した。
「ユアンにわかって欲しかったんだろう。自分やタイタスにユアンを斬らせるという

ことが、どんなに残酷なことか」
　ユアンは項垂れ、ポットに添えた自分の手を見つめた。
――この手でメサイアを傷付けてしまった。そんなことは…もう二度としたくない。
「けどあいつほんと性悪だよな。ユアンを痛い目に遭わせてやるって宣言して、本当に痛い目に遭わせちまったし」
　呆然としているユアンから、そっとオーガストはポットを受け取った。代わりに陶器の壺にスプーンを入れて、ポットの中に茶葉を移していく。
「知っているんだな。メサイアはユアンがどれだけ自分を想っているかを」
　次にポットを受け取ったギデオンが、やかんの細い注ぎ口から沸騰したての湯を注ぐと、あたりには甘く芳醇な香りが漂った。
「俺…失いたくなかったんだよ、タイタスのことも、メサイアのことも」
　ジェドが背中をどやしつけると、その勢

いで涙がこぼれ そうになり、ユアンは唇を噛みしめた。ここで涙など見せたら、自分を哀れんでいるようで嫌だったのだ。

耐えていたらロレンスが慌てて温かいカップを握らせてきたので、ユアンは一粒だけそれをこぼした。香りのいい湯気の中に、少ししょっぱいそれが一滴、落ちていった。

◆

あてがわれた客室に皇城からの親書が届くやいなや、ハンニバル・モーガンは立ち上がった。

雪深いイスカ＝リンナム領。その中央に建つイスカ城もまた、黒く荘厳な姿を雪に半ば隠している。

ハンニバルは部下を伴(ともな)って、急ぎ足で城の中央会議室へ向かった。以前そこにはイスカ中央軍の将校たちが出入りしていたが、今ではイスカ領主アマデウス・フロック

HARUNO ATORI | HALYOU ©@kawayou

ハートを護る親衛隊の、仮の詰め所として使われている。

薄暗い会議室には巨大な暖炉が設置されていたが、火は全て消えていた。天井の高い位置にある切り込みのような細長い窓から、唯一午後の太陽が入り込んでいる。

白い息を吐きながら扉を勢いよく開けたハンニバルを、黒ずくめの軍服をまとった人物が振り返った。女性にしては高い身長、藁色の髪をひっつめており、その頬には目立つ傷跡が走っている。

イスカ＝リンナム領主の親衛隊長、センプロニア・ブランデル――領主の自らの手でいきなり重職に抜擢された経緯もあり、イスカ領でいまや彼女の名を知らない者はいなかった。

「決闘の続報ですか」

柔らかい声が響いた。

「陛下の勝利に終わったようです」

「それは予想通りということでしょうかね。普通に立ち会えば、殿下が負けるわけはないと思いますが。同時に立ち会った貴殿の主(あるじ)、タイタス・ラムにしてもそうです」
　一息にそう述べると、女はまた押し黙った。
（何を考えているのかわからん女だな）
　ハンニバルは胸元から、ユアンから直接預かっていた書を取り出した。
「陛下がいったいなにを賭けて闘われたのか、少佐殿はご存知でしょうか」
「二人の領主の関心…いえ、失礼、――身柄をご自分に取り戻すためでは？」
　皮肉が込められた言葉を、センプロニアは無表情で述べた。
「そうではありません」
　ハンニバルはユアン・ジュノー＝イグニスの紋が飾られたその書を、彼女に手渡した。
「これは勅令…ですか」

「皇帝陛下は、囚人の身柄を賭けて、決闘を申し込まれたのです。公式にはね」
　勅令書を開いた親衛隊長の、深い翠(みどり)の目が大きく開かれた。
「先のクーデターで捕らわれたテロリストの身柄を、すべて引き渡せと…？」
「そういうわけで、頂いていきます」
　ハンニバルが合図を寄越すと、同行してきた部下が背後から消えた。城の中庭にいる傭兵部隊に号令を下すためである。部隊は彼がモーガン家にいた頃より率いてきた腕利きの護衛たちだ。
「待たれよ、我が主(あるじ)の留守にそれは、承知いたしかねる…」
「勅令なのですよ。それも神聖な決闘の末に決められた選択だ。貴女の主(あるじ)、アマデウス・フロックハートが決闘に負けた以上は申し開きの是非もないはず。そしてそれは我がルーメン領も同じです」
　会議室を後にしようと身を翻(ひるがえ)したハン

ニバルの背に、センプロニアの声が追いすがった。
「貴殿は…悔しくはないのですか！」
「何がです」
「我々の主(あるじ)があのユアン・ジュノー＝イグニスに負けることなど、普通ならありはしないはずです。あの少年は殿下の忠誠を盾に、お遊びの決闘で我が領(くに)に恥をかかせた…」
「たしかにあの坊やは剣の腕はからっきしです」
　ハンニバルは答えた。そんなことはわかりきっている。決闘は茶番以外の何ものでもない。
「我が領(くに)には我が領(くに)の想いがあり、アマデウス様は彼らを処刑せずにまともな教育施設へ送ることを望んでおられました」
　無表情だったセンプロニアの瞳に強い光が宿っている。握りしめた黒い革手袋から、軋(きし)むような音が響き、悔しさが全身からに

じみ出ていた。
「貴殿の領では彼らの処刑を望んでおられましたね。それも領民たちに被害を出したルーメン領の悲願だったはずです。それを――茶番の決闘ごっこで陛下が攫(さら)ってしまわれる…？」
　それでいいのですか！ルーメンの方々は！
　センプロニアの悲痛な叫びに、ハンニバルは笑みを浮かべた。
「まさにそれが陛下の狙いだったのですよ、少佐殿」
「いったいなにを…」
「逆らえない二人の領主を跪(ひざまず)かせ、自分のいいように獲物を横取りした――世間的にはそう見えるでしょう。ユアン・ジュノー＝イグニスはだからこそ、この決闘を公(おおやけ)にしたのです」
「どういう…ことですか」
「これでアマデウス、タイタス、二人の領

主のどちらもが争いを激化させることなく、相手に譲ることもなく、揉め事が消え失せた。しかも名誉は守られたまま…です。“我が領主は皇帝に配慮して負けざるを得なかった”どの領民もそう思うでしょうからね」

そう言い放つと、ハンニバルは今度こそ会議室を後にした。

ユアンは全ての泥を被(こうむ)ったのだ。イスカ人もルーメン人も、憎むなら自分を憎めばいいと。

公(おおやけ)にはクーデター事件主犯の子供たちは、皇城の永久牢に落とされると発表されることになる。彼らはそこで一度死んだことになり、新しい名をもらうはずだ。そして別人として更正施設に送られる。

そこではまともな教育が行われるだろう。なにせ、ユアンが彼らを送りたいと思っているのは、メサイア自らが隣領(りんごく)オクト＝ノクテに建設を計画している教育施設な

のだ。
（まったく、あの坊やに道化を演じきる度胸まであったとはね）
たしかに今回のことで、帝国でのユアンの評判は少し落ちるだろう。だが皇帝と七侯の絆は揺らがない。
ハンニバルはイスカ城のだだっ広いホールを横切り、侍従たちの開いた扉から前庭へ出た。
空気の冷え切った城の外へ出ると、馬車止めのあたりは綺麗に雪かきがなされていた。いろいろあったイスカ城だが、現在は領主のいない間も機能的に保たれている。
（ここも徐々に良くなっていくのだろうな。あの宰相殿が全力で働いたおかげで、イスカはまともに機能しつつある。皇帝領へ続く坑道が開放されれば、より暮らしは楽になるだろう。それを知っているのか、人々の顔も以前より明るい）
止められた馬車に素早く乗り込みなが

ら、ハンニバルは考えた。傭兵部隊に囚人の身柄を押さえさせ、自らはこれから後続の騎士団と落ち合うことになっている。囚人たちの護送は皇城の騎士団の手で行われるのだ。
（まだまだ至らないとはいえ、自分たちの領（くに）は以前より改善されつつある…だからこそ彼らは『より苦しむ人々』に目を向けざるをえなかった…）
　そうして密約は交わされた。犬猿の仲であるはずのタイタスとメサイアの間になにがあったのか。
　今頃はあのユアン・ジュノー＝イグニスも耳にしているに違いないと、彼は思った。

《エピローグに続く》

千年迷宮の七王子SS
残雪のステイルメイト
EP

Epilog

一通の手紙を手にオーガスト・モーガンが現れたのは、ちょうどユアンが執務室を去ろうとした頃合いだった。

並んで廊下を歩きながら、二人は頭を寄せ合ってそれを読んだ。

「彼にもずいぶん心配かけちゃったみたいだね」

「なんにせよ決闘でごたごたする前に帰ってよかったよ、あいつ。皇城にいたらおちおち就任式の準備もしていられなかっただろ」

手紙はオウラード領にいるフェイ・アクロイドからのものだった。

ハンニバル・モーガンがこのたびの相談を持ち込むために皇城に現れたときには、フェイはユアンの隣にいた。しかしその直後にオウラードに呼び出され、いったん故

郷に戻らざるをえなかったのだ。今頃はオウラード城で七侯就任の準備に大わらわのはずだ。

就任式の段取りを仕切るために現在フェイに付き添っているのは、つい二年前まで七侯を務めていたアドニス・リーガンである。彼にとっては実の甥であるせいだろうか、フェイに対する指導はつい厳しくなりがちのようだ。

フェイの元にユアンたちの決闘の知らせが届いたのは、まさに伯父から領主としての心構えを叩き込まれている最中のことだった。様子を詳しく知りたくとも皇城へとって返すわけにもいかず、一人でずいぶんやきもきしていたようだ。文面には彼自身の近況とともに、ユアンへの気遣いが、真摯(しんし)な言葉で綴(つづ)られていた。

「しかしいちいち兄貴のロレンスと比べられたんじゃたまんないよなフェイも」

そう言いながら、オーガストは背後を振

り返り、あれ？という顔になった。
「今日はいないのか、その兄貴は」
「ロレンスは騎士団の詰め所で最後の打ち合わせだよ。明日からいよいよオウラードへ出発だからね！」
　ユアンが背後を見ると、護衛を勤めている青鹿騎士団の騎士たちが会釈した。少し頭を下げ挨拶すると、ユアンは再びフェイの手紙に目を落とした。
「会ったらフェイにも全部話さないとね。頼みたいこともあるし」
　いったい自分たちになにがあったのか。
　決闘のあと、メサイアたちから聞かされた真実もすべて。
　六番目に七侯に加わる彼にも、包み隠さず――
「だって俺たちはやっぱり、お互いに隠し事をしないで進んでいくべきだと思うから…」

◆

「タイタスから呼び出しを受けたのは、休暇の最後の日でした」

と、メサイアは言った。

――年越しの休暇は皆で過ごしたい。そう言いながらもユアン自身も、それが叶うとはたしかに思っていなかった。秋にも大事件が起こったばかりで、おおっぴらに皇城に戻ってこいとは言いづらい状況にあったのだ。

奇跡的に全員が揃っての年越しは、賑やかなものになった。去年にはいなかったジェドやアナ、アデルとフェイ、タイタスに同行してきたハンニバルまで加わって、部屋の数が足りないほどだった。

年越しは七侯や仲間たちにとっては特別なお祭りである。休暇というだけで楽しいのに、大晦日はロレンスの、新年の第一日目はタイタスの誕生日がちょうど重なって

いるからだ。
　ごちそうを作って、食べて、飲んで、庭の雪で遊んで、ときには頭を寄せ合って雑談し、静かにザンのピアノに耳を傾け、また夜中まで騒いで過ごす。彼らが普段の政務から解き放たれて、年相応の若者に戻れる期間が年越しの休暇なのだった。
　その楽しい休日が終わる寸前に、タイタスはメサイアをとある場所に呼び出したのだという。
「暗号は前庭に積もった雪の上にありました。以前、千年迷宮城が沈んだ直後に僕がタイタスを呼び出したのと同じ、あの暗号です」
　タイタスの率いるラム団は身寄りのない子供たちだけで作られた盗賊グループだった。彼らのほとんどはまともに読み書きができず、文字の代わりにお互いへの合図に使っていたのがその暗号だ。
　メサイアは探偵時代にその暗号を読み解

き、自らが使えるほど精通していた。だからこそ、お互いが他の者に知られずに合図を送るにはもってこいだったのだ。
「暗号を発見した時、彼はもうあのマナーハウスから出立していて、僕も領(くに)へ戻るために馬車の支度を待っていたところでした。小枝で作られたそれを見て、僕にはすぐに彼になにか起こったのだなと思いました」
「千年迷宮城事件のときには、そうやってお前たちはキリロス湖畔の廃屋で落ち合ったのだったな」
　ギデオンが言ったので、メサイアは頷いた。
「今回彼が指定したのもその廃屋です。キリロス湖の南西に今も建っていますが、僕は馬車をそちらに向かわせました。そして馬車を降りて廃屋へ向かう途中、林の中で待機しているハンニバル・モーガンを見かけました。つまりは小屋の中にいるのは、

おそらくタイタス・ラム一人。そういうわけで僕は彼の話がますます深刻な内容であるとわかったのです。そうでなければ僕と二人きりで会いたいなどとは思わないはずですから」

話の間中、タイタス本人は窓枠に腰を下ろしていて、皆の方を見ようとはしなかった。メサイアの方も皆の座っているソファには近寄らず、ゆっくりと部屋の中を行ったり来たりしている。

居間のテーブルの上には、アデルの淹(い)れたお茶が用意してあったが、まだ誰もそれには手をつけていなかった。そこにいる全員が、メサイアの告白にただ聞き入っている。

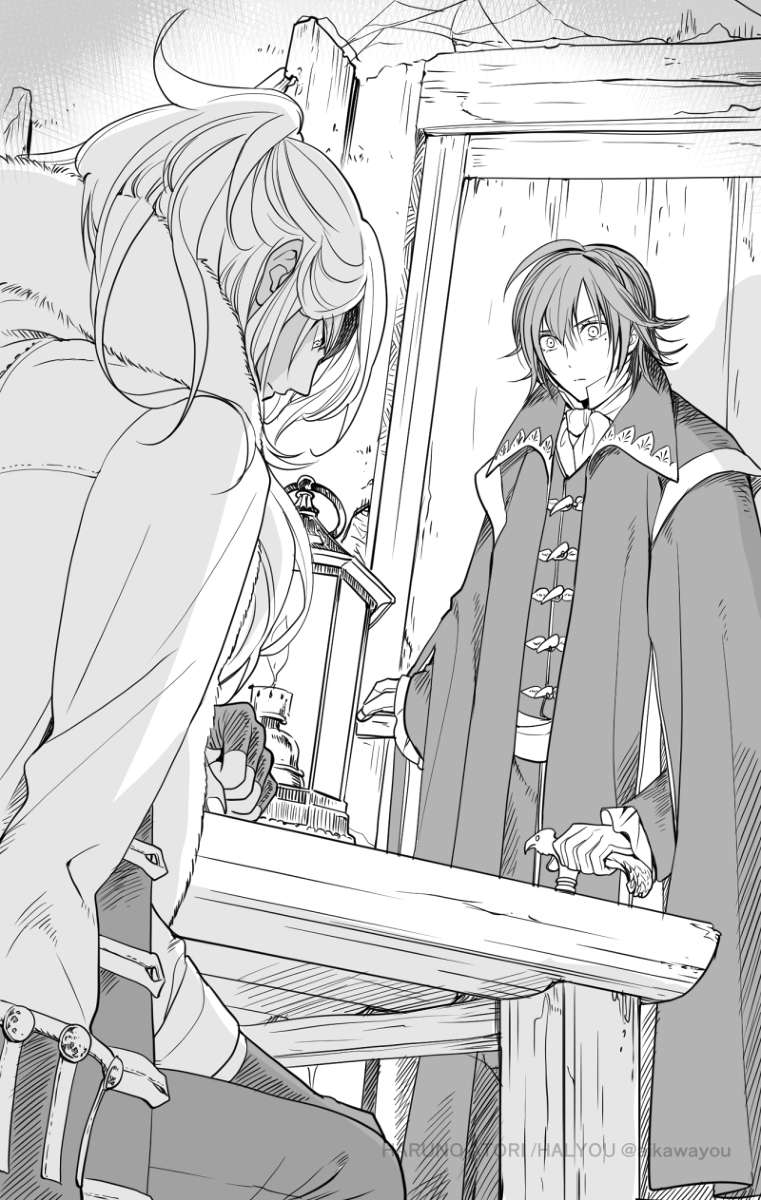
「中に入ると、タイタスがいきなり『助けて欲しい』と言ったので、僕は驚きました。彼からそんな言葉を聞いたのは初めてのことだったので」

ユアンは驚き、タイタスを振り返った。

タイタスはまだ窓の外を見つめていた。彼としては、まだ二人の密約を公にすることに抵抗があるのだろう。
「それを聞くまでは、てっきり彼の話とはクーデター事件の主犯らの身柄に関しての相談かと思っていたのです。ちょうどその件で、僕たちの意見は食い違っており、当分は決着が付けられないと思っていたもので」
　メサイアはいったん言葉を切り、杖につけられた宝石の柄を握りしめた。ユアンは彼もまた、タイタスの方を一度も見ていないことに気が付いたのだった。

◆

「助けて欲しい」
　振り返ったタイタスの目は真剣で、メサイアにはそれが冗談でないことがすぐにわかった。驚きのあまり、扉を閉めた姿勢の


HARUNO TORI/HALYOU @kakawayou

まま、呆然と立ち尽くす。
「――」
　返答しようと相手に向かって差しだした手を持て余したまま、メサイアはしばらく声を失った。
　茫然自失になったライバルの、普段の姿からは考えられないようなうろたえた様子。それを目の当たりにしても、タイタスは彼をからかったりはしなかった。
　ひと言放ったきりメサイアから目を逸(そ)らすと、タイタス・ラムは埃(ほこり)の積もったテーブルに視線を落とし、俯(うつむ)いた。
　時刻はもう夕方を過ぎる頃で、廃屋の中は暗かった。たったひとつ、古いランプが灯(とも)っているきりだ。その弱々しい光に照らされた限りでは、廃屋の中は二年前と寸分も変わっていないようだった。
　部屋の隅には、棚が抜け落ち、使い物にならなくなった食器棚が置かれている。もともとは湖で漁をしながら暮らす者の家だ

ったのだろうか。漁に使う網がぶ厚い埃を被って、まるでなにかの生き物のように床にとぐろを巻いていた。木製の窓が風に軋(きし)んでいるのも、以前ここで落ち合ったあの時のままだ。二人が初めてここにやって来たのは、千年迷宮城を脱出した直後に、ユアンを救い出す算段をするためだった。

思えばあの時が、この盗賊と初めて二人きりで何かを成し遂げた瞬間だったと、メサイアは考えた。長い間監視対象として眺めていただけの相手と行動を共にすることとなったのは、運命のいたずらとしかその時は思えなかったのだが。その後もまさか同じ七侯として、長い付き合いになっていくことになるとは――

「…ともかく。助けてくれ、とだけじゃわからないだろう。順番を追って話してくれ。なぜユアンたちに隠さなければならないのかも」

メサイアは部屋の中央に歩み寄り、壊れ

た椅子を避けてテーブルの傍(かたわら)に立った。向かい側で俯(うつむ)いているタイタスの顔には長い髪が落ち、半ば影に隠れている。だがランプの炎を見つめる彼の目は、強く金色に輝いていた。

（少なくとも憔悴しきった様子ではない。…これは…怒っているのか？）

　しばらく様子を伺っていたが、それでもタイタスが黙り込んでいるので、メサイアは自ら口火を切った。

「お前が今、僕と話したいことはひとつなのではないか。クーデター事件の主犯たちの処遇について」

「そのこともあったな」

　若きルーメン侯は呟いた。

「忘れてたわけじゃねえ。ただ…そいつはいずれユアンたちに相談しようと思ってたんだ。俺らだけで言い争っても平行線のまま、収集が付かねえ話だしな」

　メサイアは頷いた。彼の言うとおりだ。

去年の秋に、彼とまるで学生同士のように酒を飲み交わし、旅の仲間のように枕を分け合って眠ったことをメサイアは思い出した。――とはいえ二人が飲み明かしたのはめったにお目にかかれないような上物の酒だったし、揃って眠りに就いたのは、古めかしいイスカ城の豪華な寝台の上だったのだが。

そこでタイタスはたしかに言ったのだ。『全員揃ってようやく乗り越えられる、それが自分たちなのだ』と。

その後、『囚人である子供たちの再教育に取り組みたい』とメサイアが決めたときに、処刑を求めているルーメン領とぶつかることはもちろん予想が付いていた。

だがタイタスが『皆で乗り越える』ことを選ぶ以上は、どこかに解決の糸口があると希望が持てた。難しい問題であることは確かだが、それゆえにそこまで深刻には受け止めていなかったのだ。ましてタイタス、

ひいてはルーメン領との仲がこじれるなどということは考えてもいなかった。
　しかし、タイタスがそれ以上に深刻な問題を抱えているとするなら――
「もしや…大陸からなにか知らせが来たのか？」
　そう訊ねるとタイタスが顔を上げ、驚いた顔でメサイアを見た。
「なんでわかんだよ？」
　そう言うと黙り込み、彼は再びテーブルの上を見つめた。先ほどの怒りがどこかへ消えてしまい、今度はなにかを後悔しているような表情だ。
「勢いで呼びつけちまったが、実をいうと…これはお前に相談していい話なのか迷ってた」
「なにを今さら」
　メサイアは唇を歪(ゆが)めた。この先はまずい話になるとわかっているのに、不思議なことに腹の底から微(かす)かに高揚感が沸き上がっ

てくる。
「大陸の話なら僕も無関係ではないだろう。そもそもお前の教育係に、アディール人のハンニバル・モーガンを推挙したのはこの僕なのだよ」
「あ？」
　とタイタスが片方だけ見える眉を吊り上げた。今その話をされるとは思ってもみなかったのだろう。
「いずれ必要になるのだから、ハンニバルから大陸の公用語――母国語をお前も学んでおいたほうがよいと考えたのだ。イスカリオット・ムーアもそれで納得していた」
　ハンニバルを宮内相の情報部に欲しがっていたのはイスカリオットだ。その願いが叶わずにルーメン侯の教育係にハンニバルを付けるなら、ついでに歴史や地理、他のことも学ばせようとあの堅物男は言っていた。
　とにかく宮内相のイスカリオットが納得

したということは、つまりユアンもそれを了承しているということだ。ハンニバルを推挙することで、メサイアとしてはタイタスが母国をそのまま捨ておくつもりではないことを、ユアンに遠回しに伝えておいたつもりだった。
「…そういうことか」
「そうやって準備はしておくべきだと思っていた。だが…思ったより早かったということかな」
　メサイアが呟くと、タイタスは神妙な顔で頷いた。
「あっちはもう…ひでえ状況だ。俺さまも詳しく知ったのは昨晩だ。ハンニバルを問い詰めたら、かなり際どいことになっているとわかった」
　タイタスが『あっち』と口にするときは、たいてい亡国アディールのことを指す。為政者は取って代わられ、国の形はもはや無いも等しかったが、そこに暮らす人々が消

えたわけではない。彼らは今もアディールの民なのだ。

近隣の巨大国に呑み込まれ衛星国となった祖国は、現在戦乱の最中にあった。宗主国の尖兵として、自らはなんの利益もない、他国との戦争に巻き込まれているのだ。国を護るという高揚感も義務もないままに、亡国の民はただ戦場へ追い立てられていく。彼らの希望はただ一つ、他国に生き延びた王子の存在だ。それがタイタス・ラム――シャハル・アディールなのだった。

かつて祖国を巡る陰謀にタイタスが巻き込まれた時、それらを率先して解決したのが犬猿の仲であるはずのメサイアであった。そして陰謀が一応の終結を迎えたときに、タイタスは決意したのだ。自分の出自がどうであれ、一度背負ったルーメンの領民を変わらず背負い続けていく。しかしいつかは祖国のことも救ってみせると。

その際に頼るべきなのは、やはりメサイ

ア・リードしかいないだろうということも、彼にはわかっていた。タイタスにはそこへ至る戦略――メサイアという天才の見識と才能がどうしても必要なのだ。

だがその大事業に取りかかるのは、何十年も先に違いないと彼らは思っていた。彼らが先に護るべきはマグナ・エンデトリアであり、ユアン・ジュノー＝イグニスである。問題が山積した帝国を放っておいて、見たこともない祖国にかまけることなど出来はしないと、タイタス自身が納得はしていたはずなのだが。

「そこまで…状況は悪いのか」

「兵士に取られた連中が死ぬのは…冷たい言い方にはなるが、予想はしていた。奴らの主人が絡んでいることだし、それは俺にもどうしようもできねえ」

言葉の端々から悔しさが滲(にじ)み現れている。

アディール人の現在の主(あるじ)は海の向こう

の強大国だ。その相手と争うほどの力など、タイタスは持ち合わせていない。むしろエンデトリアの臣民を戦乱に巻き込みかねない話であって、ともかく今現在は手の出しようがなかった。

「けど…戦場から持ち帰った疫病が蔓延(まんえん)して、家で待っていた女子供や家畜までバタバタと死んでいると聞いた。宗主国がどうのとかいう以前に、今の傀儡(かいらい)政権がそれに対してなんも手を打てないでいるらしい。俺さまが我慢ならねえのはそこなんだ」

打てる手を打たない間に、弱い子供から死んでいく。このままじゃあいつらは滅んじまう、とタイタスは絞り出すような声で言った。

祖国の人々が今こうしている間も、たった一人の王子を待ち望みながら命を失っていくこと、彼にはそれが辛いのだろうとメサイアは思った。そして残酷にもアディールの民に《希望(シャハル)の星》――王子の存在を知

らせたのは自分なのだ。
「実際には…あと何年待てる？」
　メサイアは小声で訊ねた。
「待て…ねえよ。あえていうなら、できるだけ早くだ」
「だがユアンに他国まで抱える余裕は無い。七侯すらまだ揃っていないんだ、この国には」
「だからユアンには言えねえし！お前にこんな相談をしている時点で、あいつを裏切ってるかもしれねえっていうのは、俺さまにもわかってんだよ！」
　吐き捨てるように言いながら、悔しそうに唇を歪め、タイタスは隻眼を押さえた。その目尻には微(かす)かに光るものがある。
「おんなじ理由で…ハンニバルも俺さまに報告しないで隠してやがった。もともとアディールの情報を集めてるのは奴なんだよ。向こうの事情を一人で抱え込みやがって、ずっとなんか辛(つら)そうでよ。そん時はま

だ、俺さまには理由はわかんねえままだったんだが。聞いても答えねえし、休暇に来ても俺さまから逃げ回っていやがった」

たしかにハンニバルは年越しの休暇の間、決してタイタスと二人きりになろうとはしなかった。始終主君を避けるようにして過ごしていたはずだ。

ハンニバルに追いやられたというタイタスが、一人で屋根裏の寝室を使っていたのをメサイアは思い出した。休暇に来てまで馬鹿王子の面倒を見るのは御免だと、そうハンニバル自身は周りに説明していたのだったが——

「単にお前がうざかったのかと思っていたら…そういうことだったのか」

「最後の夜だった昨日、飲ませまくってとうとう白状させてやったんだぜ」

ハンニバルは大陸生まれのわりには、さほど酒に強くなかった。ウワバミのようなタイタスはさておき、メサイアよりも弱い

ほどだ。
「しかしアディールのためになるべく早く動く…としたら、エンデトリアは巻き込まず、僕らだけでなんとかするしかないな」
　そう言いながらメサイアはイスカ＝リンナム領の民のことを考えた。秋の事件の後、メサイア自身領主として、新しい一歩を歩み始めたばかりだ。それはタイタスも同じだった。
（今僕らが自領を放って他国にかまけていいわけはない。しかし――）
　目の前で死んでいく人たちがいる。それが自国の民であれ、他国の民であれ、やはりそのまま放ってはおけない。
「僕たちが干渉できるタイミングがあるとすれば――」
　そう言うとタイタスがメサイアをまっすぐに振り返った。
「やれるのか…？」
「待て、やれるとは言っていない。だが可

能性がないわけではない」
「どうすればいい…？おい…！」
　タイタスがテーブルを叩いた。上がった埃と振動で、ランプの炎が揺れながらジリジリと音を立てた。
「僕らはまず『喧嘩別れ』する必要がある」
「はあ？喧嘩ならいつもしてんだろうが」
「そうじゃない。本格的に仲間割れをしたと見せかけるんだ。理由はいくつかあるが、まず『二人の七侯が共謀して他国に介入した』とエンデトリアの民に誤解させてはいけないからだ」
　帝国憲章によって七侯が独自に他国に介入することは禁じられているし、下手を打てば外患誘致の罪に問われかねない事態も起こりうる。
「そうなれば確実にユアンが糾弾されることになる。七侯から帝国に対する裏切り者を出したとね」
「俺らが何をしたところで、ユアンが悪い

わけねーだろうが！」
　語気を荒げながらも、タイタスは理解したという表情になった。ユアンと彼を取り巻く七侯は、その若さと経験不足ゆえに、非難されがちな立場にある。そのことは当事者として、タイタスもよくわかっているからだ。メサイアとしても、自分たちのやりたいことのために、少しの瑕（きず）さえユアンに負わせるつもりはなかった。
「幸いにして僕らは今、二領間で解決の不可能な問題を抱えている」
「囚人の処遇に関して…ってやつだな」
　タイタスは腕を組み、頷いた。
「そのことで我々が決着が付かずに物別れになったと、まずは見せかけるんだ。それでも疑う者はいるだろう。あの仲の良かった七侯同士にいきなり亀裂が入る…などとは、到底信じられないとね」
「ハア？いつ俺さまがお前と仲良くなったんだ」

そうタイタスが言い放ったので、思わずメサイアは頭を抱え込みたくなった。自覚がない相手ほど、始末に負えないものはない。

本気で友だと思われたくないのならば、こうやって呼び出して助けを乞うたり、夜の森に単身で駆けつけて命を救ったり、怪我で弱った相手を気遣うようなことなど一切すべきではなかったのだ。

イスカ城主の寝室に居るタイタスを見かけた主治医のディシトリアスなど、二人がそれ以上の関係なのではないかと密かに疑っているようで、メサイア自身いろいろと歯がゆいところではあった。

「僕とお前が本当にどうかは置いておいてだね。…ともかく、僕らはなるべく距離を置き、同時に同じ場所に立たないようにするべきだ」

二人が顔を合わせれば、いつものように喧嘩が始まってしまうだろう。そうなれば

その様子を『喧嘩するほど仲が良い』などと、周囲に微笑ましく観察されてしまうのは確実だった。とくに最近の皇城の侍女や下女たちときたら、それを楽しみにしている風潮すらある。
「つまり…『絶交』すればいいんだな？」
「子供っぽい言い方だが、そうなるな。そうしておけばついでに公共の機会に顔を出す機会も減り、その分、目立たないように様々な準備も行いやすくなるだろう」
「アディールに手を貸す準備…な。けどそのままじゃ準備に終わっちまう」
「そうだ。だから『決闘』を行うのだよ。僕らの争いがいよいよこじれたように見える時期を見計らってね。七侯の私闘は禁じられているが、そんなことは構わない。とにかく決闘したという既成事実を世に広めることだ」
「決闘って。まさか性悪、俺さまに勝つ気でいるんじゃないだろうな」

「もちろん僕は勝つだろうが、問題は勝敗ではない。生死を賭けた決闘の果てに、僕らは共に大怪我を負った…あるいは死んだと世間に思わせる。そうやって二人が再起不能に陥(おちい)ったという状況を作ることが肝心なのだよ。そこでいったん僕らは七侯の地位を降りる。こうすれば二人が同時に表舞台から消えても不思議には思われないだろう」

その後は名前を変え、こっそり大陸へと渡る。あとは野となれ山となれ、だ。

「ユアンを騙(だま)すのか」

タイタスは顔を顰(しか)めていた。いかにも不満げな表情だ。ユアンや仲間たちに嘘をつくのが嫌なのだろう。しかしタイタスは最後には了承するだろうとメサイアは思った。自身の好き嫌いを曲げてでも、弱い人々を護る。そんな騎士の心が彼にも宿っていると、知っているからだ。

「もちろん、気に入らないというなら他の

方法を模索するしかないが…いずれにせよエンデトリアを巻き込まないためには、このことをユアンたちには黙っておくべきだと思う」

そうして――

しばらく迷った末(すえ)に、タイタス・ラムは頷いた。

彼らは選んだのだ。二つに分かれた道を歩いて行く。その道が再び交(まじ)わるのは、彼らがこのエンデトリアから姿を消す、その時にほかならないと。

◆

「やっぱりメサイア…俺の前からいなくなるつもりだった…」

大きな目を見開き、唇を震わせる主(あるじ)から、メサイアは視線を逸らした。

「陛下は誤解しています…とにかく放して下さい」

メサイアは怪我をしていない方の手で、しがみつくユアンの手を振りほどいた。それでも捕らえようとしてくる彼の頭を、手のひらでぐいぐいと押し返しながら、メサイアは話を続けた。
「向こうで出来る範囲のことをやったあとは、もちろんエンデトリアに帰ってくるつもりでいました。終わったら皆に事情を話し、七侯に戻れないまでも、自領のために働こうとは思っていたのです」
「おいユアン、もういいだろ…放してやれよ。お前、ちょっと変だぞ」
とオーガストが呆(あき)れたように言うと、
「ユアンはメサイアに関してはいつもちょっと変ですから…」
とザンが小さな声で答えた。
「ともかく貴方がたは二人だけであの国に行ってしまわなくてよかったのです。私にはその未来はあまり明るいものだとは思えませんでした」

「だけど…二人があそこまで頑(かたく)なだった理由は、ようやくわかったよ」
　決闘の翌日、皇帝の私室に集(つど)った面々は、いったんは一様に安堵の表情を見せた。だが同時に、一同に突きつけられた現実はかなりの難問で、再び場の空気は重く沈んだ。
「たしかに帝国内のことならば皆でなんとかできるけど、外国のことになってしまうと、なんだか俺の立場も複雑だ」
「まあそりゃ複雑だよな、お前は皇帝その人だもの」
　ユアンの感想にオーガストが首を竦(すく)める。
「しかしもう少し早く、話してくれてもよかったんですよ。自分たちだけで抱え込むのは良くないことです」
　と、アデルがお茶を淹れ直しながら言うのに、
「言ったところでどうしようもないことです」

メサイアが首を振った。
そうじゃないと反論しようとしても、ユアンにはどう答えて良いのかわからない。外国のことに口を出すには、やはり自分や皆の立場は複雑すぎるからだ。そのことを理解しているのか、相変わらずタイタスは窓辺に座り、会話には加わろうとしなかった。
（タイタスが一番苦しいだろうな…）
無理に話しかけることも出来ず、ユアンの胸には焦りばかりが積もっていく。
「疫病か…」
と低い声で呟いたのはギデオンだった。彼は去年、疫病に似た症状で領民たちを何人か失ったばかりだったのだ。結局それは疫病ではなくテロリストたちの流した毒だったのだが。
「この場にハンニバルがいないのが悔やまれるな。彼が全てをタイタスに白状したとは考えにくい。おそらくもう少し詳しい事

情を知っていることだろう」
　そう言ったのはロレンスだ。彼は先ほどからユアンを援護して、さりげなくメサイアの行く手を塞(ふさ)いでいる最中だった。
「詳しい事情など知ってどうするというのですか、ロレンス」
　メサイアがちらりと騎士団長を見やった。その視線は鋭い。
「ユアンはこれを放ってはおかないだろう」
　彼がそう答えたので、ユアンは大きく頷いた。
「ロレンスの言うとおりだよ。どうしたらいいかはまだわからないけど、俺もなにかしたいと思う」
「タイタスには口に出せないことでしょうから僕が言いますが、アディールの状況に関しては聞かなかったことにして頂きたい」
　とメサイアがきっぱりと答えた。
「貴方たちの耳に入れたくなかったからこ

そ、僕たちはここまで抵抗するしかなかったのです」
「それはできないよ、メサイア」
　ユアンはメサイアの前に立ち、抵抗するように見上げた。
「俺は皇帝になるとき、タイタスに約束したんだ。《真の皇帝》…とまではいかないかもしれないけれど、なるべく小さい子たちの命を護っていくと」
「ユアン…！お前…」
　窓際のタイタスが、初めてユアンの方を見る。
「陛下が護らなければならないのはこの帝国の子供たちです」
　メサイアがユアンを見下ろしながら言った。一見冷え切った目つきのようにも見えるが、そこにはわずかに懇願の色が混じっている。
「もう一度言いますが、帝国として手を出すことは僕が許さない。それはマグナ・エン

デトリアの臣民に対する裏切り行為に他(ほか)なりません」
「あんたが言いたいのはつまり…大陸の連中がエンデトリアの介入に気が付けば、こっちに火の粉が降りかかるから、それが帝国の危機に繋がるかもしれないという話だろう」
　オーガストがアデルの淹れ直したお茶を口にしながら言った。
「イスカリオットも反対するだろうな…」
　ユアンは考え込むように唇を噛んだ。
　宰相代理のイスカリオットはこの場には来ていなかった。七侯とロレンス、それに七侯に内定したアデルだけが揃っていたが、場はどっちとも付かない雰囲気だ。ユアンとしても臣民を危険に巻き込んでまで、他国に干渉することはためらわれる。
「一応聞いておくが、探偵君とタイタス君は現地に潜り込んで、疫病をどう食い止めるつもりだったんだ？」

ギデオンが顔を上げた。
「戦地から持ち帰って爆発的に広がったということは、遠征先の土地に昔からあった風土病ということも考えられます」
とメサイアは淡々と答えた。
「もしもそうであれば、その地に治療法や感染を防ぐなにかの知恵が伝わっている可能性があるのではないかと思っています。あとはイスカ領内に残る血統復古党（サングイニスト）の製薬技術を持ち込むことも考えていました…それでも食い止められるかは賭ですが」
「ふむ…製薬工場なら、ソレム領内でも使えそうなものがいくつかあるが。しかし疫病の正体がわからないことには、研究にかかることすら不可能だ」
考え込むギデオンの横で、オーガストが首を振る。
「いくら研究のためでも、病原を持ち込むことはごめんこうむりたいね。うちはこれでも海の玄関口として、防疫にはかなり気

を使っているんだ」
　彼が領主を務めるパルヴァ＝ノーテ領は他国との貿易が盛んだが、それなりに苦労も多いことをユアンも知っている。
　臣民を巻き込まずに、自分たちに出来ることがあるのか――それぞれが思い悩み、居間には重い沈黙が満ちた。
「ユアン」
　誰かが近寄る気配がして、ユアンは振り向いた。
「タイタス…」
「もういい、性悪を巻き込んだのも俺さまだ。よかったら俺さまを七侯から罷免(ひめん)してくれよ。自由になれば、俺さまもあそこへ飛んでいけるんだ」
　タイタスの瞳には、どこか諦めのような鈍い光が宿っていた。ユアンの心臓が大きく脈打つ。
「それは…」
　ユアンがためらっていると、いきなり横

で声がした。
「笑わせるなよ」
　メサイアの言葉に、タイタスの目がスッと細められる。
「なんだと？」
「たった一人で乗り込んで、お前になにが出来るというんだ？がむしゃらに民の間に分け入って、同じ病気にかかって死んでしまうのがオチではないのか」
「てめえ！」
「メサイア！」
　ユアンが叫ぶ前に、タイタスが彼の襟元を掴み上げていた。
「そんな救世主もどきなど、僕は見たくない」
「メサイア…」
　唸(うな)り声を上げたタイタスの瞳には、強い光が宿っていた。
「僕はお前が王者としてあの国に戻る姿が見たいのだよ」

居間にいる者がハッとしてメサイアを見る。タイタスはあっけにとられ、しばらくしてふと首を傾(かし)げた。疑問符がその頭の上に見えるようだ。

「僕の認めた男が…野垂れ死にしていいはずはない」

メサイアの瞳は不思議な色を放っていた。紫の瞳に情熱と冷静、憧憬と支配欲が交互に現れては消える。

「なに…」

「冷静になって、もう少し待ってくれ、タイタス・ラム。そうしたら僕が…」

全力をあげて本物の英雄にしてみせる。

それは魂の告白にも近かった。自分の心はお前に囚われているのだ、そう告げたに等しい。

ユアンはタイタスの黄金色の瞳の焦点が、急に縮んだり、揺れたり、広がったりするのを見つめた。彼もメサイアの求めに激しく揺さぶられているのだ。

「だが…俺さまはやはり…」
　弱々しくタイタスが呟いた。彼の耳には見知らぬ民の泣き声が聞こえているのだろう。その声は皆シャハル、とタイタスを呼んでいる。
「英雄…か」
　ユアンの小さな呟きに、メサイアが怪訝（けげん）な顔をした。
「ユアン…？」
「あのさ…できるなら、なんだけど。干渉しないでアディールの人たちに情報だけ伝えればいいんじゃないかな。治療方法とか予防方法はなるべく俺たちが調べてさ」
「情報を伝えたら、干渉したことになると思うよ、ユアン」
　アデルが困惑した声で言う。
「んっと…でも前にもやったようにはできないかな」
　思考が追いつかないまま、ユアンは言った。なんとなく頭に浮かんだことを懸命に

伝えようとするが、なかなか具体的に言葉になってくれない。
「もしかして…」
　と静かに言ったのはザンだ。
「歌や物語のことを言っているのですか、ユアン」
「それだ！」
　とオーガストが叫ぶ。
「あの『英雄譚』…！タイタスの半生を大陸まで知らしめたのも、歌と物語による英雄譚だった」
「そうか…娯楽が広まったという形なら、たしかに干渉呼ばわりはされないで済むだろう」
　ギデオンが顎髭（あごひげ）に触りながら唸（うな）った。
「啓蒙とは言われるかもしれないですがね。アディールの政治体制は今の私たちには覆せないが、とにかく感染の予防の知識さえ広まれば、助かる人数が一気に増えるはずです」

息を弾ませるようにアデルが言う。
「けどここにいる者たちは、もうすぐオウラードに向かうのでは？」
「仕事は道中にでもやれると言ったのは、イスカリオットだよ、兄ちゃん」
ユアンは答えた。
「連絡網や事務処理も道中にやれるよう、手配を組んでくれているんだ」
「しかもオウラードには英雄譚の書物製作に力を貸してくれた工房がある！」
オーガストが立ち上がる。
「もちろん、フェイもアドニス伯父も、俺の母も協力は惜しまないだろう」
そう言ったロレンスに、ユアンは微笑み返した。
「ちょうどオウラードに向かう間際だったなんて！運がいいよね、俺たち」
ユアンの輝くような笑顔を見て、ロレンスの口元が綻(ほころ)ぶ。
「ユアン…」

©TSUNO/TOKI/KAISEN ©aikawayou

なにか言いかけたタイタスに、ギデオンが歩み寄り、背中をどやした。
「お前も当然オウラードに行くことになるが、その前にハンニバルへの指示を出しておけ。疫病や現地の情報は、やはり彼に集めてもらうことになるからな」
「僕も南西諸島の情報筋に声をかけておくよ」
と言いながら、オーガストはメサイアに手を差し出した。
「もちろん情報をまとめたり、翻訳はまた僕たちですることになるけど？…いいか、宰相殿」
メサイアは頷いた。オーガストの手を握り返す。
「よろしく…頼みます」
居間の中はいっせいに騒がしくなった。
そこにあるのは希望だ。
わずかな光だが、それでも求め続けて良かったとユアンは考えた。無様（ぶざま）にあがいて

決闘などと似合わないこともしたし、二人には強引なこともした。それでも諦めないで良かったと、そう本気で思える。

ザンが「今回はたぶん楽譜が書けると思うのですよ」と言い、「ザンさまの新曲がまた聞けるのか？」とタイタスが問う。

ユアンはようやく――タイタスの無邪気な笑顔を目にすることができ、自らも久しぶりに笑い声を上げた。

《残雪のステイルメイト　終》

まとめ本 2019/04 発行済

仕様や書き下ろし内容などは BOOTH のページを参照してください。

千年迷宮 SS「蒼の国の兄弟」は 2019/05 より更新予定です